
花屑

霧香 陸徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花屑

【Nコード】

N3891D

【作者名】

霧香 陸徒

【あらすじ】

気が付けばそこは荒野だった・・・何も秀でていることの無いただの高校生だった俺は、成り行きで軍隊に入ることになった。その隊の名前は「花屑」。しかも、此处は俺の居た世界じゃない？そんな世界で出会った一人の少女「芽衣」。彼女との出会いは戦場の荒野だった。SFミリタリーラブストーリー？

第1話「MISSIONは掴み取る心」（前書き）

これが本編ですが、プロローグとして別に5個程話があります。
それを読まなくても大丈夫のようにはしてありますが、気になりま
したらゴメンナサイ。

第1話「MISSIONは掴み取る心」

辺りには何も無い荒野。

街で生活しているとかかなり馴染みのない風景なんでピンと来ないだろう。

だが、そんな想像力の貧困さなんて知ってこっちゃない。なんてたってその当事者：つまり今その荒野なんて馬鹿げた場所に立っている状況でそれを悠長に説明している余裕なんて無いからだ。

良く考えてみるよ。砂場で遊んでいたらいつの間にか辺りが砂漠になっているとかになってみる。冷静になんか居られるハズは無いだろう？

つまりだ。今、この馬鹿げた場所に立っていないといけなくなつた経緯は順を追って説明するとして…

さて、どうしたものか……。

ああ、荒野つて言つたが周りに完全に何も無いわけは無いぞ？
壊れた人形や良く分からないな機械なんかは無数に転がっているから寂しくは無いな。もつとも、その人形が「自分の5倍以上の大きさ」だったりするんだからサービス満点だ。…抱いて寝るのは無理だがな。

「……あの」

なんだ？ 今どうしようも無い非現実さに呆れてる所なんだが…
…気安く話しかけないでくれないかな？

ん…？

「……〇〇少尉ですか？」

……………何？しょうい？何を言っているんだこの『少女』は…。

いや、見た所軍服を着ている所を見ると軍人のようだが…。この状況には似合い過ぎてるな…。

それに…今もしここで「NO」と言ってみたとするとどうなるだろうか？常識では考えられないような状況で、常識で考えてはいけない。違うと答えた瞬間に打ち殺されているかもしれない。そんな状況も「あり得る」。

だって、此处は…今まで知っていた世界とは違うのだから…。

「君、名前はなんて言うんだ？」

「……………」

返答は無い。ただ、無言で先導するかのように前を歩いている。その背中を見つめながら「小さな背中だ」と思った。先程「似合いすぎている」と言ったが、それは「軍服が」であり「彼女自身が似合っている」かとは別の話だ。見た所まだ年端もいかない少

女のようなが・・・。

「なあ、聞こえてるんだろ？ 名前を聞いているんだけど？」

「・・・・・・・・それは上官としての命令ですか？」

上官？ ああ、そういえば少尉だと言ってたな・・・。 兵隊の階級にはあまり詳しくないけど確かそこその階級だった気がする。 大将、中将、少将、大尉、中尉、少尉で六番目だっけ？ 間違っているかもしれないが・・・。

「別にそういうわけじゃないが・・・」

「・・・・・・・・そうですか」

何だ？ 答えたくないのだろうか？ まあ、名前を聞いたからといって別に何かあるわけじゃない。 それより聞きたい事はほかにもある。

「これから、何所へ行くんだ？」

「・・・・・・・・報告書はお読みになられていないのですか？」

・・・・・・・・まずったか。 そんな物は読んでいるわけがない。 なんとか少尉本人じゃないのだから。 ・・・ここは一芝居打つしかないか・・・。

「いや、君が正しく任務を理解しているか聞いているんだよ」

「・・・・・・・・」

また黙ってしまった。　なんだこいつは？　人の皮を被ったアンドロイドか何かか？　何かのバグで話す事も出来なくなっているというのかもしれないな。

「・・・・・・・・これから私達の基地へと案内します。　そこに着任すると聞いておりますが・・・・・・・・」

基地？　着任！？　軍隊に入れて事か？　・・・・・・・・マズイな・・・・・・・・
このまま連れて行かれたら偽物だとばれてしまっただろうな・・・・・・・・

「・・・・・・・・少尉？」

「あ、いや、すまん。　了解した」

こちらの返答が無いので怪訝な顔をして覗き込んでくる少女。
危ない。　下手な素振りを見せると速攻でばれてしまう。

・・・・・・・・さて・・・・・・・・　どうしたものか・・・・・・・・

現状は少し分かった。　少尉と呼ばれる者が居て、ソイツはこの少女の所属する部隊だか何かに着任する予定だった。　それを迎えるにきたのがこの少女というわけだ。　だが、少女は少尉の顔を知らなかった。　だから、今連れて歩いている者が本当はどんなヤツなのかは知らない。

参ったねこれは・・・・・・・・

「俺」は「ただの高校生」だったのにな。

こんな荒野等絶対に無い「平和な時代」のだ。

俺は普通の学校の普通の高校生だった。

勉強はそこそこ。運動はまあまあ。容姿は・・・聞くな。まあ、デブだとか、ハゲているとかは無いからそんなに酷い事は無いかも知れないが、特段カッコイイわけじゃない。

そんな学生だ。

特技は・・・。

.....

なあ？ 特技って何だ？ 良くあるよな？ 履歴書だとかそういう所に書く「特技」ってやつ・・・。あそこに特に運動部に入っているわけじゃないただの一般人に書く余地はあるのか？ あえて書くとなると「健康」ぐらいだろう。

人より秀でている特技を持っていない奴なんて多分いっぱい居るだろうからあれは差別用語だと俺は思うんだ。うん。決して俺が面白くない人間だというのは露見しているんじゃないからそこは間違えないでくれ。

そんなわけで俺はいたって普通の人間だ。反論は却下だ。

だからそんな奴に「軍隊に入れ」なんて言うのは間違っているだろう？

俺も事実を説明して、何とか生かしてもらおうと思ったんだ。

普通ならば、誠心誠意を込めて話せば分かってもらえるハズだろう？

だけど、この世界はそんな所まで狂っているようだ。

「少尉。貴方はこの「花屑」NO・6の隊員として配属されます。TAM・06の機乗者として・・・よろしくお願いします」

少女に基地に連れて来られ長髪の落ち着いた雰囲気のある女性に面会した。

結局少女の名前を聞き逃してしまった。まあ、彼女にはまた会える予感がしたのでその時は気にもしなかったが…。

それより…

何の何番がどうだって？

「ちょ・・・待ってくれっ！？俺はこの世界の人間じゃないんだぜ！？それは今説明したでしょう！？」

そうなのだ。俺はこの長髪の娘が顔に似合わず上官だと認識して事情を全て話す事にしたのだ。状況が状況だけに笑い話にされてしまう可能性の方が高かったが…。先程の少女といい何か「警戒心が緩む」雰囲気を持っていた。

先程の少女の場合は傍目には「冷たく感じてしまう」だろう。だが、何かそんな一面だけを見て判断出来そうなのがしなかった。

なんというか…こんな軍事施設には有り得ない程不釣り合いな言葉だがアットホームな感じた。

「あ、ごめんなさい。 ええと・・・ドヨドヨさんでしたっけ？」

「そんな擬音みたいな名前じゃありません…。 ああ、それより樟葉さんでしたかね？ 俺としても意味が分からないんだが、世界が俺の知っている世界とはまるで違うんだ。人型のロボットなんてせいぜい歩くか踊るかぐらいの事しか出来なかった。そこは明らかに違う」

「…ドヨン少尉、私は菜乃という名前があるの。 名前というのはとても大事なの」

言ってる事と言ってる事が違う。 …いや、「言おうとしている事と言っている事が違う」が正しいか。 俺の名前はドヨドヨ君でもドヨン君でも無い。

「・・・もう好きに呼んでくれ！ そんな事より菜乃さん！ アンタ人の話を聞く気があるのか！？」

「…………ええありますよ。 ただ、貴方も理解しなくてはな

りません。 此処はもう貴方の住んでいた世界では無いのです。 そんな世界で過去の世界の事を言って何の意味があるのですか？」

「クッ……！」

先程まで妙に呑気な女だと思っていたが、その態度が急変した。口調もハッキリとしていて、その眼差しも優しさの欠片さえ無かった。 それをあえて何かに例えるなら御誂え向きな言葉があるが……軍人の目。 ……洒落にもならずそのままだが、その目を見た瞬間にそう思ってしまったのだから仕方が無い。

「本日の予定では 少尉を我が隊に迎えて、戦力の増強を図る予定でした。 ですが、貴方が現れてしまった。 貴方は 少尉の代わりに現れて、代わりに 少尉は消えました。 その意味が分かりますか？」

「………分からん。 教えてくれ」

「……いいですか。 貴方があの場所に現れた、その代わりに一人の人間が消えた。 それだけ見ればプラスマイナス0ですね？」

「おい……まさかアンタ……」

「やっと察しが付きましたか？ 貴方が何者なんだというのは問題ではありません。 今私達は一人でも多くの戦力を欲しております。 お分かりになりましたか？」

「……拒否権は？」

「もちろんあります。 ただ、戦闘が繰り返される地でサバイバル

ライフをお楽しみたいなら止めませんよ？」

「・・・・・・・・」

「ああ、言葉が悪すぎましたね。戦わずして死ぬか、戦って生き延びるかというのはどうですか？　ちよつとカッコイイなの」

「・・・・・・・・糞野郎」

「あら？　野郎に見えますの？　よゝど少尉」

「人を卵みたいな呼び方するな！」

「えゝ先程「好きに呼べ」って言ったのは嘘なの？」

「・・・・・・・・もおい！　分かった。どの道右も左も分からないだしやるだけの事はやってやる。それでいいんだろう？　ええ！？」

「了承」

「・・・・・・・・何処のお母さんだアンタは・・・・」

結局、樟葉菜乃という女の説得(?)に負けて俺は軍隊の、しかも少尉として入隊する事になった。ちなみに名前はその「居なくなった」少尉と同じでは都合が悪いという事で俺の本名のままでいらしかった。それでも・・・・決して正しい名前で呼ばれなかったが・・・・。

「しかし、得体の知れない者を入隊させるなんてアンタ滅茶苦茶だ

な・・・」

「あら？ 確かに正直良く分からないの。でも、貴方は悪い人には見えないし、それにこれぐらいで動じてたら隊長なんて務まらないの」

「恐れ入ったよ全く。あ、そうだ。一応アンタって上官になるんだから敬語にした方がいいのか？」

「いいえ？ ウチはそういう所はゆるゆるなの。形的には上下の差はあるけど、それ以前に私達は仲間なの。そこに遠慮は要らないの」

「ふむ。その意見は俺は好きだな。了解ナノ隊長。呼び名だけは形式でさせて貰うぜ？ でないと忘れそうだから」

「うん 改めましてようこそ！ 花屑へ！」

俺のその日の一日は、良く分からないままに一つの形に纏まった。

・・・これで良かったのだろうか？ やはり話を断ってどうにか生きていく術を探した方が良かったんじゃないのか？ それか元の世界に戻る手立てを探すのも良いな・・・。

今更こんな事言っても空想だけが一人歩きするだけで不毛だが・・・。

俺はTAMという人型兵器だか何かのパイロットとして使われる

わけだ。

そういえば……。最初に会った少女はこの基地の関係者なんだよな……。此処にお世話になるんだし、名前ぐらい知っておいた方がいいかもしれない。

そう思っただけ俺は慣れない基地の中をウロウロと歩くと目的の者をすぐに発見する。

廊下の窓から外を眺めている後姿を見つけた。

「よう。ええと、今日からやつかいになるんだが……」

出来るだけ好意的に話しかけたつもりだったが、小さな子だったし、あまり怖がらせても困るし……。いや、相手は俺より先輩の軍人か……。全然見えないけどな。

「……………」

おいおい。こちらを一瞬振り返っただけだよ。他に何か言えよ……。

俺、嫌われてるのか？

「なあ、今日から仲間になるってのにちょっと無愛想過ぎやしないか？俺がお前に何かしたか？」

そう言つた少女は振り返って首を左右に振る。違つらしい。

しかし、いいから言葉を口に出して言えよ・・・。

「じゃあ、どうしてだ？ 話するのが苦手か？」

「・・・・・・・・・・違う」

先程会ってからそんなに間が空いていないが、何故か久しぶりに声を聞いた気がする。声自体は可愛らしいんだが・・・・。如何せん無表情でとっつきも悪い。

なんだこの女・・・・。

「せめて名前ぐらい教えてくれよ。不便だろ？」

それでもなおも食い下がる俺って結構しつこいか？

いや、別に口説いているわけでも無く、ただ名前を聞いているだけなんだから俺が正しい。正義だ。ジャスティスだ。

「・・・・・・・・・・め・・・・い」

「ん？ めい？ 今何て言ったんだ？」

とても小さく少女が呟いたので俺はそんな2文字の単語しか聞き取れなかった。 なんと言おうとしたんだ？

「・・・・・・・・名前」

「は？・・・・・・・・メイってのが名前なのか？」

コクン。

頷いた。 どうも元々2文字しか喋ってなかったらしい。 全く・
・扁桃腺が腫れた子供かコイツは・・・。

メイか・・・。 中々良い名前じゃないか。 可愛い。

「そうかそうか。 俺は っておいっ!？ 俺にも名乗らせろ!」
「？」

「メイ」は名前を言った事で満足したのか、それとも俺が無性に臭いからか分からないがすぐに踵を返して歩き出した。 ・・・念の溜に言っておくが別にワキガとかじゃないぞ？ 今のは単なる比喩だ。 本当に臭くなんて・・・

「・・・いや、匂うな」

そういえば今日はまだ風呂にも入っていなかった。 此処は風呂はあるんだろうか？

「おーい！ 風呂とか何処だー!」

呼び止めても立ち止まる気配が無いのでとりあえず風呂の場所を聞こうとメイの背中に叫ぶ。 すると、メイは立ち止まり俺を指差してきた。 ・・・いや、正確にはその後ろにあるんだろうか・
・お前はいいから喋れホントに。

「サンキュー!」

まあ、それでも教えられた事は確かなのでメイに感謝の言葉を送った。

俺の一日こうして終わり、次の朝を迎える・・・。

・・・というのが一番理想だったに違いない。

あまりこれ以上面倒な事が起きるのも疲れてくるからな。

もちろん、今日が始まった時点からそんな俺のささやかな平和の願いは粉碎されて粉々だったのだが・・・。

何故が長い一日になる予感がした。

【花屑 第一話 終わり 第2話に続く】

第1話「MISSIONは掴み取る心」（後書き）

作者のブログにて登場キャラクターのイラストもあります。

良かったら寄って试试看て下さいね〜

『きまぐぷ』（ブログ）

<http://9922.at.webry.info/>

第2話「ACTIONに舞い踊れ体」（前書き）

俺はただの高校生だったわけだが……。だから軍隊なんてものはまったく規定外なわけで……。

でも、この隊がある意味規定外なんだが……。
隊長は若い女だしな。

特に物語が加速することもないミリタリーストーリー第2弾

第2話「ACTIONに舞い踊れ体」

湯に漬かる事を考え出した人というのは誰なのだろう。きつと
その人も疲れていたのかもしれない。

疲れた体を暖めつつ癒してくれる効果的な行為だと思う。

「風呂」というものはそれだけ良いものだ。
それは分かっている。

だからと言って、これはなんてエロゲ？

「ほらほら、ドンちゃん近こう寄れ」。そんなに放れるとお姉さん
悲しいぞー？」

「ドしか合っていない！ なんなんだアンタは！？」

風呂は「大浴場」と書かれた木の看板が掛かっていた。その「
大」という表現にピッタリと合う規模の浴場で、単純に広さだけ見
れば25mプール程の広さがあった。

そんな中にたった二人しか今は入っていない。

俺と・・・見知らぬ女だけだ。

「たはは」。香良洲 魅夜少尉とは私の事だよドンパ君」

「少尉？ ああ、なら俺と一緒にじゃないか」

カラスミヤと名乗った変な人は少尉らしい。同じ階級だという

事は特に遠慮する必要は無いのかもしれない。

いや、それより同じ湯船に女の子が入っているのが問題だ。

いいか？　こんな状況を羨ましいと思うんじゃないぞ？　見ず知らずの男女がお互い裸で居るといのがどれだけ気まずいか想像に易しというものだ。　もちろん間違いがあるわけじゃないのだが、意識してしまつて落ち着けるわけがない。

それに、この女は何を考えているのかさつきから肘があたるくらいまで接近してくるんだぞ？

理性が爆発しても俺のせいじゃないだろう。

湯船に漬かっているので流石に見えないがな。

「そう〜一緒なのだよ。　だからこの後火照つた体を更に熱くさせても問題無いと思わないかな？」

問題しか見つからない事を言いながら、彼女は俺の腕に最後の接近を試みてきた。

その腕に「暴走ボタン」と書いてあるかもしれないのに・・・。

・・・

・・・？

・・・！・・・。

ああ、なるほど。

これは問題無い。

「ん？」

ミヤという少女は多分生物学的には女なのだろう。だが、それが必ずしも絶対では無い事を俺は認識した。

俺の腕に当たる感触がなんというかペタッという感じだったからだ。それがふにいだったらファイナルフュージョン承認していたかもしれないが。

まあ、だからと言って密着している事には変わりはないわけだが。

俺はこんな事を言えば白い目で見られるかもしれないが「大きい方」が好きだ。

「・・・貴様・・・。女慣れしているのか!？」

「まさか。ミヤさんに慣れただけだ」

分かりやすいと言えば分かりやすいしな。元気な子だけど、俺はつるぺたには興味は無いだけだ。

「どういう意味だ!？ 会ってまだ間もないのに・・・。まさか!？ BL嗜好だったりする!？」

「ばかもん。誰が男色趣味だ。なんていうか、ミヤさんも警戒しなくて良い雰囲気だったからだな」

自分で言ってみてその台詞には納得してしまったが。 さつき会
ったナノ隊長やメイとは気色が違うが、敵意のような物を微塵に感
じないからだ。むしろ人懐っこい。 本当に此処は軍隊なのか？

「も？ ふむ・・・分かんが、分かったぞ。 それと「さん」は
要らないよ。 ミヤでいいわ。 それにしても、そんなに信頼され
ると今夜夜這いに行ったらどうなるかちょっとワクワクしてくるな
あゝ」

「・・・女に見られたかったらもう少し発言に気をつけて頂きたい
もんだ」

「ん？ 何か言った？」

「いや、なんでも無いぞ。 ミヤ」

呼び捨ててやると嬉しそうにミヤは笑う。 その顔は可愛らしい
んだがなあ・・・。 勿体無い。

そう思っただけでも、何処かで相手を女だと認識していたのかもしれない。

・・・

気付けば熱膨張してたりする。 ...これは湯船から出る事は
出来ないな・・・。

「じー」

「？ うわっ！？ 何処見てるんだ！？」

「ん？ 釣り竿」

「竿とか言っな！ ていうか見るな！」

「減るもんじゃないだしいいじゃないか。 あ、ある意味減るんだっけ？ 減らしてあげようか？」

「すまん。 日本語で喋ってくれ・・・」

「君の x を で x って させてあげるって言っただ。こんな美少女にしてみらえるなんて幸せ物だなお前は」

「誰が具体的に言えと言っただ！？ 児童法とか完全無視だなおい！？」

「児童法？ なんだそれは？」

キシリ・・・。

何かが壊れた音が俺の頭の中でした。

「法律無視上等って言いたいんだな？ まったく・・・流石軍人だな」

それだけ日常と離れているんだろう。 その時俺はそう思っていた。

だが、ミヤの目は別に冗談だとかを言っている感じでは無く、本当に分かっていない目だった。

まさか

「違う。その児童法だとか言うのを本当に知らないんだ。そんな法があるの？」

その言葉で俺の中の一つの砦が音を立てて崩れ去った。

こんな状況に居ても心の何処かでこれは何かの芝居か何かで、他の者も演技をしているだけだと信じていた。だが、今の彼女の言葉でこれは本当に現実を起こっていて、俺はそこにたった一人になってしまった事を自覚してしまった。

もう、両親にも友達にも会えないのだと・・・。

それなのに俺に戦争の手伝いをやれって？俺がそれで死んでも誰にも気に留めてくれる事の無いこの世界で？？

馬鹿らしすぎる。

良くある物語で異世界に飛んでその世界の秩序と平和を守ったりする話があるが、そんな物語の主人公は寂しくなかったのだろうか？自分の世界に帰れなくなっても良かったのだろうか？それは物語の中だから疑問に思わないだけで、実際にそんな事になって呑気に暮らせるなんて正気の沙汰じゃない。

俺は一生こんなふざけた時代に生きていけないといけないのか・

・。

「んん？ どうしたあ？ ママが恋しくなったか？」

そんな顔をしていたのか心配そうというより面白そうにミヤは顔を覗き込んできた。俺の視界にはそうされても彼女が映っていなかったが。

「・・・・・・そっか。 まあ、恋しめるママが居るだけいいじゃないか。 私達は全員居ないぞ？」

「・・・・・・え？」

声のトーンが少し低くなった事に気が付いて、今の彼女の台詞を反芻する。 全員居ない？ ・・・私達は？ ・・・ママが？

「菊池女史とかは知らないけど、TAM機乗者は全員戦争孤児ってヤツだね。 聞いて・・・・無いやな。 今日違う世界から来たばかりなんだし」

「TAM？ いや、それより俺の事聞ってるんだ？」

「狭い基地の中じゃもうみんなの噂だよ。 大抵は「男の子がきたー」って色気づいてるみたいだけど」

「・・・・すまん。 次から次へと聞きたい事ばかり増えていくが・・。
此処はもしかして女ばかりなのか？」

「整備員の下っ端トリオ以外はほぼ全員そうだよ。 いいねえーハ
ーレムエンドのフラグ立ってるよー手当たり次第で産休続出させる

のは勘弁してくれよ君」

「するか！　っていう事は身近な問題として此処って男子トイレも男子更衣室も無いんじゃないだろうな？　この浴場も入り口一つだったし・・・」

「おおう頭の回転中々速いじゃない～お姉さん気に入ったよおはっはっはっもちろんそんな物必要無いからね。　男女の差なんて付いてるか付いてないかだけなんだから」

「・・・女性として恥じらいが無ければそうでしょうね」

笑いながら言っ胸を張るミヤを冷やかに見てやる。　そんな事をするので湯船からその小振りな山が見えてしまったが、想像通りだった。

しかし、想像と現実とでは視覚的刺激が全く違うもので、流石に見てられないので目をそむけた。　・・・まあ、それが間違いだったのだが・・・いや、俺は間違ってないハズだ。　間違ってるのは・・・

「おお！？　照れてますな？　どうしたどうした～見惚れたといふならばやぶさかでは無いぞ？」

そう言っ湯船から立ち上がって何かポーズでも取っている。（見てないので多分だが）

本当に勘弁してくれ・・・。

ガラガラ・・・

そんな事をしていると大浴場に誰か入ってきた。 先程のミヤの話が本当ならかなり高い確率で女性のハズだ。 これ以上状況を悪化させないでくれ神様。

「あつれえ？ ミヤ一人？」

多分この世界に居るのは邪神だ。

入ってきたのは・・・ 男の子？ いや、タオルとか何かで前を隠してなかったから分かったが女の子だ。・・・この基地には痴女しか居ないのか！？

小柄な少女だった。 メイに会った時にも思ったがこんな年端もいかない少女が軍に入っているというのはどうなんだ？ ついでに言えばどうしてそんなにツルペタばかりなんだ。

「おゝせんちゃんいらっしやゝい。 今新人君と楽しくお話していた所だったのだよ。 せんも仲間に入りなよ」

「新人さん？ あゝ噂になってる男の子だゝ。 うわーうわー始めてみたよゝ」

「そりや今日来たばかりなんだからそうでしょうに」

「あつそつだよねゝあははっ」

・・・・・・

言っておくが俺はロリコン趣味は無い。 だが・・・「せん」と

呼ばれた少女が可愛いと思っちゃった。　なんというか「女の子」って感じがする。　もちろんミヤが可愛くないわけじゃないが、ミヤの場合言動と行動が「おっさん」っぽくて損しているな。

「紹介するよ。　この子は醍蟬　千代曹長。　今年で15歳になるんだっけ？」

「うん、15になったばかりだよ　よろしくええと・・・
お名前なんだっけ？」

「チヨ？　あれ？　さっきせんって言わなかったっけ？　ん？　愛称？　ああ・・・。　ああ、俺は」

名乗ろうとした。　ただ名前を名乗ろうとしただけなのだ。　それなのに、俺の頭にデッキブラシが突き刺さっているのは何でなんだ？　デッキブラシは刺さる物じゃないハズだ。　いや、そんな事より、そんな物が刺さるほどの勢いで「ぶん投げた」のは誰だ！？

「と・・・殿方がどうして此処に居るんですか！」

顔を茹でたタコか海老のように赤くしてツインテールの少女が浴場の戸口に立っていた。　水兵さんのような服を着ていた。　水兵さんの服が分かりにくいならセーラー服だと言えればいいだろうか。　硬い軍服では無いそんな姿はちょっといいかもしれない。

コイツがデッキブラシの犯人か。　それにしても、なんだなんだ！？

「おーカグラも来たのね。　何で服着てるのだ君は？　そんな物はちやつちやと脱いで一緒に入れればいいのに」

「ミヤ！ 貴女はまたそんな事を言って！ 大体男女が一緒に裸になっただけで駄目に決まってるじゃないか！」

ミヤがニヤニヤして手招きするのを激しく激昂する二股髪女。
何かさつきミヤが言ってる事と違う気がするのだが……。

「そんな狭意に囚われているとこの時代ではやっていけないよ？
男だろうと女だろうと裸の付き合いは大事じゃないか」

「貴女の世界で物事を話さないで！ 貴女は男だろうと女だろうと
見境無しに襲っているだけでしょうが！」

「あゝ分かった。 カグラちゃんは嫉妬しているのでちゅね？ か
わいいでちゅね。 後で慰めてあげるから大人しくベットに裸で
待っているんだよ？」

「ぶつ・こ・ろ・す！」

「あははゝまあたはじまったあゝ」

何やら浴場の洗い場(?)で戦闘が始まってしまった。 それを
見て手を叩いて喜ぶせんちゃん。 一応ミヤはタオルを体に巻きつ
けて戦ってくれたので(気まぐれか?) 視覚的に危ない事は無かつ
たが、服のまま浴場で暴れるカグラと呼ばれたツインテール娘は湯
気等を吸って服が少し透けてきている。 なんともしやらしい。

殴る蹴るの攻防をしながらカグラの短いスカートからチラチラと
見えちゃいけないものが見えてしまう。 なんといいかある意味ミ
ヤを応援したくなってしまった俺が居る。 仕方ないだろう。 俺も
男だ。

それにしても、二人の攻防だけ見ていると、とても身体能力が高
いのが分かった。 華麗に蹴り等の連続攻撃を仕掛けるカグラに、
笑いながら捌くミヤ。 カグラが怒りに任せて攻撃しているにして

も、それを難なく流すミヤには正直驚いた。傍目から見てカグラが劣っているわけでは無い。多分俺がミヤの代わりにやったすると最初の数秒でKOされていただろう。そんな重そうですれでいてブレの無い攻撃を受けるといのは相当の手慣れた。

改めて軍人だという彼女達を再認識した。

後、カグラの言動から別に俺の居た世界とは違う認識が万栄しているわけでは無いというのが分かった。男だろうと女だろうと恥じらいは無いといけないよな。うん。

「えいや！」

「きゃ！？」

防御に徹していたミヤが一転して攻撃に回った。だが、それは一瞬で、カグラを吹き飛ばすのに十分の威力があった。

吹っ飛んでいくカグラ。

マズイ！　いくらなんでもそのまま壁でも床でも激突したら危険だ！

ジャパーン！

俺は考えるより先にカグラを受け止めるために動いていた。カグラを受け止めて、そのまま浴槽の中に飛び込んでしまった。

「いたた・・・怪我は無いか？」

「あ・・・。ありがとうございます」

受け止められた瞬間は何が起こったのかわからなかったのだろう。
俺と目があって助けられたという事に気が付いたようで、顔を赤くして礼を言ってきた。

なんだろう。 さっきまで強気にミヤと争っていた姿を見た後だから知らないが、妙に可愛く見えてしまった。 . . . 気が多いな俺 . . . 。

それにしても、このかぐらって娘は他の子よりなんというか . . . 発育がいいな。

濡れてしまった服から地肌が透けて見えているのだが、よくぞそこまで育って . . . 。 お父さん嬉しいぞ。

「 ! 何見てんのよ ! この変態 ! ! ! 」
「 あいたー ! ! ? 」

まるでマンガの様に平手打ちを食らってしまった。 食らっているが何だが、これが普通の女の子の反応だよな ? ミヤみたいなのが変なだけなんだよな ?

「 ひ . . . ほ . . . ホントに変態 ! ! ! いや ! ! ! ! ! おかーさー ! ! ! ! ! 」

そう思うと嬉しくなってしまったのか、そんな顔が出ていたのかもしれない。

. . . 殴られて笑っているのを見たらそりや気持ち悪いよな . . . 。

だが待てよ！？　そういう趣味があるわけじゃないんだが誤解するなっ！？

「おい！　待てよ！　今のは別に変な意味じゃ・・・」

「いやーーーーー！！」

・・・・・・

弁解も聞かずに走っていつてしまった・・・。

後で基地内に噂されるんだろうか・・・。　ああ、死にたい。

「あー。　カグラを視姦するなんてケダモノだねえドーチンは」

「お前のせいだろうか！？　それに俺はそんな地人みたいな名前じゃないわ！」

ミヤ・・・コイツのせいで俺は変態扱いになっちゃったんだが・・・。
幸い俺は「たとえそう見えなくても」女を殴るなんて事はない。
本当は思いつきり殴りたいんだがな。この変態を。

まあ、これ以上何かあつたらそのタガも外れてしまつかもしれないがな。

・・・・・・今度ハリセンを用意するか。

「まあ、そんな事よりもミヤ。　TAMとか色々分らないんだが、そっちの説明はしてくれないのか？」

「えーそんな色気の無い話は私パス。　どうしてもって言うならピロトークで話してあげてもいいけど・・・」

「分かった。　これ以上喋るな」

「ぶー」

ミヤは当てにならん。　なら・・・

「ほえ？」

俺に見られて「？」を浮かべているせん。

・・・どうしてだろう。　まだ話してもいないのに、コイツは馬鹿だと感じてしまった。

なんというか、そのあどけない目を見ていると「頭の中はからっぽ」だと言っているかのように見えてしまう・・・。　失礼な話だが、そういうヤツはにじみ出るんだよな・・・馬鹿さが。

しかし、そうなると・・・。　他に聞くやつが居ない。　一瞬頭にメイの事が浮かんだがそいつも駄目だ。　あの無口な奴を喋らせるのにどれだけ労力を使うか知れない。

・・・他に居ないのか？　ナノ隊長に聞く・・・いや、彼女はなんとなくそういう話をするのは嫌だな。　またあの冷たい目を見そうで怖い。　さっきのカグラって子は多分取り付く島も無いんだろうし・・・。

まあ、いずれ分かるだろう。

そう気楽に考えて俺はそろそろ湯浴みを終えようと脱衣場へと歩

いていく。

背中に「私の部屋は 号室だよー」とミヤが言っているのが聞こえたがそれは全力で無視しておく。

脱衣場。

脱いだ服を入れる籠が数個あつて、俺が服を入れている籠の両脇にミヤとセンの物であろう服が入っていた。

見るつもりは無かったが、自然と目に入ってしまったのは俺の落ち度じゃないハズだ。

それを手にとって匂いをかいだりとかするわけじゃないので別にそれはいいだろう。

だが、同じ場所のしかも両脇に衣服が入っているのになんとか違和感を感じてしまった。

いや、違和感というより悪意か。センはどうだか知らないが、ミヤは絶対にわざとだ。あのヤロウ……。

「……つと、あれ？」

ミヤの籠の隣にもう一つ中身の入った籠があつた。

さつき出て行ったカグラは別に脱いでいない。となると、誰か他に中に居た？

俺はその籠の前まで来ると、中身を覗いてみた。

中には茶色い軍服。それと女物の肌着と下着。何かを巻く布が入っていた。

「・・・誰のか分からん」

今日来たばかりなのだし、服を見ただけで誰の物か分かるような知識はまだ無い。

それにしても・・・、女物の下着って小さいんだなあ。こんな小さいのを履いてるのか・・・。

「・・・何をしているの？」

気が付くとバスタオルを体に巻いた少女が横に立っていた。真横に立つまで気付かないぐらい吟味していたわけじゃないぞ？ 本当だ。それより、別に浴室から出てきたわけじゃないようだったので、バスタオル姿で何かを取りに行つて、今戻ってきたという感じだった。

メイが。

「いや、誰のかと思つてみていただけだ。別にいやらしい気持ちじゃない」

手に下着を持ちながら言うには説得力の無い台詞だっただろう。だが、本当に何かやましい気持ちだったわけじゃないのだから仕方ないんだって。むしろ、知識欲に負けてしまっただけで、それは正義だと言つても過言ではない。・・・いや、今回のジャステ

イスは負けそうだ。

「・・・・・・・・それは私の」

「そっか。 すまんすまん」

出来るだけ自然に下着を元の籠に戻して愛想良く笑ってみる。

俺の笑顔は近所では中々定評があるんだぞ？ 間違って蹴飛ばしてしまった八百屋の大根を折った時だってその威力は十分に発揮して半額で買うだけで済んだぐらいだからな。・・・・その後他の野菜も買わされたが・・・・。

それよりメイさん心なしか・・・・怒ってません？

「・・・・・・・・変態」

ぐはっ！？

やっぱり怒ってる・・・・。それも普段無口な分その短い一言が強力過ぎる。

「いや、待ってくれ！ 本当にそんなつもりじゃなかったんだぞ！？ おい！ メイ！」

「・・・・・・・・・・気安く呼ばないで」

「あ・・・・」

拒絶の言葉だった。色々な暖かい人に出会って少し気が良くなっていたのかもしれない。今メイが言ったようにイキナリ呼び捨

てるような事は普通は無いだろ。 他の隊員が特別なのだ。 彼女は間違っていない。

「・・・・・・・・分かってる。 貴方は悪いんじゃない。 た
だ・・・服を着て」

・・・・・・・・そういえば服をまだ着ていなかった。

彼女は下着がどうこうを怒っていたわけじゃなくて、俺の姿に困っていたのだ。

顔が赤いのも怒っているのではなく・・・恥ずかしいから？

俺も今更恥ずかしい。 死んでお詫びしたいぐらいに。

下を向いてこっちを見ないようにしてくれているので、急いで着替えようと俺は籠に手を伸ばした。

籠から服を取り出そうとすると、その籠の陰から何かが飛び出してきた。

水場が近いからあり得る事態だったのだろうか・・・ 空気を呼んで欲しかったぞ俺は。

「あー。 やっぱりこの時代でもコイツは生きてるんだな」

「・・・・・・・・」

黒い油虫。 ゴキブリだ。

生憎叩く物が無いからどうしようも無いのだが、その虫を見た瞬間メイの動きが明らかに止まった。俺も正直好きじゃない。

ソイツは何を思ったのかメイの足元を目掛けて走り出した。

「・・・・・・・・いやーーーー!?!」

「うわっちょ!?! メイ!?!」

初めて聞く彼女の大きな声。それが悲鳴とは皮肉なもんだ。その反動で俺に抱きついてきているのはちょっと役得だぞ虫。・・意外にあるなコイツ・・。

だが・・、だがな? その足をこっちに向けるとはどういう了見だ!?!

「どわあああ!?! こっちくんない!」

「!?!」

メイは耳元で声にならない悲鳴を上げ続けるし、妙に強い力で抱きしめてくるのでこちらは身動きが取れない。

万事休す

「何を騒いでいるんだお前等!」

その絶体絶命のピンチに救いの女神が現れた。

短髪の活発そうな娘は俺達を一瞬見て、その足元に居る黒い悪魔を見て短く溜息をつく、拳を握って・・・

いや、待て。それは人としてどうかと思うぞ？　しかも、見た所君は女の子だろう？　そんな事をする君の手は・・・

「チエストオ！！」

気迫十分の声と共に、右拳を真つ直ぐ打ち据えた。距離的にまったく届いていなかったが「目に見えない何か」が黒い悪魔まで到達してそれを撃破する。

拳圧！？　世紀末救世主かお前は・・・。

「おおぅ・・・。助かったぞ。ええと・・・」

「ん？　私は久々知　智亜子。　ちゃーこって呼んでくれていいわよ。階級は大尉だけどまあ、それは気にしないでいいわ。　どっちみちなノ隊長だって大佐なのに気にしちゃいけないしね」

「ちゃーこか。覚えておこう。それにしても大尉に大佐？　階級って少将の次は大尉じゃなかったのか・・・。俺ってそうとう下っ端なのか？」

「・・・ありがとちゃーこ。それに・・・貴方も」

メイは黒い悪魔が居なくなっってやっと落ち着いたのか、ちゃーくと俺に礼を言ってきた。

「んあ？　俺？」

コクン

頷いてくる。

俺と一緒に震えていただけなんだが……。まあ、礼を言われて悪い気がしないので別にいいけどな。

「あのさ。別にいいけど年頃の男女が裸同然で抱き合ってるのはよろしくないんでない？」

「ちゃーこさん。そんな今見たような状況判断しないで頂きたい。どうしてこうなったかアンタ分かってるでしょうに……。」

「……うん。嫌だっけ言っただのにこの人がムリヤリ……。」

「メイさん！？それは酷いんじゃないかい！？」

何を言い出すんだこの女は！？そんな冗談笑えないぞ……

「あつはっは、メイがそんな冗談言っなんて、相当その男が気に入ったのね？」

笑ってるよこの大尉……。いやしかし、冗談？なんでそんな事……。

メイを見ると何故か先程より赤い顔をしていて、目線を合わせてくれない。

コイツは……。とんでも無く可愛いんじゃないのか実は。

俺が見ていると、メイは脱衣所の隅の方まで歩いていきペタンと座り込んで頭を抱えた。

間違い無い。コイツはクーデレ資質だ。普段クールなのに時折見せる女らしい彼女。

なんだか惚れてしまいそうだ。

「ほらほら、メイが動かなくなっちゃうからさっさと着替えて出て行きなさいな。ええとドラン君？」

「この基地は人の名前を正確に言えるヤツはいないのか!？」

そう突っ込んで多分無駄な気がしたが、一応突っ込んでおく。

なににせよいつまでも裸ではアレなので、すぐに着替えて脱衣所を後にした。

- - - - -

そういえば、俺の寝る部屋とか何処なんだ？

そう思いながら歩いていると、また見た事の無い女が前から歩いてきた。

まあ、今日来たばかりなんだから当たり前だが・・・。

鼻眼鏡をつけて白衣・・・いや、黒衣を来た女性だった。

なんというか、他の者よりは精神的に落ち着いている感じに美女

で、多分俺よりは年上だろう。

「あ、こんにちわ」

別に打算も無く俺は挨拶した。別に美人だからといって挨拶したわけじゃないぞ？ この人がブスでもきつと元氣良く挨拶したハズだ。

「おう！ 元氣じゃなあ若いの。 お前が噂になつとる男じゃな？」

……確かに年上に見えるが、そこまで年上には見えないんだぞ？ 見た目は20そこらだと思っんだが……どうしてそんなおじいさんみたいな話し方なんだこの人？

「何やら湯浴みに行ったら違う意味でのぼせてしまつてフラフラしとるような感じじゃな？ どうじゃ、これからちよつとウチへこんか？」

「え……あの……」

「別にとつて食うわけじゃないわい。 大方色んな事があつて混乱しとるんじゃない？ ワシが説明してやるからまあ来い」

「あ………恐れ入ります」

なんというか喋り方が板についていて声だけ聞いていると違和感が無い。 別にからかつているわけではなくて、これが地なんだろう。うゝむ勿体無い。

色々と聞きたい事があるので、願つても無い事だ。

というわけで、俺の一日はまだまだ続くらしかった。

【花屑 第2話 終わり 第3話に続く】

第3話「SENSATIONに耐え忍べ記憶」（前書き）

「花屑」の入隊を簡単に済ませ、疲れたので俺は風呂に行った。

そしたらとても変な隊員達に揉まれてしまう。香良洲 魅夜。醍蟬

千代。天宮印 香具羅。3人は俺と同じ隊員っぽいが・・・。詳

しく聞けなかった。そうやって混乱していると長髪の黒衣の美女

が俺の前に現れた。コイツは何者なんだ・・・。

第3話「SENSATIONに耐え忍べ記憶」

『KIKUCHI medical affairs』

そんな看板が掛かっていた部屋に俺は通された。
めでいかるおふいす？・・・ああ、医務室か・・・。

部屋の中は医療関係特有の過酸化水素の匂いが充満していた。
オキシドール・・・消毒液だ。俺はあんまり好きじゃないが、慣れたら大丈夫なものなのだろうか？

そう思つて部屋のデスクの椅子に腰掛ける菊池女史を見ると、こちらの視線に気付いたようにニコリと微笑んだ。・・・この菊池という人、顔はいいんだが・・・。

「なんじゃ、そんなところに突っ立つたらんで座つたらどうじゃ？
そこに丸椅子があるじゃろ」

これである。

何故か分からないが菊池女史はこんな口調だった。見た目は若く知的な感じがするのに・・・。外見とのギャップに若干戸惑いながら、菊池女史が指差した丸椅子に座った。

改めて室内を見渡すと、簡易ベットが2つ、デスクが一つ。薬品などが入った戸棚が1つ。それ以外にはドアがあつて、もう一つ部屋があるようだ。そっちは少し大掛かりな手術でもするような部屋なのか、ドアの上に赤いプレートがあつた。

・・・一人で手術するのか？

「コホン。 あゝ・・・色々聞きたいじゃろうが、まずこちらの質問に答えて貰おうか」

「質問？ ・・・ああ、了解」

色々と余所見していると菊池女史は一度咳払いをして注意を促し、話し出した。

「お前さんは世界を飛んだようじゃが、その前の記憶はあるんじゃない？」

「世界を・・・飛ぶ？」

「ああ、深く考えんていい。 今のこの世界とは違う所から来たという自覚があるんじゃない？」

「ああ・・・。 そういう意味なら肯定だ。 俺が知っている世界はこんな寂れていない。 此処は何処なんだ？ なんて廃墟ばかりなんだ？」

「まだ、こちらが質問しとるんじゃせつかちじゃのお・・・。 まあ、その様子だと思った通りのようじゃな。 最初は戸惑ったじゃろ？」

「まあ・・・」

この爺さん女、何か色々と知っているような口振りだな・・・。

ここは全部聞き出してやろう。

「菊池さん・・・でしたかね？ 貴女は状況の説明が出来るような口振りだが、あんた一体・・・」

「うるさいのおっ！ こっちがしゃべっとなると言っとなるだろうが！ 少しは黙っとかんかいっ！」

「はいっ！！」

・・・

どうやら話の主導権は向こうにあるらしい。 ヒステリーな爺さん・・・いや、女は怖いな・・・。

「・・・お前さんが混乱しとるのはよう分かつとる。 ワシも世界を飛んだ一人じゃからな」

「・・・」

この人も？ 飛んだ？ 違う世界から来たって事か・・・。

俺は絶句して何も言えないで居ると、菊池女史は何かガツカリしたような顔をしてみせた。

「なんじゃつまらんの。 もう少し驚くかと思ったのに・・・。
お前さん意外に肝がすわつとるな」

「どうも」

人を驚かす為に言ったんじゃないだろうな？ そんな疑惑が浮かんできそうだった。

「まあ、ワシから言える事は「元の世界」には戻れんよ。それはワシが何度も試したからの」

「・・・・・・・・」

「何故この世界に来てしまったのかまでは知らん。ただ、ワシの時はこの世界に来て菊池女史と入れ替わってしまった」

「・・・・なるほど。 たしか隊長もそんな事を言ってたな。俺が此処へ来てしまったから 少尉つてのが消えてしまったんだって・・・・。 それじゃあ、元の人格は何処へ行ったんだ？」

「それはワシにも分からんよ。 ただ、言える事は元にあった人格は無くなってしまったんじゃないから、その者へ敬う心は忘れてはならん。 過失だとしても殺したようなもんじゃからな」

「・・・・・・・・まだ戦ってもいないのに殺人者が。 最低だな」

「ワシは元々医院で働いたんで菊池女史の技術をそのまま使えたんじゃないがな。 運のめぐり合わせがこの体の主も軍医だったそうじゃ」

「ふむ・・・・・・・・」

「後、時間軸は多分未来じゃの。 ワシが居た時代は平成12年じやが。 今はその29年後になるのお」

「平成12年！？・・・俺は19年だ・・・。29年って事は俺からしたら22年後って事か・・・」

「ほう？ 計算速いのお。まあ、そういう事じゃ。ちょっとややこしいが気にせん事じゃ。そんな事をわかつともこの世界で何の特にもならんからのお」

何か話を聞くと余計に混乱してきそうだが、要はこういう事だ。

この世界と俺の知っている世界は違う。

菊池女史の言うには「時間を飛んだ」という事らしい。それがパラレルワールドかどうか分からないが、つまりは時間旅行してしまっただけの事だと考えて間違い無いだろう。

だってさっきから聞いている言葉は「日本語」だし、菊池女史が言った年号は俺の知っている年号だったからだ。

だから、菊池女史が言っているように「年後」というのは「未来の日本」だと言っているのと同義であって、それがほんの数十年後の未来だと言っただけだ。

どんだけファンタジーなんだくそつたれ！

「本当に・・・元の世界に戻る方法はないのか？ ずっと俺はこの世界で生きていくのか？」

「それは現実的な意味か？ それとも哲学的な意味かのお？」

「？」

「ああ・・・、頭が良いと思ったがそれでも無いんじゃない。どっちにしろ答えは「知らん」じゃ。ワシはもう諦めとる」

「！！ アンタはこの世界で死んでもいいってのかよ！？」

「・・・いいか若いの。 お前さんがどう思っているか知らんが、どんな世界であつても死ぬ時は死ぬんじゃない。それが自分の納得いく死に場所になる事など普通の世界でも稀じゃろくに」

「そうじゃない！ 俺はそういう事を言っているじゃない！！」

「そう熱うなるな。 ワシが悪かった。 ちょっと意地悪したくなっただけじゃ。 混乱させてすまんのぉ。 いいか、良く聞けえ。 お前さんさつきから元の世界がどうか言っておったが・・・」

「な・・・なんだよ・・・」

菊池女史の眼鏡が光った様な気がした。 そこから何かブラスト的な者が放射されるのかと思つたが、女子は眼鏡を指で直しただけで、ただ、眼光を鋭くさせただけだった。

整った顔立ちの彼女がそういう顔をするのと威圧感と同時に恐怖に近い感じがした。

「甘えるなっ！ 男じゃろが！ お前さんは今この場に居る。それが全てじゃろが！」

「！！」

菊池女史がその姿では想像できない程の音量で怒声をあげる。

それは正直怖かったが、その恐怖よりも、その後に関わ清々しい気持ちで溢れ出してきた。

そうだ。何をウジウジ女々しい事を言っているんだ俺は・・・。

菊池女史に言われるまでも無く、俺はこの世界に来て混乱していた。だが、それを悩んでも解決策は何も無いのだから意味が無い。それより、これからどうやって生きていくか考える方がどれだけ建設的か・・・。今までに知らない道になったからと言って逆走するレーサーのようなものだ。馬鹿馬鹿しい。

人は前にしか道が無い。

だから、進むしかないんだ。しっかりと前を向いて・・・。

振り返ってみるのはもっと後でもいいだろう？ 俺。

パーン！

俺は自分で両頬を思いっきり引っぱりたい。その音が医務室に響く・・・。

「もう、大丈夫だ」

俺は痛む頬を押さえもせずに菊池女史に向き直った。

「おう！ 男の顔になったのお 惚れそうじゃぞ？」

菊池女史はそう言って本当に目を薄めて俺を見てくる。

俺はそうされて照れるわけでも、口説くわけでも無い。ただ、菊池女史の瞳を見詰め、その視線に意思があるかのように語る。「俺は大丈夫です」と。

何か菊池女史と「男同士の友情」が芽生えた気がした。

俺が思うに、菊池女史の前の世界での姿は医院の院長爺さんかなのだと思った。

だから、それぐらいの高齢の爺さんにとって、俺のような若者は教え甲斐がある生徒みたいなものなのだろう。

俺はその教えに応えた。そして、同時に菊池女史の信頼を得たんだと思う。俺はなんだかそう思うと嬉しくなった。菊池女史もその目を見ていと同じ気持ちなんだと思う。

そう思うと、菊池「女史」なんて言ったら失礼か？ やはり此处はもっと違うような・・・男らしい呼び方をした方がいいんじゃないだろうか？

「それにしても、お前さん近頃の若いもんにしては中々見所があるのぉ」

「あ、いや、ありがとうございます」

つい敬語になってしまった。まあ、敬語というのは相手を敬う時に使うんだから正しい使い方か・・・。

「なんじゃ？ 急にかしこまりおって？ 別にそこまで気を張る事も無いんじゃないぞ。同じ同郷の仲間のようなもんじゃからのワシラは」

「ありがとござ．．．いや、サンキュ」

「うんうん。 お前さんはワシの口調についても何も言わなかったしな。 他のヤツラはオカシイとか言うがの。 ワシは生まれも育ちも女じゃが、女じゃからと言って女言葉になる必要など無いじゃろうが？」

「え．．．．．そ．．．あ、うん。 その通りだな！」

一瞬素頓狂な声を上げそうになったが、なんとか堪えた。 幸い怪しまれなかったようで、菊池女史は笑顔のままだった。

危ない．．．。 さっきは元は男だと思っていたが違うらしいな．．．。 しかもそれについてはポリシーがあるっぽいから「口調」については禁句だったらしい。 ．．．．．ナイス判断、俺。 ．．．もちろん成り行きだが。

「そうかそうか分かってくれるか！ お前さんホントにいい男じやのう よしよし。 何でも聞くがいい。 先程までは話すつもりは無かったのじゃが何でも教えてやるぞ」

何か好感度が大幅にUPしたようだな．．．。 口は災いの元。 逆に喋りすぎなければ好転することもあるんだな．．．。

「あ、じゃあスリーサイズを」

盛り上がったのでつい冗談を言ってしまった。 もちろん本当に聞きたいわけじゃないが．．．。 本当だぞ？

「なんじゃ？ そんなものが知りたいのか？ まったく若いのお」

・・・

顔は笑っているが・・・目が笑っていないんだが・・・上げた好感度をまた一気に下げてしまったようだ。

・・・この際、そのまま押し切ろうか・・・よし、そうするか。

「いや、菊池女史があまりに美人でつい・・・」

・・・口説いてどうするよ俺！？

「ば・・・馬鹿もんが！ 年上をからかうでないわっ！」

顔を赤くして怒る菊池女史。・・・爺さん女・・・ありかも
しれない。照れながら怒っているのが可愛い。

まあ、とりあえずさっきのマイナスポイントは挽回しただろうか
らこれぐらいにしよう。

「あ・・・それでは菊池女史。TAMとかについてなんだが・・・」

「うん！？ あ、ああ・・・ん・・・「タム」の事じゃな。まだ実物を見てないんじゃない？ それを見ながら説明しようかの」

急に話題を変えたのに驚いたのか一瞬妙に変な声を上げてなかったか今？

「あ、はい。お願いします」

なんだか分からないが、現物を見ながら説明しないと面倒な物なのかもしれない。TAM・・・その機乗者として選ばれた俺。

TAM-06。

その後、俺は医務室から近くにあるTAM格納庫に連れて行かれ、その「TAM」を眼下に確認した。

それが人型の兵器だとちらつと聞いたが・・・。

昔見た事のあるアニメとかで出てくるような物にしては小さい。

ああ・・・、そういえば、大体それぐらいの大きさの警察機構のロボットが出てくるアニメが昔あったな・・・。

「コイツはTAM-06オニユリ。TAM-01ヒメユリの兄弟機じゃな。まあ、他のTAMも兄弟機みたいなもんじゃが、コイツは特別なんじゃ」

そのTAM-06オニユリの足をポンポンと叩きながら空いた方の手でTAM-01ヒメユリを指差す。オニユリは黒を基調としたカラーリングで、ヒメユリは薄いピンク地のカラーリングだった。形状はほぼ同じような形をしていたが、オニユリの方は機体の前方に8つぐらいの穴が開いていた。

「あの穴からビームでも出るんすか？」

「ああ、胸の辺りから並んでいる穴じゃな？ あれは・・・まあ、そうじゃな。ビームみたいなもんじゃ。攻撃用じゃないがの」

「？ 防御用シールドが展開？」

「ん……。当たらずも遠からずじゃ。その辺りの詳細については今度芽衣に聞くが良い。彼奴の方が詳しいからの」

ふうん。芽衣が？

確かに何か勉強家っぽいイメージがあつたが……

「芽衣は凄いいんじゃぞ？ あの年で銃の組み立ては勿論、TAMの基本設計までこなしたんじゃからな」

「へえー凄いんだ」

なんとなく凄いいんだというのは女史の言い方で分かるのだが、それがどれだけの物が今ひとつピンとこなかった。……車の設計するのと同じぐらいか？

「お、噂をすれば……。じゃ。後は芽衣に聞くといいじゃろ。じゃあ頑張れよ若いの」

「え？ ああ、分かった。期待に応えられるように出来る限りやるよ」

女史の言うとおり格納庫の入り口に芽衣が立っていた。女史はそれを一瞥してから俺に向かって親指を立ててきた。それに俺も親指を立てて応える。すると女史はまた医務室の時と同じように嬉しそうな顔をしてくれた。

「後、85・61・83じゃ」

「は？」

そう言っ て女史は格納庫の入り口から振り返らずに出て行った。

．．．．．

暗号か何かだろうか？

．．．と、とぼけてみる。 何故か知らないが血肉が踊りそうだった。

「おい芽衣っ！」

上気しだした「何か」を抑えるようにしながら俺は芽衣を大声で呼んだ。

それにコクンと頷いてトトトつと芽衣が駆けて来る。

．．．

その顔は何故かしめつ面だった。

俺の前まで来ると、俺の目をじつと睨んでくる芽衣。

「．．．．．なんだよ？」

「．．．．．呼び捨てないでって言った」

「あ・・・すまん」

そういえばそんな事を言ってたな・・・。すっかり忘れていたが・・・。

さっきの風呂場でちゃーこ（だったか？）が言ってた「気に入られている」は嘘じゃないか？

どうも距離感を感じてしまっんだが・・・。

「・・・・・・・・何？」

おっと。知らず知らず見詰めていたらしい。小首を傾げて訝しがつている。

「いや、なんでもない。ところで、このTAM・・・タムだったか？ これってなんなんだ？」

「・・・・・・・・technical automata。技術的自動からくり人形・・・」

・・・どつちかと言えばmechanical（機械的）じゃないのか？ まあ、その所の名称はどうでもいいが・・・。

「人を・・・殺す道具」

「・・・・・・・・」

兵器だから当たり前の事だ。

どんな武器でも、それは人を傷つける為に開発され、そして大量の血を吸いながらまたより人を「殺しやすく」するために技術を改革させていく。

俺の時代でも世界の何処かでずっと続けられていた事だ。どんなエゴをもっていたとしても、その行為自体はいつの時代も変わらない。

兵器によって死ぬ人が居て、その兵器によっていき続ける人が居て・・・兵器によって滅んでいく。

そんな退廃的な物でしか無い物を何故人は求め続けるのだろう。

一番最初に兵器を作ろうと思った人はきっと狂っていたのかもしれない。

ただ、それを止める事が出来なくて、作り続けていたのかもしれない。

この世界が壊れてしまったのももしかしたら、そんな人を止める事が出来なかったからなのかもしれない。

だが・・・その兵器を使う者の大半はそんな事情は知ったこっちゃ無い。

ただ明日を生き延びるために・・・、こちらを傷つけようとする者達を倒すしかない。

それが自分の拳で殴っているわけでないこんな馬鹿げた兵器でも・・・その罪は同じであるハズなのに・・・。

「なあ、芽衣」

「・・・・・・・・」

呼びかけるが答えない。まあ、また呼び捨てにしまったのだが、そんな事はどうでもいい。それより聞いてみたかった。

「芽衣はこの兵器で・・・人を・・・殺してしまう事には抵抗は無いのか？」

「・・・・・・・・」

相手は軍人だ。そんな事を聞かれても鼻で笑われてしまうのだと思った。

だが・・・芽衣は違った。

「・・・・・・・・嫌」

「・・・・・・・・そうか」

その短い一言で俺は安心した。

芽衣のような軍人でもちゃんと罪悪感があるらしい。ただの殺戮人形じゃない。

それが分かっただけで十分だった。

「そう思っただけでも・・・やらないといけないんだよね？」

「・・・・・・・・」

芽衣は答えない。　頷きもしなかった。

だが、それが答えであるかのように……。

うん。　そうだな。　何も軍人だからって……………

「芽衣。　お願いがあるんだが……」

「……………うん」

「……相手を傷付けずに……なんていうか無傷で撤退させる方法は無いか？」

「!!」

「ん？　どうした芽衣？」

「……………」

「芽衣？」

「……………」

「芽衣？　め……うわっ！？　なんで泣いんだよお前！？　俺何か悪い事言っちゃったか！？　なあおい!？」

その後、芽衣は何故か泣き止まなかった。

ずっと声を殺して泣き続けた……。

俺はなんとなく芽衣の頭を撫でてやりたくなった。

それから・・・

「俺達」の日々が始まった。

第4話「INVITATIONは終わりを告げる夢」(前書き)

俺は一つ決めた事がある。決して悪戯に人を殺さない。それは軍人としてはあり得ない思想だったのだろうが、それに芽衣は同意してくれた。

俺達の日々は始まった。

第4話「INVITATIONは終わりを告げる夢」

人の良心とはどういうものだろう。

哲学的な意味では無く直接的な意味であるわけだが、善悪がどうかという問題で個人もしくはそれに準ずる人達の価値観に相当する。

少し喩え話をすれば服を着ない人がいて、多数の者がそれは変だと口にする。しかし、少数の者が「それが正当」だと答えたとする、それは「異常」であり、普通では無い。それなのにそんな意見を「絶対的な力」で押し込めてしまう事もあったりする。では、そこに良心があるとする人々の答えはどちらに傾くだろうか？

答えは簡単である。『どちらが自分にとって納得いくか』である。納得いかなければそれは「良心」には成り得ない。

さて、どうしてこんな事を言うのかと言えば、俺が考えて居るのは「少数の意見」であるのだ。

まあ簡単に言えばそれは「背徳行為」だったのかもしれない。

ただ、それは「軍にとっての」であり、俺個人としては何の罪悪感も無い。

普通の人間ならば普通に考え付く小さくてとても幼稚な抵抗だ。

カッカッカッ・・・

黒板に白いチョークが走る。

それをしているのは芽衣。　そしてさせているのは俺。

ただ二人だけの特別個人授業だ。　もともと、芽衣はいつもの軍服だし、俺は支給もされてないので単なる普段着だが・・・。

なんとなく深夜のミーティング室でやるのはちょっとだけ・・・
本当に少しだけ後ろめたいといつかなんといつか・・・。

だが、白昼堂々とやるわけにはいかない。

さて、俺達は何をやっているかという・・・

「TAMの起動時限には数種類あり、内部電源による緊急起動と周囲の気質による動力変換を実行する事による間接起動があります・・・
・そしてー」

普段無口な奴が流暢に喋るというドリームな状況だったが、遊んでいるわけではない。

徹底的にTAMの基本構造を教えて貰っているのだ。

俺は昨日まで普通の高校生だった。　だからそんな玩具・・・いや、兵器の使い方など分かるはずも無い。

それらを教えて貰い効率良く動かせるようになるためなのだ。

効率良く・・・相手を無力化させる方法というわけだ。

芽衣曰く、技術も大切だが、このような基本構造を知っておかないと間違つて誘爆してしまう恐れがあるからだ。高性能で高出力を叩き出すようなロボットだ。もし肩等を打ち抜いたりしても、その当たり所が悪いと爆発してしまうかもしれない。だからこそ知っておかないといけないのだ。

それで夜間授業・・・俺は土方の兄ちゃんか？

それにしても、芽衣の説明は分かりやすかった。人にわかるように説明するには人の3倍理解していないといけないと聞いた事があるが、彼女も同じ様に頭を悩ませたのだろうか？

どうも、この娘の場合はちょっと違う気がする。

最初から知っているかのように見えた。

それは俺の直感だったが、そのぐらい無駄の無い説明だったという事だ。

ガラガラ・・・。

そうしていると、ミーティング室の扉が開かれた。

隊長だ。

「こらーミーティング室の無断使用は駄目なの。・・・あら？
ドリモグ少尉？」

「俺は土の子かつ!? 隊長俺の名前本当に覚えますか?」

「勿論なの」

とっても素敵な笑顔だった。

……この女めちゃくちや殴りてえ……。

「それにしても、こんな夜中に……TAMの基本構造? それなら明日からゆつくり説明しようと思ってたの。動力系の説明だとかはまずは要らないと思うなの芽衣」

黒板を見て菜乃隊長は芽衣を嗜めた。こんな夜中に、しかも初日からする事無いでしょう?と言った視線だった。そんな目で見られて芽衣は少し小さくなっていた。

「す、すみません! 俺が無理言っただけなんだから教えてもらってたんだ! 芽衣は付き合ってくれただけなんだよ」

「あら? 張り切るのはいいい事だけど無理は禁物なの。私は別に咎めているわけじゃないの。こんな事をするなら明日の昼間にすれば良いって事なの」

それはとても柔らかな笑みだった。昼間に見たあの冷笑を浮かべる姿が微塵も感じられなかった。あれは本当にこの隊長だったのかと疑う程に。

「それにしても、少尉はいつの間に芽衣と仲良しさんになったの? こんな夜中に二人つきりだなんて……きゃーアツアツなの」

・・・駄目だ。この姿からは想像が出来ん……。こんなのはほんとした隊長だったんだこの人……。

「……………違う……………」

芽衣は困った顔で呟いていた。

「芽衣はウチの大事な子なんですからいけない事しちゃ駄目なのよ少尉？」

「……………だから違う……………」

……………いや、芽衣よ。小さくて聞こえないから……………。

「いやいやいや。隊長、そういう事は一切無いから誤解しないで頂きたい。俺は純粋にTAMの事を習いたいだけなんだ」

純粋かどうかは知らないが、やましい気持ちじゃない事は確かだ。上手くTAMを扱えなければ、俺は簡単に人殺しになってしまうから。……………まあ、この体に居る時点ですでに人殺しだったんだっけ？ それはとりあえずノーカウントにしておくとしてだ。

「ふうん？ それだったら整備員を呼んできましようか？ 彼等なら詳しい説明が出来るハズなの」

俺の言った事の真意は分からないなりに、隊長はそんな事を言うてくれた。

「いえいえ。まだ基本を教えてもらっている段階なんで、そこま

でして貰わなくても大丈夫。　ありがとう隊長」

「んんゝ残念。　私も何か役に立ちたいなのゝ」

本当に残念そうに肩を落とす隊長。　・・・この人ってこんなに人懐っこい性格だったのか？

くいくいつ。

芽衣が俺の服の袖を引っ張っていた。　頭だけそちらに向けると隊長に聞こえないぐらいに小さな声で彼女は囁いた。

「・・・・・・・・さつきは皆が見てたから・・・」

「・・・そつか。　隊長って大変なんだな」

俺にはわからなかったが、隊長と話をしていた所を他の者が見ていたらしい。　そんな体面の為に厳しくしなくてはならないという立場の彼女。　本当は優しく暖かい人のようなのに・・・ちよつと悲しいな。

「でも、当分作戦も無いから焦る必要は無いなの。　ジュン君」

「!？」

「？」

また菜乃隊長が俺の名前を「正確ではない呼び方」をした。　ただ、その呼び名はどつちかと言えば「愛称」であり、こうやって呼ばれるには気恥ずかしい呼ばれ方だった。

隣で芽衣が分からないような顔をして首をかしげているが。 . .
・コイツも俺の名前をちゃんと覚えてないみたいだな . . .

「 . . . その呼び方はやめてください隊長 . . . 」

「 あら？ どうしてなの？ 」

「 年上に下の名前で呼ばれるのはちょっと . . . 」

「 恥ずかしい？ 」

そう言ってニツコリと笑う隊長。 . . . ワザとだこの女 . . .
やっぱり性根が悪いぞ芽衣 . . .

「 まあ、そんな事よりもう寝てしまいなさいなの。 こんな時間にお勉強してたって言っても明日噂になってしまいかもしれないなの。 軍としての規律と体面もあるし、あまりこういう独断はやめた方がいいと思うの 」

「 はあ . . . 」

菜乃隊長はウィンクしながら片手を顔の前で掲げてきた。 「 ごめんだけどお願い 」 という顔だ。 腐っても軍隊だ。 規律には厳しいのだろう。

ここは彼女の顔を立てるべきか . . .

「 分かりました。 今度からもう少し早めの時間につて事で . . .
芽衣もそれでいいか？ 」

「・・・・・・・・了解しました。少尉」

虚ろな目で芽衣は俺の言葉に応えてきた。・・・・・・・・表情が無い。

俺達は菜乃隊長に促されるまま深夜の勉強会を解散した。

元々どつちかといえば無表情なのだが、芽衣の・・・・・・・・その顔が後から引っ掛かった。

「そういえば、俺が寝る場所って何処なんだ？」

芽衣とはわかれ、菜乃隊長と連れ添って歩きながら聞いてみた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん・・・・・・・・」

「菜乃隊長？」

すぐに答えが返ってくると思ったのだが、菜乃隊長は何か考え込んでしまった。

何か問題があるのか？？

「ええと・・・少尉はもうミヤ・・・ええと、香良洲少尉には会ったなの?」

「え? ああ・・・会いましたよ。それが何か?」

「ああ・・・やっぱり・・・。だったら・・・ええと、ウチに来る?」

「は?」

「あ、・・・えとね? あのね? 少尉の部屋を用意しようと思ったら実は間に合わなかったなの。それで・・・他の部屋に合い部屋って事になってしまふの」

「うええっ!? なんすかそれ!?!」

「あゝうゝ夜中なんだから大きな声ださないでなの! 危険なの!」

「危険?? 此処って夜中に猛獣でも出るんですか?」

「あ・・・いや、あの・・・えへっ」

「えへっ つて可愛く笑っても誤魔化せないぞ? まったく・・・隊長何か隠してるな?」

「・・・私と一緒になのがそんなに嫌なの? グスングスン」

・・・

思いつきり泣き真似なのだが・・・。なんと卑怯な・・・。

俺は自慢じゃないが女の子のお涙という物には滅法弱い。　とこ
とん弱い。

何か可哀相になってしまっただけなんでも言う事を聞いてしまいそう
になってしまっただけ。

・・・まあ、勿論それは菜乃隊長が色々と標準以上なのも原因だ。

この基地の隊員って・・・ブサイク居ないのな・・・。

今頃気付いたが、ホントなんというギャルゲーだよコレ・・・。

まあゲームと違う所は、これが現実で、戦争中で、もしかしたら
戦死なんて事もあり得る状況だって事だが・・・。

それを差し引いても中々美味しい状況なのかもしれない。

「・・・・・・・・あゝ・・・・そう思ったけどやっぱり私は遠慮してお
くなの。　部屋は決まっているみたいなの」

「・・・・・・・・へ？　あれ？　どういう事？」

考え事をしている間に菜乃隊長が何故か青い顔をして後ずさって
いる所だった。

「どうしたんだ？　顔色が悪いぞ隊長？」

「ええっ！？　そ・・・そ・・・そそそんな事は無いなのなの・・・

」・

「……何だか寒さに震える子犬のように震えながら言っている。説得力が無い。なんだろう？ 寒いのか？ 今日はそんな事は無いぐらい暖かい日だと思うが……」

「と、ととにかく！ この道をまっすぐ行けばいいなの！ じゃあサラバなの……」

なんだ？？ 変な隊長だな……。

何か急いで自分の部屋に逃げていつているように見えたんだが……。
気のせいかな？

隊長に言われたように基地の廊下を真っ直ぐ行くと、突き当たりに一つ部屋があった。「MEI' ROOM」と書いてあった。

……メイるーむ？

……

マジか？

「……少尉。こんばんわ」

ドアの前まで来ると、足音でも感じたのかキィッとすぐにドアが開かれた。芽衣が居た。

マジらしい。

というかさつき会ったばかりだろっ！？　というかさつき分かれて一本道で何時追い抜いた！？　バケモノかこいつは……。

というか、私室に居ても軍服なのかコイツは……。

「……………入って」

「いや…………俺は…………」

「……………知ってる。　少尉は自分の部屋に何かがあるか知らない。だから此処に来た」

「？　俺の部屋に何かあるのか？」

「それは知らない方がいい。　早く入って。　見つかる」

何か分からないが菜乃隊長といい、芽衣といい何かに怯えている。

此処は彼女達の基地であり、安全なハズなのに…………。

本当に夜中に何か異質な者でも居るんだろうか？

いや、良く考えたら今は戦時だ。　何処に居ても安全だと言えない。

この基地のセキュリティシステムがどんなものか知らないが、それすら突破する手段は多分いくらでもあるんだろう。　所詮は人の手で創った物は人の手でどうにかなるものだ。

そうになると、今日入隊したばかりの一般人に等しい俺など、一人で居たら明日の明朝には冷たくなっているかもしれない……。

「ああ、すまないが失礼するぞ」

俺は自分自身の保身と、他の者へ迷惑を掛けない為に今晚の所は芽衣に守られる事にした。

男の癖に情けないと言わないよな？　これは当然の選択なんだから。

部屋の中に入ると、なんとというか無機質な部屋だった。

仮にも女の子の部屋だから、ベットにクマのぬいぐるみや、テールブルに化粧品なんかが無列しているのかと思ったが……。

何も無かった。

そこには簡単な白いシートが掛かっているパイプベットと、何かの専門書等が綺麗に並べられた木製の机があるだけだった。

私物は……ほぼ無いに等しい。

軍人というのはこんなもんか？

「……………あまりジロジロ見ないで。　少尉」

「あ、いや・・・すまん。 人の部屋に入るのは初めてでね。 あゝ女の子の部屋ね」

言ってしまったからハツとする。 言われた途端に芽衣は明らかに表情を暗くしてしまったからだ。

「・・・女の子っぱくなくてごめんなさい」

「い、いや！ そうじゃなくてっ！ ええと・・・ほらっ！ 人それぞれだし別にそんなに気にする事は・・・」

急いで取り繕うが、芽衣は俺の一言一言にどんどん暗くなっていく・・・。

繊細過ぎるぞこの娘・・・。

何か気の効いた台詞は無いものか・・・。

そう思っていると、芽衣は急に顔を上げた。 なんと、その顔は普段通りの顔になっていた。

「失礼しました。 少尉。 気にせずごゆっくりお休みください。 此処は安全です」

「！・・・分かった。 じゃあ、休ませて貰うよ。 芽衣・・・ そういえば階級は？」

芽衣の表情は色が無かった。 先程まで少しでも好意的な印象だったと思っただが、それが気のせいだと思ってしまう程冷たい目をしていた。

物言いもハッキリとしている。

俺は・・・取り返しの付かない事を言ってしまったのかもしれない。

「軍曹です。少尉」

「分かった。では、改めて芽衣軍曹宜しく頼む」

「ハッ！」

・・・・・・

これが・・・軍の中で生きるもの達にとっての普通の関係だ。

俺と芽衣は上司と部下である。

俺は確かに新参者だが、階級というのはそれだけ絶対な物なのだ。

先程まで可愛い表情を見せていた少女を機械的に冷たくさせる事が出来る階級だ。

芽衣は俺にベットを譲って自分は床で寝ると言い出した。

そんな事をさせたくないが、それが体面であり、規律であり、普通である。

芽衣は着ていた軍服を脱いで肌着だけになった。

風呂場で魅夜が言った「男女関係無く」というのはあながち間違いない。

芽衣は脱いだ服をテーブルに綺麗にたたんでいた。

それが軍の本質であるのだから。

俺は少尉で、芽衣は軍曹。

芽衣は床の毛布を確かめてからそこへ横になった。

階級によって縛られる関係。

・・・だけど・・・。

静かに目を閉じる芽衣。

そんな物・・・欲しくない。

「軍曹。一つお願いがある」

「なんでしょうか。少尉」

床に毛布を引いて横になろうとしていた芽衣は、体を起こしてこちらを見た。そのままでは失礼かと思ったのかすぐに直立しようとするのでそれを手で制した。

「そのままでもいい。いや、そのままは駄目だな。芽衣、ここの部屋の主はお前だ。俺はただ厄介になっっている客みたいなもんだからな、その客が主人のベットを使うというのはいささかどうかと思うのだが・・・」

「いえ、少尉。それは当然の事です。私は下級兵士であり、貴方は・・・」

「関係ない。俺は男でお前は女だ。それがどういう事か分かるか？」

「・・・分りました。少尉は私の体をお求めなのですね？ 何分経験はありませんが、失礼します」

分かってない。なんて事を平然と言ったこの娘は・・・。
これにはちよつと頭にきたぞ。

「芽衣！」

俺は芽衣の頬を思いつき殴ってやろうと手を振りかざした。
そうされても芽衣は俺が居るベットに上ってきていた。そんな

肌着一枚で・・・・・・・・ええいつ！　この馬鹿娘！

「！！」

「！？」

・・・・・・・・俺は何をしているんだ？

殴ろうとしたハズなのに・・・・・・・・俺の手・・・・・・・・いや、両手は芽衣を抱きしめていた。

「・・・・・・・・少尉。やさしく・・・・・・・・してください」

ほらみる。　思いつきり勘違いしている。

それにしても・・・・・・・・柔らかくて暖かいな・・・・・・・・。　これが女の子か・・・・・・・・。

って違う違う！　一瞬そのままなしくずれそうになってしまったが、俺がしたいのはこういう事じゃない。　もう抱きしめてしまったので、とりあえずこのまま喋ることにする。

「芽衣・・・・・・・・。　いいか。　お前は軍人の前に一人の人間だ。　そして女の子だ。　俺が階級で上っただけで、お前の方が先輩だろう？」

「それは・・・・・・・・」

「黙って聞けっ！」

ビクッ

耳元で怒鳴られて芽衣の体がビクッと震える。・・・何か苛めている気がしてきたが、これだけは言わなくてはならない。

「お前が軍の規律とか、そういうのを大事にするのは良く分かった。だけど、俺はそういうのは嫌だ。まあ、別に外でもってまでは言わないが、今はお前と俺しか居ないんだろう？　だったらそんなに畏まる必要は無いだろう」

「・・・・・・・・」

「俺は間違っているか？」

「・・・・・・・・」

芽衣は答えない。

「軍とか抜きに言ってくれ。お前はどっと思っただ？」

「・・・・・・・・ごめんなさい」

それは答えでは無く、謝罪だった。何についてのかは分からないが、やはり答えになっていない。

「いや・・・そうじゃなくてだな・・・」

「・・・・・・・・少尉」

芽衣は虚ろな目で俺を見据えてきた。その目には若干の怒りの

ような物が見えた気がした。

「ん？　なんだ？」

「少尉は・・・どうして私の居場所を奪うのですか？」

「？居場所？　何を言っているんだ？」

「此処は・・・花屑は私の居場所です。　私はこの場所では生きられません。　それを・・・奪うというのですか少尉は」

「いや、奪うとかそういう問題じゃなくてだな人としてどうかって事を・・・」

「同義です。　私はこの場所で軍人としてでしか生きられません。　少尉は・・・軍人としての私を認めてくださらない。　ならば、私は此処にいる資格は無くなってしまふ。　少尉はそう言っているのです」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・出過ぎた事を言って申し訳御座いませんでした。明日も早いのでそろそろ寝ましよう少尉」

「・・・・・・・・」

甘く見ていた。　芽衣の軍人志向は今日昨日始まったわけでは無い。　そして、その立場という物も、彼女にとって絶対であり、それ以外は何も価値が無いという事だ。

俺は何も言えずにただ布団に入る芽衣を見ている事しか出来なかった。

無気力感に襲われながらも、俺も仕方なく布団へ入る。

・・・ん？

・・・頭では納得したが、コレはやっぱり間違っているだろ！？

「おい！？ やっぱりこれは不健全だろう！？ 俺は床で寝るからなっ！？」

いくらなんでも一緒に布団に寝るなんて出来るわけが無い。 いや・・・正直その誘惑に負けそうだが・・・、俺は良識があるし、良心がある。 だから、こんな事を許してしまつては駄目なんだ！

クイツ

俺はすぐに布団から這い出ようとすると、俺の服が掴まれていた。芽衣だ。

「・・・芽衣。 離せ」

「・・・」

聞こえていないのか離さない。

「・・・芽衣。 命令だ。 はなせ」

先程上下関係について話したばかりなので、これで離してくれるハズだと思った。

だが、芽衣の手は動かなかった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・聞こえなかったのか？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・仕方の無いヤツだな」

なんとも頑固なヤツだ。俺は根負けしてベットに舞い戻る。

俺は出来るだけ芽衣に触れないように布団の中に入った。

これで密着なんてしたら理性が確実に飛ぶ。そういえばさっき密着したか・・・。

頑張った俺。よくやった俺。

布団に入ってから、やはり芽衣は無言のままだった。

身長差があって芽衣は布団の中にすっぽり入ってしまったているので表情が見えないが・・・。

「まったく・・・。今日だけだぞ？　こんな事をして明日噂になっても知らないから俺は」

「・・・・・・・・」

何か返答があるかと思ったが、芽衣は何も言ってこなかった。

「・・・寝たのか？　まあ・・・俺も何か今日は疲れた・・・」

今日一日色々あった疲れがどつと来たようで、急に眠気が襲ってきた。

それにしても居場所か・・・。

さつき芽衣が言った言葉が俺の頭の中で回っていた。

我知らずそんな考え事が声になって出ていたが、他に誰にも見られていないわけではないので気にしなかった。

「・・・居場所か・・・。俺の居場所は此処になるのか？　・・・まだ信じられないが・・・明日目が覚めたら家で寝てるなんて事は・・・無いだろうな。この疲れは本物だ。まったく・・・今日出会ったコイツは色々難しいし、他のヤツも変なヤツばかりだし・・・。俺ってなんかバチでもあたってるのか？　なあ、芽衣。俺の居場所って此処でいいのか？　俺に何が出るんだ？　俺なんかで本当にいいのか？　なあ、芽衣・・・。ってやつぱり寝てるか・・・。ブツブツ言っただけで本当に寝るか・・・」

喋っている間に起きてくる事を期待したが、芽衣は全く動かなかった。それはそれであまり触れたりせず助かるので良いんだがな。

俺はそのまま夢の中に落ちていった。

俺の一日は終わった。

数分後。

男の髪を撫でながら少女は呟いた。

「…………おやすみなさい。 少尉。 ……うっん。 ジュ
ンさん」

それはその日見せる事の無かった笑顔で…………。

第4話「INVITATIONは終わりを告げる夢」（後書き）

お疲れ様でした。このお話で一区切りとなります。

ここまでの感想等ありましたら宜しく願います。

それによって次回の話が変化したり・・・するかもしれません。

恐らく多分まあ適度にですが・・・

では、ありがとうございました。

第5話「汝歌うように朝焼けを待ちたまう」(前書き)

花屑での初日が終了した俺。とても疲れて悼んだと思う。
・ ・ ・ 目が覚めたらこんな事になっているなんて ・ ・ ・
そりゃ ・

第5話「汝歌うように朝焼けを待ちたまう」

皆は健康にどのように気をつけているだろうか？

俺はまだ若いからと言って、適当な生活習慣を過ごしてしまうのはどうかと思う。

何故ならそういう生活習慣は後になって響いてくるからだ。

だから、俺は朝起きると軽く運動をするようにしている。まあ、良くてジョギング程度だが。

そのジョギングも最初は嫌だが、続けていると、走らないと気持ち悪くなってしまうものだから不思議なもんだ。適度に体を動かす事はスタイル保持にも貢献すると思うぞ？

健康というのを考えたりする事は、実はあまり無かったのだが、一度走り出したら止まらない。

結果的に「健康に気を使っている事になっている」わけだ。

だけどな？

俺はこんな健康法をしようと思ったつもりは無いんだぞ？

前置きが少し長くなったが・・・。

「ぬうわあああんで全裸なんだあああああつ!？」

先に言っておこう。俺は別にノーパン健康法を実践したわけでは無い。完全に朝起きるとこんな状態になっていたんだ。道理で寒いとは思ったが……。

しかし、さつきから……何か当たるんだが……。

「う……ん……」

………

今のは俺の声じゃない。

女の声だった……。

………

まてまてまてまて。昨日俺は確か、芽衣の部屋で寝て……成り行きで芽衣と一緒に布団に入ってしまったて………って事は……。

最低だ。

俺は寝惚けていたのかどうか分からないが……。とんでも無い事をしてしまったのかもしれない。

………どうする……。ここは押し通すか……。

いや、良心がそんな事は出来ないとっている……。此処は男として……責任を取るべきだ。

皆にはどう説明しよう……。初日でこんな事をしてしまった

んだ。冗談でもなく殺されるだろうな……。いや、もしかしたらこの世界では普通のことなのかもしれない……。昨日芽衣があんな事を言い出したのもそれで納得がいく……。

いやいやいやいやいや。クールになれ俺。そんな事があるわけがない……。

と、とにかく誰かに見つかる前に服を……

「芽衣、朝なのよ起きてよ」

コンコンコン。

部屋のドアがノックされる。

「!？」

マズイ。隊長の声だ。

こんな所を見つかったら……。おしまいだ。

言い逃れも出来ない。

「あれ？ 芽衣？ いらないの？」

返事が無い事に訝って隊長が部屋のドアノブをガチャガチャと回す。

幸い鍵が掛かっていたようで、開かれることは無かったが……。

相手は隊長だ。合鍵ぐらい持っているかもしれない。

「ん〜？」

カチリ。

やはり鍵を持っていた。

ジーザス！

「芽衣〜？ ……あら？ 少尉だけ？ 芽衣は？」

「あ、おはようございます。 隊長。 さ……さあ？」

幸い布団の中に潜っているようなので隊長からは俺一人に見えたようだ。

上半身裸（実は下半身もだが）の俺に若干目を背けているが、チラチラと見てる。 えっち〜

……等と言っている場合ではない。

何かのきまぐれで隊長が異変に気付かないとも限らない。 二こは早々に退場して頂こう。

「あ、あの隊長。 俺着替えたいんでちょっと出て行って貰える？」

「あ、そうなの？ じゃあ、ちょっとしたらまた呼びに来るなの〜」

「あい。了解」

大惨事回避。

「　　というか、その盛り上がっているのはなんなの？」

「ぐはっ！　ぬかったあ！？」

布団が不自然に盛り上がっていたのを目敏く隊長は発見した。
こんな事なら起き上がって膝を立てておけばよかった・・・。

「あー・・・少尉。　貴方昨日は服を脱いで寝ましたなの？」

「え？　いえ・・・着てたけど・・・」

菜乃隊長は謎の質問をしてきた。　咄嗟に正直に答えてしまったが、それを聞いて菜乃隊長は大袈裟に溜息をついて部屋に入ってきた。

「ちょ・・・隊長！？　ストップストップ！」

「ごめんなさいなの。　まさかこんな事になっているとは・・・。
えいっ！」

「うわああああああ！？　・・・はい？」

隊長は俺の掛け布団を剥いでしまった。　その中には・・・赤い
髪少女が下着姿で丸まって寝ていた。

香良洲　魅夜さん17歳。

貴女は何故そんな所で寝ているのですか？

まあ、それはとりあえずおいといて、菜乃隊長がその魅夜では無く、俺の方を見ている事に気が付いた。・・・俺というか・・・まあ・・・「俺」なのだが・・・。

「あら、意外と・・・」

「意外となんだっ!？」

その「意外と」の後に続く台詞が非常に気になる所だったが、俺はそれより彼女の手から掛け布団を引っ手繰ると、とりあえずそれを腰に巻いた。

「なんなんだ一体!？ 芽衣はどうした! おい、魅夜! 起きろっ!」

とりあえず幸せそうに寝ているこの馬鹿を起こすのが先決だ。体を揺さぶってみることにした。

「ん・・・やだぁ・・・らめえ・・・そんなにはげしくしちゃ・・・」

その日。俺は初めて人に殺意を覚えた。

寝惚けてやがるのいいが、なんて事言ってるんだこいつは・・・。

「少尉。退いてなの・・・」

「ん？　うわああ！？」

菜乃隊長が妙に低い声で言うので彼女を見ると・・・、なんとい
うか体全体からどす黒い霧のような物が出ているような気がした。
その目は完全に据わっている。　そんな彼女に俺は正直ビビって
しまった。

「・・・覚悟」

「うわあい！」

菜乃隊長が呟いた瞬間、魅夜が飛び起きた。　・・・狸寝入りだ
ったのか！？

！！

・・・

・・・

・・・

何が起こったのかわからなかった。　一瞬何か光ったと思ったら、
足元にスタボロになった魅夜が倒れていた。

「ああん・・・　菜乃たいちよー強引なんだからあ・・・ガクッ」

最後まで減らず口を叩きながら魅夜は力尽きた。

まあ、それはどうでもいいとして……。本当に一体何があったんだ？　なんでこんな事になっているんだ？

「ごめんなさいなの。私をもつと管理体制を強化していればこんな事には……。本当にごめんあさいなの！」

「あ、いや……。俺としては何がなにやら……」

「こうなってしまったからには全部話すなの。ええと、その魅夜は普段はとても優秀な子なの。機械技術や情報技術はウチの隊では一番なぐらいに……。でも、悪い所があるの」

「……。……。なるほど、なんとなく察したが……」

「そうなの。この子見境無しに襲っちゃうなの。それで何人男子隊員が辞めていったか……」

なるほど。全ての元凶は魅夜か……。昨日俺が自分の部屋に案内されなかったのはコレを見越してって事だったんだ……。

「にしても、男子隊員が辞めるほど酷かったのか？　むしろ男だったら喜ぶような状況だろう？

俺は嫌だが……」

普通はどうだが知らないが、知らない間に裸に剥かれて既成事実なんて作られるのは俺は嫌だ。冗談抜きに魅夜が嫌いになりそうだなこれは……。

「そうなの。でも、皆辞めてしまうの。流石に問題だったから今回は警戒したんだけど……」

「結局また、同じ事になったと」

「うん。 本当にごめんなさいなの少尉・・・」

申し訳なさそうに頭を下げる隊長。 俺も自分の不甲斐なさに申し訳ない・・・。

まさかこんな事があるとは思わなかったし・・・。

・・・いや、まてよ？

・・・

・・・ふむ。 これは・・・。

あまり言いたくないが、なんともないようだった。・・・特に何かが残っていたりしていない。

「いや、隊長。 こんな事を言っても信じて貰えるか分からないが、俺は何も無いみたいだぞ？」

「え？ どういう事なの？」

「いや・・・説明しにくいんだが、ええと・・・使ったりしてないみたいだな」

「・・・少尉」

「仕方ないだろう！？ 他に言い方があんなら教えてくれえ！？」

俺の説明を聞いて菜乃隊長は、なんというかなんともしゃべらないような顔をして下さった。

こんな事を言わした張本人をどうしてくれよう……。

「分かったなの。後の処罰は少尉に任せるなの。ただ……」

「了解。ただ？」

「徹底的にやっちゃってくださいなの」

「……イエス・サー」

隊長から初任務を下された。

任務の内容はこの変態をぶっとばす事。以上。

隊長は「芽衣を探してくるなの。きっと魅夜がどこかの部屋に移動させたと思うの」と言って部屋を出て行った。

俺はその背中を見送ってから服を探し出して着て、スタボロの魅夜見下ろしながら「製作」を開始した。

……数分後ソレは完成する。
中々良い出来だった。

では、性能を試してみようか。

「おい、いつまで気を失っている。起きろ！」

スパコーン！

「ちうあー！？　　っと、何するあるネ少尉！」

「やかましい！　何処の中華人だお前は！」

出来上がった新兵器。　名前は「対変態用強制教育型殴打機・パチキ1号君」だ。　厚紙で出来た丈夫なボディに、その爽快な音を演出するフィルム。　持つ部分にビニールテープで何重もまきつけてあるので握りやすく抜群の操作性を誇る兵器だ。

人はそれを「ハリセン」と呼ぶ。

昨日作ろうと思ってたがもう作る事になるとはな。

「お前！？　昨日会ったばかりなのに・・・一晩流石に絆を深めると違うのだねえ・・・。しかもSだとは思わなかったわ。　ああ・・・恐ろしい人・・・。」

スパーン！

「恐ろしいのは貴様だっ！　　昨晚本当に何もしてないんだろぅなっ！？」

第2撃を食らわせてやると、魅夜は何かフルフルと肩を震わせていた。

うわ・・・強く殴りすぎたか？

「に・・・二度もぶつた・・・親父にもぶたれたこと無いのにい！」

「人の話を聞けええつ！！ 大体お前親父居ないだろっ！？」

スパアアーン！！

・・・コイツの脳味噌はカニミソかつ！？

「ううう・・・何度も殴らないでよおお。 目覚めちゃうでしょ」

「何にだっ！？ それより人が聞いているの分かってるかお前？！」

「でも・・・そんな貴方もス・キ」

・・・すいません菜乃隊長。 今日隊員が一人減つてしまいかもれません。 撲殺で。

「でも、本当にそう思ってるのだよ。 今少尉は親父が居ないって言ったでしょ？ 普通だったならそんなデリカシーの無い事言わないよねえ？」

「あん？ そんなもの気にしてるタマかお前が」

「　　ウフフ　　本当に素敵　　そうなのよ。こっちが気にしてないっていうのに妙に心配したような顔されたら余計に腹が立つっていうのにね」

「だ、だな」

何気無く言ってしまったのだが、結果オーライのようだった。

魅夜の言う通り親が居ないという事を気にする人は確かに居るだろうが、魅夜のように思っている者も少なくないだろう。

俺は両親共に健在だが、なんとなくその気持ちは分かる気がした。

「おっし！　少尉には特別に私の知っている事を教えてあげようではないか」

「いや、お前やっぱり人の話聞いてなかっただろ・・・」

一番教えて欲しい事を言わずに何を言い出すんだコイツは・・・。

「あ、でもスリーサイズはヒミツだよ？　あはは」

「・・・それは一番知らんでもいい」

無いに等しい物のサイズを聞いたってなあ・・・。

「あー酷い酷い！　貧乳にも需要はあるんだぞー」

コイツと話していると日が暮れそうだな・・・。

「分かった分かった。　じゃあ、今までどうして今日みたいな事を

したのか教えてくれ。それで許してやる」

「あ、ホント？　ウソって言ったら・・・」

「ああ、針でもなんでも持ってきて来い」

「じゃあウソだったら1発って事で　ええとね、気に入らなかったのだよ。　前までに来た男連中はロクな奴が居なかったから」

ロク・・・って・・・なんだかその昔の隊員が可哀相に思えてきたな・・・。

「実際危なかったんだから」。芽衣とかムリヤリ襲われそうになってたんだぞお？　むしろ感謝して欲しいのだよエッヘン」

「何！？　それが本当なら・・・偉いな魅夜」

さつき可哀相に思った男子隊員を今度は真逆にぶん殴りたくなかった。

男として最低だな本当だったら。

「そうなのだよ。　汚れ役って大変なのだよ？　もちろん芽衣とかは無事だったけど、私がそうしなかったら一生心に傷が残ってたかもしれないだよ」

なるほど。　そういう理由ならコイツは何も悪くない。　いや、むしろ礼を言われてもいいぐらいなのに、理由が理由だけに言い出せないって事か・・・。

ほんのさつきまでただの変態だと思っていたが、そうでも無いらしい。

「ふむ……。……。ん？　じゃあ、まさか今日のも……。」

「あにや？　いや、今日のは違う。だって少尉さんお風呂で何にも無かったし、そういう人じゃないなあ。って思ったから悪気があつたわけじゃないのよ。」

「ほう？　ならなんで？」

「そりゃ、気に入ったから既成事実を……。おっとと」

「悪気の塊だろソレっ！？」

舌を出して頭をコツンと叩く魅夜。

ちよつと見直したと思ったらすぐこれかコイツは。

「まあ、それにしても、良くそんな事が出来たなあ。女の子にとつて大事なもんだろ？　そういうの」

「あ、いやいや。流石にしていなよ。そう見えるような状況を作つて貶めただけなのだよ。だからまだ生娘なのですフン」

悪女だ。　悪女がいる。

ん？　おい……。って事はだ……。。

「俺とも何も無かつたって事だな？」

ギリ。

魅夜の動きが止まった。 ああ・・・なんと分かりやすいリアクションをしてくれるんだこの汚れ芸人は・・・。

「オマイゴ―っ！ 私の計画がこんな事でー！ー！」

何処の悪役の台詞だそれは。

まあ、良かった良かった。 それなら単なる悪戯で済む。 あんまり洒落にならない悪戯ではあるけどな。

悪が栄えたためしなし。 ってやつだな。

阿呆は放つところ。

「さて、じゃあ後は芽衣だな。 芽衣は何処だ？」

「・・・少尉の部屋」

相当ショックだったのか今度はアッサリと口を割った。 なにやら地面に「の」を書いているがそれは無視しておく。

聞く事は聞いたので俺は芽衣を探しに行こうとドアに歩いていくとした。

その瞬間。

パン！

そんな破裂音がしたと思ったらドアが乱暴に開いた。

そこから現れたのは芽衣で、涙目になりながら片足を上げていた。
・・・蹴り開けたのか。

「・・・魅夜。死んで」

パン！

また破裂音。良く見ると芽衣の手には何やら口径の太めな短銃を持っていた。

その音と共に魅夜の居るすぐ隣の床が粉々に割れた。床はコンクリートの固い床だった。

・・・芽衣。それ普通に人一人殺せるぞ・・・。

躊躇無く撃っている所を見るとゴム弾か？ まあ、それでも打ち所が悪ければ簡単に逝ってしまうだろうが・・・。確かヘビー級ボクサーのパンチ並みの威力があるのかなんとか・・・。

こちらの視線に気付いたのか、芽衣は銃を掲げて見せて言った。

「・・・ううん。ダムダム弾」

「おういつ!？」

まあ・・・ダムダム弾がどういった物なのか説明すると長くなるので簡単に説明すると「とっても酷い惨状になってしまっ弾」だと

いうところか。　．．．確か俺の知っている世界ではそのあまりに残酷な威力に禁止条例があったハズだが．．．。

「．．．．．はんどめいど」

「うるさいわっ!？」

あのおゝ芽衣さん？　昨晚何か綺麗な事言ってますでしたっけ？「相手を無力化する」という俺の意見にも賛同したハズだが．．．
。　そんな物手加減無しに即死確定ですよ？

「落ちて着け芽衣！　いったい何があったんだ!？」

「．．．．．縛られた」

パン！

それだけ呟くとまた芽衣は魅夜に照準を合わせて．．．発砲。

それを驚異的な反射速度でなんとか避ける魅夜。

「あゝ芽衣ちゃん？　ここは休戦協定を結ばないかなあゝ？」

流石に命の危険を感じたのか魅夜はそんな事を言うが．．．。

「．．．．．」

パン！

それにまったく応じずに再度発砲。

今度は避けられずに魅夜は右肩に銃弾を受けてしまう。

「……ああ、腕が吹っ飛んでない。　やっぱりゴム弾だったんだな。」

「いたああい！　腕飛んじやううう」

「……安心して。　フルメタルジャケット弾も混ぜている」

「その何処が安心していいの！？」

流石にたまらず声を上げる魅夜。

「……あのお、俺別にミリタリーオタクじゃないから分からないですが、それって全部真鍮で覆われたとっても危険な奴じゃなかったでしたっけ？」

それをまともに食らって大丈夫な魅夜にも驚いたが、次々と色んな銃弾で応戦する芽衣に恐怖を感じてしまった。

流石に止めた方がいいか……。

「ま、まあ芽衣？　一晚縛られたって言っても特に命に別状があったわけじゃないんだからそれぐらいで許してやるのも大人の見解だぞ？」

なんだか圧倒的な暴力に、俺はちょっと涙目になって魅夜をかばった。

「・・・・・・・・少尉。私は一晩・・・・何も着てなかった」

・・・・は？

「一晩中裸でベッドに縛られていた。・・・・少尉。ご命令を」

色の無い瞳で俺を見つめる芽衣。俺は一度魅夜に振り返ってその姿を確認してから・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・やっちまえ」

親指を立ててGOサイン。

同情の余地無し。

この阿呆は一度痛い目にあった方がいい。芽衣が怒るのも無理は無いしな。

多分・・・・芽衣も「仲間」を本気で抹殺したりはしないだろうし。

「ちょ・・・・・・・・ちよつとお！？ 私は生粋の生身の普通の女の子よお
~~~~~!？」

ほう。昨日、その普通の女の子が風呂場で超人的なリアルバウトを繰り広げていたと思ったが違ったか？

「ラストシユート・・・・・・・・ファイア」

「いやあああああああ！！ 美人薄命~~~~~」

こうして・・・花屑に寄生する悪は滅びた。

俺達はこの事を教訓にして明日を生きていくのだろう。

ああ、香良洲 魅夜 ふおーえぱー。

「綺麗にまとめるなーーーーー」

硝煙の匂いが充満する部屋で、魅夜の断末魔が木霊するのであった。

第6話「汝覚める夢の様に移りゆかん」(前書き)

少尉が入隊した二日目。

私は彼の事がそれとなく気になっていた。

昨日一日で色々とおった気がするが・・・。

とにかく、私と少尉は花屑で過ごす。

軍人として・・・。



## 第6話「汝覚める夢の様に移りゆかん」

私の手には銃を握っていた。拳銃と言うには大きめで、ライフルというには小さ過ぎる。

そんなコルトパイソンを構えて、目標に向かって・・・引き金を引く、引く、引く。

パン！パン！パン！

その銃弾は射撃用的の中心を大きく外れ両肩の部分に数発掠めるように当たった。

これは私にとってはど真中だ。

「・・・・・・・・ふう」

防音用のヘッドギアを外して一息つく。此処は基地の地下にある射撃場。人型のロボットに乗る私達には無用な物に見えるが、こういう距離感等を正確に把握するのは実際に自分の手で撃ってみる方がいい。それに何らかの状況で白兵戦になった場合、最後に自分を守るのは自分しか居ないのだから必要な技術だ。

同じ隊の中では射撃は隊長と香具羅は上手い方だ。逆にちやーこは苦手らしい。私と・・・魅夜は別格だったが・・・。

そういえば昨日入隊した少尉はどうだろう？ 多分銃を触った事も無いのだろうが・・・。訓練無しにこういう技術は無理かもしれない。

それにしても、彼には驚いた。始めてみた時には声も中々出な

かった。何故か懐かしい感じがして・・・とても「父親」に似ていたから・・・。

だけど、それは正確には違う。私には記憶の中に「父親」は居ない。実際に見た事が無い。だから、少尉を見た時に思ったのは気のせいだと思ったのだが・・・。

彼に・・・昨日の脱衣所で守ってもらった時、分かったのだ。

あの人は・・・私の大事な人なのだと。世界にたった一人しか居ない運命の人なんだと・・・。  
そう思ってしまったのだ。

彼はTAM格納庫で「相手を無力化して生かしてあげたい」と言った。それは・・・私がいつも思っていた事だったから・・・不覚にも泣いてしまった。あんな失態は生まれて初めてだった・・・。

彼は不思議と安心できる雰囲気があった。だから・・・甘えてしまった。

知らず知らずに女を意識している自分が居て・・・それが堪らなく悔しかった。私は女である以前に花屑の一員であり、軍人だ。それを・・・彼は女らしくいえると言う。

・・・そんな事できる訳が無い！

パン！ ガチャ！

「あっ！」

我知らずに銃の引き金を引いていた。ヘッドギアを外していたのでその音が鼓膜が痛いぐらいに響いて銃を取り落としてしまった。

何をやっているんだ私は……。

「お、おい！？ 芽衣、大丈夫か？」

「……………少尉？」

私の肩を抱きながら、少尉が心配そうに顔を覗き込んできていた。顔が……………近い。

「……………大丈夫。離して」

私はそう言つて少尉から離れると、取り落とした銃を拾う。幸い暴発しなかったようだ。多分暴発していたら私の足は吹き飛んでいた。ただの訓練でそんな事をしては他の隊員に申し訳ない。

……………本当にしつかりして欲しい……………私。

「あ、いや、すまん。ちょっと覗いたら丁度芽衣が見えたんでな」

「……………」

丁度見えたにしては、反応が早くなかったですか？ そんな目を見るのだけど、彼は分かっている。ただ愛想笑いをしている。他人の敵意に鈍感なのかもしれない。

……………敵意？ 私は彼を疎ましく思っているのだろうか？

「あゝそんな疑いの目で見ると。確かに此処に居るって聞いて

きたんだがな。芽衣、昼はどうするんだ？」

「・・・・・・・・食べる」

そういえばそろそろそんな時間だ。では、この少尉は食堂の場所を聞きに来たのだろうか？ わざわざ私に？ 理解できない。

「いや、そりゃそうだろうけど・・・・あんな、そういうのじゃなくてだな・・・・」

「・・・・・・・・」

なんだろう・・・・。齒切れの悪い男だ。言いたい事があるならハッキリと言えればいいのに・・・・。それは人に言えた義理では無いかもしれないが、人を見ていると少しイライラしてくる。近親憎悪かもしれない。

「今の所俺にはお前しか居ないんだ。一緒に食べるのは」

「・・・・・・・・そう」

多分魅夜辺りなら普通に一緒に行ってくれると思ったのだけど、それを口にせずに私は頷いていた。彼の気持ちは少し分かる気がしたからだ。

私はこの「花屑」に入隊して1年経つ。だけど、未だに香具羅や、せん、魅夜には慣れていない。隊長やちゃーこは昔から知っているでそこまで気を使わないのだけど・・・・。それと同じという事なのだろう。

私はここの配属される前は「学校」に居た。そのクラスメイトだったのが隊長とちゃーこだった。

隊長は年上だったので私より先に学校を卒業して、この部隊に配属された。私とちゃーこはそれを追って入隊を希望した。それだけの話だ。

だけど、少尉には、過去が無い。正確には過去との接点が無い。

世界が変わる程の時間を少尉は飛んでしまったのだ。

彼が知っている者がこの世界でどれだけ生きているのかはわからないが、彼にとってはそれは孤独である事の以外の何物でもなく、彼の言った「私以外居ない」は彼にとって勇気の要る台詞だったはずだ。それを言う事によって現実を認めてしまうのだから・・・。

「・・・・・・・・」

彼の手を取った。彼はビックリしたように私を見ている。

「芽衣・・・・・・・・」

目を細めて私を呼び捨てる彼。昨日から何度も言っているのに辞めてくれないのもう諦めているが、昨日程そうされる事は嫌では無かった。

「・・・・・・・・食堂がある。行こ」

「おう！」

彼は私に手を引かれて着いて来た。射撃場の出口から階段にな

っているのでそれを駆け足で登る。 繋いだ手がブンブンと振れる。  
だが、離さない。

「ピクニックピクニックやっほ〜やほ〜」

陽気に少尉が歌っている。 彼は…とても強い人のようだ。 こ  
んな状況で歌いながら過ごせるなんて…少し見習いたいな。

「やほーっやほー…」

私も少尉に合わせて出来るだけ聞こえない様に言ってみるが、何  
か違う。 何が違うんだろう…少尉は何故か楽しそうなのに、私は  
楽しくない…。

「芽衣…それマジか？」

「……？ 何の事？」

少尉は私を丸い目で見ていた。 何かおかしかったのだろうかや  
っぱり…。

「……芽衣。 どうれ〜み〜って言ってみ」

「?? どおれ、みい〜」

「…分かった。 芽衣軍曹は特別授業が必要だ」

「……？」

何を言っているのだろう少尉は…。 私が少尉に教わる？ 戦闘技

術も機械技術もサバイバル術でさえ知らない男に？

「勿体無いんだよ。声は良いってのに…」

「あ…あの…」

「歌うには腹に何も入って無い方がいいからな！ 頑張れば今日中にサクラぐらい歌えるようになるさ」

「……私は歌える」

「現実には厳しいな芽衣…。お前はかなりの音痴だがすぐに歌姫になれる素質がある！俺が指導してやるんだから大丈夫だ」

少尉はとても失礼な事を言ってきた。私が音痴？ 仮にそうだとしてもそれがなんの不都合があるの？

「……それにさっきのは知らない歌だったから。知っていれば歌える」

「ほう。なら知っている歌を一つ歌って見せてくれよ？」

「うん。……草原に～一輪咲く花のように～風に吹かれて～揺らめいている私～」

「………」

歌いだした私を少尉は静かに聴いていた。

「貴方の言葉で紡いでくれた～幻想譚に心躍らせて舞う～ロンド

」

「輝いてた〜今、そこにあるもの手の平にたし〜かめ〜て」

少尉が合わせてきた。・・・上手い。

「誘われてた〜月っ明かりに天にのぼ〜る〜 風と〜」

釣られないようにしながら私達はハモる。

『森の〜ロンド〜』

・・・どうだろう？

「・・・芽衣。それだけさっきと別人なんだが・・・」

素直に驚いているようで、何か気分が良かった。

「・・・だから嘘じゃないと言った」

そう言うのと、何故か少尉は顔を赤くして目を背けた。・・・？

私の顔に何か付いてる？

少尉は「あー」と言いながら咳払いをして、どこか遠くを見ながら言った。

「あーその、なんだ。・・・芽衣は初見に弱いだけだって事だな」

「・・・たぶんそう」



私自身そんなつもりは無いのだけど。　まあ、彼がそう言うのだからそうなのかもしれない。

自分の事を一番知っているのは自分だというのは傲慢でしかないから……。

彼の言葉と行動を鏡にして、私は自分自身を見詰めてみた。

殆ど喋らずに、反応も鈍いだろう。　可愛い服も持っているわけが無いし、化粧などした事は無い。　得意な事と言えば銃の解体と組み立て。　それとTAMの操縦。　なんとも……面白みの無い女だと思う。

もつとも、今の時代に「女らしく」「男らしく」というのはナンセンスだ。　女だからといって家事が出来なければいけないという事は無い。　ただ、出来る者がやればいいのだ。

私達「花屑」の隊員は、一人を除いて大抵の料理等は出来る。　それも別に花嫁修業というわけでもなく、ただのサバイバルスキルの一環として身についているだけだ。　バリエーションは……私は少ない。

だから、食事当番の日はあまり好きでは無い。

基地には最低限の人員しか居らず、給仕隊員など居ない。　総勢11名ぼっちの小さな基地なので、食糧確保もそこまで大変では無いが、自給自足であるため、メニューが偏りがちだったりする。

そういえばチャーコが「私の夢は大きい牧場を作る事！」と豪語していた。

彼女は動物が好きで、何処から連れてきたのか鶏や、牛等まで飼っていた。

・・・牛はそろそろ食べ頃だと思っているが、ちゃーこが泣くのでやめておこう。

だが・・・その日のメニューはステーキだった。

-----

## 食堂

「しくしくしく・・・」

「う・・・」

「ああ・・・」

「・・・えつと・・・」

「いったきまゝ」

「・・・」

「ん？　なんだ豪勢だな。　中々良い肉じゃないか」

空気を読んでない人が約2名。

泣きながら料理を取り分けているちゃーこを悼まれない顔で手伝う隊長と、

いつも騒いでいるが流石に言葉を無くしている魅夜と、

何事も無いように出された端から食べ始めるセンと、

慰めの言葉を捜しながら考え込んでいる菊池女史と香具羅。

後、分かっていない少尉。

そんな8人が食堂の大きなテーブルを囲んでいた。

女ばかりで普段は騒がしい食堂も、今日だけは気まずい空気が流れていた。

「ん？ どうしたんだ？ 皆、食べないのか？」

そう言つて少尉も皆が（一人を除いて）食べ始めないのを見て手をつけなかった。

「しょういゝあのねゝ。 この牛さんちゃーこちゃんが大事に育てたんだよおゝ」

センがニコニコと笑いながらそう説明するのを聞いて、少尉は口元を押さえてちゃーこを見た。 見られたちゃーこはその視線から逃げるように後ろを向いてしまった。

「・・・そうか」

ちゃーこのその行動に少尉も気付いたようで、料理から一旦箸を置いた。

そこにセンが全員に聞こえるような大きな声で言った。

「うん。 だからとおおつても味わつて食べなくちゃ駄目なんだよゝ 美味しい美味しいって」

センは・・・分かつていてやっているのかもしれない。

それに少尉は頷いてからちゃーこの背中に語りかけた。

「そうだな。　ちゃーこ大尉。　君が大事に育てた牛なんだな？」

「・・・はい・・・少尉」

「そうか・・・。　亡くなってしまった理由は俺は知らないが・・・、まあ、それを俺達の前に出したという事は供養も兼ねてるんだろ？　せつかく育てたんだ。　さあ、皆もそんな暗い顔になっていたら、せつかくのご馳走が勿体無いだろ？　最後の晩餐でもあるまいし、御相伴に預かるうじゃないか」

「少尉・・・」

ちゃーこは背中を向けながら肩を震わせていた。

「・・・・・・少尉。　その通りだと思う」

私もそれには同感だったのですぐに頷いた。　頷きながらも平気でそんな事を言える少尉に少し感心した。　セン以外誰もが口を紡いでしまっていたのに・・・。　それも、事情を知らないにしても、それを受け止めた上で言葉を選んで言っているようだった。

これがつい昨日までただの一般人で、入隊したばかりの者の発言か？　隊長のような落ち着きがある。　本当にただの高校生だったのだろうか・・・。

「流石少尉じゃ。　ワシの見込んだだけの事はあるのぉ。　ほらほら、菜乃、香具羅、魅夜。　新参者に言われるまでも無いじゃろうが？」

「うん。 そうなの。 皆も食べましょうなの」

「・・・分かったわよ。 ちゃーこ、頂くわよ？」

「んっふふっ 好感度更にあっぷっぷう」

各々にそんな事を口にしながらフィークとナイフを手にとって、肉を切り分ける。

肉はとても柔らかく、丹念に焼かれていたが肉汁がたっぷり出ていてジューシーな香りが漂っていた。

そして、それをフォークで口に入れようとした

その瞬間！

ドゴオオオーーンッ！！！！

オーンオーンオーン！

『緊急指令！ 緊急指令！ 基地敷地内に敵国の物と思われるTAMが来襲！ TAM搭乗者は速やかにこれを殲滅してください！ 繰り返す！基地敷地内に』

「！？」

「皆！！」

『はい！！』

爆発音と共に警報が鳴り響いた。敵の攻撃が直接基地まで飛んできたようで、食堂内は激しい衝撃を受けてしまった。すぐに隊長が皆に号令を掛ける。

「・・・・・・・・」

「少尉！？ 何をしているなの！ 早くTAMへ！ 初出撃にしてもあの中の方が安全なの！」

「あ・・・ああ、すぐ行く」

そう少尉は言ったが、椅子に座ったまま動こうとはしなかった。彼の目の前には散乱したテーブル・・・。

「・・・・・・・・分かったなの。落ち着いたらすぐに来てね」

「分かった。隊長ご武運を」

そう言った彼の目は・・・焦点が合っていなかった。・・・当たり前だ。急に戦闘だというのだから錯乱しても仕方ない。

今回は、この食堂を守りながら戦わなくてはならないだろう。

・・・私達なら出来るハズだ。

少尉着任後の初出撃はそんな出撃だった。

## 第7話「汝愛を叫ぶ友と共に斗う」(前書き)

お昼にしようとしていた私達の基地に敵襲。少尉は・・・動けな  
いようなので食堂に待機だ。だから・・・絶対に私達が守り切る  
！

## 第7話「汝愛を叫ぶ友と共に斗う」

「最近接近を許しすぎじゃない!? どうなってんのよセキュリティ  
イハ!」

「あー・・・そういえば私、昨晚切つて、セキュリティ起動させる  
の忘れてたわ」

「お前のせいかー! 馬鹿ああ!」

紫の魅夜の機体と緑の香具羅の機体が揉み合いながら飛んでいる。  
・・・漫才は後にして欲しい。

今は戦闘中なのだから。

彼女の性格のような黄色い機体に乗るセンは・・・。

「あつははー敵さんどこかなあー?」

まるつきり緊張感が無い。いつも思うのだけど、どうしてセン  
はTAM搭乗者なのだろう・・・。特別操縦が上手いというわけ  
もなく、いつも敵が出てきても大半は逃げ回っていたりしているだ  
け・・・遊んでいるだけだった。

敵の数は検索結果から「旧式TAMが20体と新型が1体」らし  
い。

旧型は物の数では無いが・・・その新型というのは・・・。 実



は前に戦った事がある機体だった。

その時の結果は・・・引き分け。　これは衝撃的な事だった。

私達は6体。　相手はたったの1体だ。　それが・・・引き分け  
という事は相当のスペック機体と操縦スキルがあると思って間違  
いない。

そんな相手に、先程牛のゴローさん（全部名前がついているらし  
い）の追悼晚餐会を滅茶苦茶にされたちゃーこは、その傷心のまま  
に出撃して大丈夫なんだろうか・・・。

「ぜええええいんかかってこおおおおおおおいっ！  
！」

・・・大丈夫のようだ。　怒りがMAXになっている。　彼女の  
赤い機体TAM-02が更に真つ赤に燃えているように見えてしま  
った。　ただ、怒りに我を忘れてミスをするマズイので援護射撃  
の準備はしておかないと・・・。

隊長は、反則的な兵器を使わずに普通に格闘戦をしていた。　菜  
乃隊長の機体は超兵器を装備しているが、それは使用すると味方に  
も甚大な被害が出てしまうはた迷惑な装備だったから「切り札」に  
しかない。

ここで少しTAMについて説明すると、TAMは人型の兵器で、  
各TAMには専用の装備等がある。　例えば私のTAM-01ヒナ  
ギクだと射撃用のライフル等が2丁。　短銃が1丁。　それと接近  
戦用のナイフ状の装備が一つあったりする。　後、全機共通で頭部  
付近にバルカンや、腰の辺りに反応弾が装備されていたりする。

後、動力は基本的に電力だが、このTAMには人の感情を糧にするという困ったシステムが組み込まれている。

今のちゃーこのような状態だと怒りがそのままパワーになって機動力等は上がる。他にもそんな迷惑なシステムがあるらしいが、詳細はブラックボックスの様に詳しく分かっていないらしい。

さつきから困った、とか迷惑なとかいう表現をしているのはそれが「意図的では無いのに発動してしまう」からだ。

だから、私のように感情を制御するのは良い事らしい。

・・・制御してるんですよ？

「オラオラオラあ！ このククチャーコ様が相手してやるっ！尋常に勝負しやがれえええ！！」

・・・

ちゃーこは熱くなると男言葉になる。それは彼女が「キレている」証拠であり、あまりよろしくない状況だった。

「ちゃーこ。冷静になって。あの白銀の機体が居る」

「うるさい芽衣！ 私はゴローさんの仇を討つんだーーーーー！！」

・・・聞いてくれない。まあ、その勢いに任せて次々と相手のTAMを撃墜しているから別にいいのだけど・・・。あ、危ない。

ちゃーこの死角に1体居る。

「ちゃーこちよつと右によって。ヒナギク、前方11時の方角にステルススラスターをシユート」

「ラジャー。 ステルススラスター発射」

私の乗るTAM-01ヒナギクのオペレーションシステムが軌道を自動で修正して特殊弾を発射する。 弾自体にステルス迷彩処理が施してあるので、相手からはその音ぐらいでしか反応できないような物だ。

チュドーン！

弾は難なく敵に命中したようで撃破成功した。 間近で爆発が起こった事にちゃーこは一瞬我に返ったように辺りを見渡すが、すぐにまた飛び回り出した。

・・・はぁ・・・。 ちゃーこの危機だから、高価な弾を使ったのに・・・。

それに・・・爆破してしまった・・・。 今回は仕方ない。 それに、すでに私の手は汚れている。 最低限気をつける事にしよう。

「ちゃーこお！ 出過ぎなの！ 一旦戻って！」

流石に隊長が悲鳴の様にちゃーこに向かって声を上げる。

その声にも応えずにちゃーこは前進を続けるが・・・

「こちらちゃーこ！ へっ！ コイツら口程にもねえ！ ドンドンいくぜ・・・。 うわっ！？ な、なんだ！？ 何処から撃ってきやがった！」

暴走を続けるちゃーこを止めたのは敵の銃弾だった。それを受けたちゃーこの機体はその衝撃で止まったが、ちゃーこの周りに敵は居なかった。

「くそにやる・・・前のシルバーさんか!」

ちゃーこが吼えると物陰から白銀の機体が現れた。敵国の新型で、遠距離射撃が得意な機体のようなだった。しかし、その機体の手には銃は握られてない。機体に砲撃用の穴が開いているわけでもない。では、何処から撃って来るのか？ 答えは簡単で最悪だ。

空中からだ。

空中に無数の発射ポッドが浮かんでいる。それがどういう原理でか、動き回って、狙い撃ちしてくるのだ。

相手は確かに一体だが、私達はその発射ポッドの数だけ相手しなくてはならない。

「芽衣！ 援護して！」

隊長が私に命令する。それを聞くまでも無く、発射ポッドを探してそれに数発打ち込んでやる。

・・・しかし、発射ポッドはそれに反応して避けてしまう。

反則だ。

ならば本体を狙おうとすると、すぐに物陰から物陰に隠れてしまつてサーチシステムも追いつかない程の敏捷速度だった。

機動力なら、ちゃーこの機体も負けてはいないのだが、彼女は今冷静さを失っている。逆に墮とされないようにするのがやっとだろう。

そういえば、魅夜達は……。

「ほら！ 白銀の！ 来たわよ！？」

「んー香具羅さんは私が守ってあげるからねえー」

「たあああ！ もう！ 離れて飛びなさいよ！！」

……隊長。私、あつちを撃ちたいです。

センは……。

「わー！ くるよくるよー撃ってくるよー きゃっほおおい」

発射ポッドに追われて逃げ回っている。幸い一発も被弾してないようだ……。戦力外だった。……いや、センの避けた弾が敵の他のTAMに命中したりしているので実質的には頑張っているのだろうか……。

まともに戦っているのは私と隊長だけ？

「……隊長！ このままでは……」

「魅夜！ 香具羅！ 千代！ 遊んでないで真面目にやりなさい！ さもないと帰ったらお仕置きですよ！」

『い、イエッサー・ボス!』

流石に一喝されて3人は命令に従った。隊長は怒ると怖い。

そう言っても、魅夜や香具羅はじゃれ合いながらも他のTAMを殲滅していたようで、残っているのは後、敵の新型TAMだけだったようだ。

『はっはっはっは、花屑の皆さん流石にやりますねえ! ですが、私のG-TAM銀月には敵うまい!!』

・・・アホが居る。

敵の白銀の機体は何を考えているのか外部スピーカーで話しかけてきた。お互い敵同士なので、通信は出来ないから仕方ないのだろうか・・・。

どれだけ傲慢なのだろう。 いや、ただの馬鹿だ。

「何なの? あの機体・・・。G-TAM? ギンツキ? 名乗ってたかっただけなの?」

隊長も流石に困惑してしまったようだ。 私もこんなのを相手してると思うと頭が痛い。

それでも、そう言うだけの実力があれば、話は別だ。

『隊長機はそっちの赤いのだな? その命貰ったあ!!』

「赤は隊長機」などというレトロな考え方をされても困るのだけ  
ど……。」

いや、それより発射ポッドが全部ちゃーこに向かつて居る！

「ちゃーこ！ 危ないなの！」

「どわあー!!」

発射ポッドが弾を打ち出すよりも早く、隊長の機体がちゃーこの  
機体突き飛ばす。

発射ポッドから打ち出された弾はその両方を何とか外れたようだ  
った。

しかし

「!? マズイ！ あつちは……！」

その流れ弾の一つが……基地のある方角に向かつて飛んでいっ  
た！

「……少尉！ 菊池女史！」

なんと愚かだろう。私や隊長はちゃーこに釣られて前に出すぎ  
ていたのでそれを止められない。魅夜と香具羅はその事に気付い  
ていないし、気付いても遅い。彼女達の反応速度より弾の方が早い  
！ センは！？

「わわっ！ そっち行っちゃだめえ！」

上手く軌道上にセンの黄色い機体が居た！  
お願いセン！  
止め

しかし、その想いも空しく、黄色い機体はその弾道を止める事は出来なかった。

ドオオオオンツ！！！！

基地の一角がそれによつて炎上する。

少尉！  
菊池女史！

「少尉イイイイ――――！！」

皆が絶叫した。

まだ着任2日目でこれだけ思われるもの、彼の人柄のせいかもしれない。

センや香具羅はどうか分からないが、隊長や魅夜、ちゃーこは彼をすぐに認めてしまったから。

それだけ、慕われていたらしい。

私も……彼がやられて悲しい。



それは今センが止めてくれなかったからだとかでは無く、私達全員のせいであるからとても悔しかった。

「ジュン少尉……。貴方の事は忘れない……。」

私は昨日の事や今日の事を思い出しながら一瞬だけ黙祷した。

今は戦闘中だ。

これ以上の哀悼は自分の身までも滅ぼす。

「皆！ 少尉の弔い合戦なの！！ 全装備を尽くして一斉にかかれなのおおおお！！」

隊長が命令を下す。

「おおおおおお！！」

ちゃーこが先程の比で無い程の怒りを爆発させている。

「少尉の仇ー！って私も少尉だけどねえー！ いくぞおっ！」

魅夜は、彼女なりに怒っているんだろう。口調がハッキリしている。

「あの方は……。とても良い人だったのにつ！」

香具羅は……。意外にもそんな事を叫んでいた。初日に何か陰悪な事になったと聞いたけど……。見直していたらしい。

「あははゝ とむらいとむらいゝ」

．．．センはいつもと変わらない。 いや、もしかしたらこの子も．．．。

少尉は．．．凄いな。 たった一日でこんな．．．。

私は．．．出会って間もない彼をそういう信頼関係にあったかどうかと言えば疑問だけど．．．、守れなかった事は確かだ。

相手のTAM．．．．．絶対に許さない！

私達は発射ポッドに構わずに本体の白銀のTAM目掛けて突貫した。

第8話「汝駆け抜ける風のように定めせし」(前書き)

現れた強敵(?)との戦い決着。

## 第8話「汝駆け抜ける風のように定めせし」

敵のTAM 銀月はそれを逃げる事もせずに、迎え撃つつもりだ。  
舐められている!?

『何か知らんが全員捨て身とはっ! 失望したぞ!』

銀月は動かずに、周囲に散っていた発射ポッドを自機の周りに集め、一斉に砲撃を開始した。

突貫している私達はそれを避ける事もせずに・・・ただ敵を目掛けて前進する。

数発食らって、魅夜、隊長、香具羅、ちゃーこの順番に流石に止められてしまった。

だけど・・・まだ終わりじゃない!

『何っ!? 馬鹿なっ! 15のポッドを抜けてくるだっ!?!』

驚愕しているがもう遅い。私のTAM-07ヒナギクは銀月に接近する。

『が、G-TAMを舐めるなあ!』

そう聞こえたと思うと、今一瞬前まで目の前まで迫っていた銀月が・・・消えた。

「え・・・・・・・・」

『後ろだ、小娘え！』

「！？」

なんと銀月は私の機体の後ろに回りこんでいた。信じられない加速だった。

やられる！

銀月の振り下ろす手刀をスローモーションになるのを感じた。それは最後の一瞬だったからか……。この手刀が私の機体に到達すれば、私は堕ちるだろう。

ごめん・・・隊長、ちゃーこ、魅夜、せん、香具羅・・・・・・・・。

そして少尉っ！

・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・・

あれ？

何も起こらなかった。

目の前の銀月は振り下ろそうとした格好で動きを止めていた。

『ぐ……このタイミングで邪魔 入るとはっ!』

銀月の外部スピーカーからくぐもった声が響く。 機体にダメージを受けたようで、その音声も若干飛んでいた。 良く見ると、銀月の肩にTAM用ナイフが刺さっていた。

何が起こったのだろうか？ 隊長達は先程のダメージでまだ動き出していない。

なら……セン？

そういえばセンは何処？

彼女の黄色い機体をメインスクリーンで探すと、彼女のTAM - 04 キザクラは少し離れた場所で直立していた。 ……一緒に突っ込まなかったの？

私の脳は少し混乱していたのかもしれない。

だって、銀月の隣に……黒い機体が居たなんて信じられなかったから。

TAM - 06 オニユリ

「少尉!!?」

「全部通信聞こえてたぞ?　たくっ勝手に殺すな俺を!」

やはり少尉だった。彼は生きていた。理由は分からないが、良かった・・・。

「どうして!?　少尉は食堂に残っていたんじゃない?」

「ああ、話は後だ。今は戦闘中だぞ軍曹!　ああ、そうそう、ちやーこ、聞こえるか?」

面倒くさそうに流して、少尉はちやーこに、TAM-02へ通信する。

「こ・・・こちらちやーこ!　少尉!　御無事で何より」

ちやーこもなんとか無事だったようで通信に応えてきた。

「ああ、そんな事はどうでもいいって言うてるだろう!　ええとな、その・・・なんだ」

やはり少し面倒臭そうにそれを流して、少し歯切れの悪い言葉を発した。

「はい」

しかし、その後の一言だけはハッキリと言った。

「肉、美味かったぞ」

「！！ 少尉！ まさか残ったのって・・・」

「うるさい！ 今は目の前の敵を殲滅するんだ！」

少尉が照れくさそうに叫んでいた。 それを聞いたちゃーこは・

・

「はい！！ 少尉！ 愛してます！！ 貴方の為に絶対に勝ちます  
」！」

・・・・・・私は通信を切りたくなかった。

『貴様ら！ 俺を無視しているなっ！？ 舐めるのも大概にしろっ  
』

あ・・・銀月を忘れていた。 どうも少し放っておかれて気分を  
害してしまったようだ。

カルシウムが足りないのだろう。

銀月は少尉の攻撃（？）で少しダメージを受けていたが、まだま  
だ動けるようで、すぐに発射ポッドを展開してきた。

「少尉気を付けて！ あれは・・・」

「おゝ流石未来。 ビットか。 相手はエースパイロットってやつ  
か？」



少尉は発射ポッドを見ても驚いた様子もなく、ただ感心していた。

発射ポッドは新しく現れたTAMに狙いを定めて・・・撃った。

実践を経験した事が無い少尉にあれを避ける術は・・・

「おっと」

・・・避けていた。

え・・・と？

「少尉！？ 昨晚操作習ったなの！？」

流石に隊長も驚いていた。 ううん。 昨晚はただ動力系の簡単な説明をしただけ・・・。

何故動かせる！？

「ん？ 隊長か？ いんやあ？ それよりあのビット邪魔だな。 芽衣打ち落とせるか？」

しかも、初めての戦場だということにとっても落ち着いていた。 これは・・・誰だ？

「・・・ダメ。 狙ってもすぐ避ける」

「ほう・・・？ じゃあ、手動で撃てばいいだろ。 そういうの無いの？」

「・・・・・・・・え？」

少尉の口からまたそんな台詞が出た。そんなに詳しく説明をした覚えは無い。

確かに今の設定は自動で照準と索敵をするようにしてあるが・・・。

「いいから。俺を信じろ」

不思議とその少尉の言葉には力強さと安心感があった。

「・・・・・・・・ヒナギク。オート射撃からマニュアル射撃に変更。照準自動補正カット」

「ラジャー。マニュアルON」

オペレーターシステムがオートモードからマニュアルモードに変更する。これで実際に機体の腕を動かして照準を合わせなくてはならなくなった。

「おし、適当に目標を外して乱射しろ」

「・・・・・・・・了解」

良く分からなかったが、私は言われた通りに何も無い場所へと発砲した。

チヨドーン！

・・・・・・HIT。

「よし、思ったとおり　ちゃーこ！　憂いは無いぞ！　存分に暴れる！」

「了解少尉！　久々知　智亜子、突貫しまーす！」

少尉の号令でちゃーこが白銀のTAM目掛けて突撃する。発射ポッドは引き続き私が打ち落としていく・・・。面白いぐらいに落ちていく発射ポッド。

『馬鹿な！？　自動回避システムを上回る射撃だとお！？』

銀月のスピーカーから驚愕した声が響く。なるほど。自動で避けていたのか。という事はある程度自動で射撃もしていたのかもしれない。

人の思考で操作しているなら、そこまで早く反応出来るわけが無いと思っていたが・・・。

・・・それを少尉は見抜いた？

一瞬現状を見ただけで？？

「シルバーさんよお！　お前の相手はこの私だあ！　受ける！　烈火豪襲拳！！」

『何！？　うわあああ！！』

ガキインッ！

冷静さを取り戻したちゃーこの速度に着いて行けず、TAM-02の燃える拳をまともに食らう銀月。ちゃーこの叫んでいるのは彼女が勝手に付けた技名で、実際に燃えているわけではないのだが・・。

その衝撃で数100m程吹っ飛ぶが、すぐに立ち上がってくる。

まともに食らってまだ動けるっ！？

「菜乃隊長！ トドメだ！ アレを！」

「え・・・少尉！？ そんな事まで！？ でも、アレは・・・」

「大丈夫！ 説明を受けた！」

「・・・分かったなの！ ヒメユリ！ グラビティブラストウェーブ発射準備！」

「ラジャー、マスター」

隊長のオペレーターシステムがTAM-01の「切り札」を承認した。

「皆！ 俺の機体の後ろに着けえええ！！」

「なにになに？ 少尉いたいになにっ！？」

「……………えっと、了解」

「あっはっは〜とどめとどめ〜」

「もう、なんなのよ!? OK、着いたわよ」

登場してからまるで隊長のように号令を下し続ける少尉。

本当になんなのだろう。

『く…………この私が…………負けるわけが無い!』

銀月が吼えながら隊長の機体に突進する。ダメージがあったので、その速度は先程より遅かったが、まだ十分動けるようだった。

隊長!

「遅いっ! 合わせろよ隊長! グリーンインバリットシステム展開!」

「うん! グラビティプラスウェーブ…………発射!!!」

銀月が隊長の機体に到達する前に、隊長の超兵器が発動する。

ドゴオオオオオオオン!!

TAM101を中心に絶望的な爆発が起こった。

「…………あれ?」

その衝撃波は私達の機体にも・・・来ない？

良く見ると私達の前に緑色の薄い膜のような物が展開していた。  
それが衝撃波を防いでいた。

『な・・・なんだこれはああああああ！！』

銀月のスピーカーから断末魔が聞こえてきた。

アレは昔100ものTAMをも殲滅させたような兵器だ。      まと  
もに食らって無事では済まないハズだ。

・・・

数分後。

爆発の砂塵が収まると、辺りには動く物が無かった。

私達7体のTAM以外は・・・。

「・・・色々と聞きたい事があるだろうが、とりあえず帰還しよう  
ぜ。    ちなみに基地に飛んできた銃弾は食堂の隣に被爆しただけで  
大した事は無かった。    もちろん菊池女史も無事だ」

「・・・。。。。そう。    了解」

もちろんそれで済ましたくは無かったのだが、今回の功労者は誰

が見ても少尉なのだから素直に聞くしかない。

「それと隊長。色々偉そうな事言っちゃってすまなかった。状況が状況だったから勝手に指揮したぞ？」 状

「あ、うん。 け、結果オーライなの。 少尉、お・・・お疲れ様なの」

隊長でさえ、先程の夢のような状況を理解するには時間がかかっているようだ。

色々と分からない事ばかりだったが、私達は全員無事に基地へと帰還した。

-----

食堂に戻った私達は、全員困惑顔のままだった。

なにせ、先日入隊したばかりの少尉が、TAMを難なく動かして、しかも的確な助言までしたのだから・・・。

種明かしをしてほしかった。

食堂は出撃前より酷い状況だった。 テーブルは倒れ、その上に乗っていたゴローさん（牛の名前）の追悼料理は床に散らばってしまっていた。

それを一切れ少尉は拾い上げた。

「ん・・・流石に硬くなったな。まあ・・・食べれないことも無い」

そう言って少尉はその肉を食べてしまった。

「少尉！？ 肉ならまだあるからそんなのを食べなくても・・・」

ちゃーこが慌てて止めるが、少尉は気にした様子も無く、更に落ちていた肉を拾っていく。

「汚かるうが、これは大尉の大事な物だろ？ ちょっとぐらい汚れても人間大丈夫に出来てるからな」

「・・・少尉・・・」

・・・ちゃーこの目がハートだった。

何故かそれを見ると気分が悪くなってくるのだが、何故だろう？

「そ、それよりも少尉。どうしちゃったのだあ？ イキナリ現れて何処のヒーロー漫画かと思ったぞ？」

魅夜が誰もが聞きたい質問をすると、少尉は肉を拾うのをやめて私達に向き直った。

「あゝ・・・長くなりそうだが、いいか？」



「・・・はい」

「うんうん」

「だいじょうぶです」

「少尉お願い、話して。私気味が悪いわ」

「聞かせて欲しいなの」

「うふふ。二人の夜は長いから大丈夫よ」

スパン！

「みゃう〜ん！？」

全員即座に頷いた。最後の魅夜の台詞に少尉は何処からかハリセンを取り出していたが、そんな事より早く話して欲しい。

「・・・コホン。まあ、俺自身驚いているのだけだな。俺は時間を飛んだってのは皆知ってるんだよな？」

「はいなの。それは全員に話してあるなの」

隊長が代表して答えた。全員が話すと話が進まないと考慮したのだろう。

「そうか。それなら俺の体は・・・なんとかって少尉の物だったのは知ってるか？ ああ、答えなくていい。この体は俺であって俺でないんだ。元々誰かの体だったらしくてな。その体に俺が

入っているって事らしいんだが・・・」

「菊池女史と同じなの」

「そうらしいな。で、菊池女史の場合、元の体が軍医だったらしくてそのままその技術を使えたと言っていたんだが・・・。それは俺もそうだったらしい」

「・・・どういう事なの？」

「つまりだ。前の体の少尉はTAMの操縦が出来たみたいだな。俺がオニユリに乗り込んだら懐かしい感じがして、後は適当に動かせた」

「て・・・適当で動かせたら世話ないわよっ！」

香具羅が堪らずに声を上げる。うん。その気持ちは良く分かる。私も同じ事が言いたかった。

「いや、それ以外にもな。操縦系統が・・・その、なんだ・・・。昔ゲーセンでやったゲームにそっくりだったんだ」

「は？」

「いや、多分設計した奴がそれを真似たのかどうか知らないが・・・、ほぼ同じようなもんだったぞ。二つある操縦桿を同時に前に倒すと前進。前と後ろに倒すと旋回。左右に広げると飛び上がった時には吹き出しそうになったぞ」

少尉の言っている操作は、実はその通りだった。操縦席の前に

二つの操縦桿が伸びていて、それを少尉の言ったように操作すると、そんな動きをする。後は色々とボタンが付いているのでそれを押したりするのだが、それは分からなくてもそれだけ分かっていれば十分動かせる。

・・・しかし、ゲーム？

そんな事で！？

「攻撃方法とか若干分からなかったから芽衣とかに任せたが、それは仕方ないよな？ ああ、後、ビット・・・でいいのかな？ 空を飛び回ってたヤツ。あれって昔やってたアニメであるようなヤツだったからな。驚きより感動したぞアレには」

『・・・・・・・・』

私達は沈黙するしかなかった。

話を聞いているとゲーム？ アニメ？

ふざけ過ぎている！

「そのアニメには打ち落とし方もやってたが、それよりどうせコンピュータで制御してるような物だと思ったからな。適当に・・・予測不可能な撃ち方すれば騙しで当たるんじゃないかと思ったんだ。まさか本当に落とせるとは思わなかったがな 要するに芽衣の射撃が正確過ぎたって事だ」

しかも、私にそんな駄目出しまでしてくる・・・。

今まで真面目に訓練してきた私達はなんなのだ・・・。

「そ．．．それにしても少尉落ち着いていたなの。初めての实战は怖くなかったなの？」

「．．．そりや怖いだろ普通。だけど、昨日から異常な事ばかりの連続だったからな．．．。そういう感覚がマヒしたのかもしれない。要は慣れってやつか？」

少尉はウソを言っているのでは無いのだろうが、私にはどうしてもまだ信じられなかった。

昨日まで一般人で．．．ただの高校生だった者がどうしてそこまで達観出来てしまうのだろうか？ 彼は．．．何者なのだ？

「．．．．．少尉。アナタは本当にただの高校生だったの？」

「．．．．．」

私が聞くと、少尉は少し考えるように眉間に手を当てて、そうして肩を竦めてみせた。

「俺自身そうだと思ってたんだがな？ 元々の世界じゃ色々嫌な事もあったし．．．そのせいかな」

「．．．．．嫌な思い出は思い出さなくていい。ごめんなさい」

私は少尉の目が一瞬生氣を無くした様に見えてしまっただけでそれ以上聞けなかった。嫌な思い出．．．。私にもあるから分かるつもりだ。

「まあまあ。とりあえず少尉は即戦力って事なのだよ芽衣」

魅夜が笑いながらそんな事を言う。

確かに・・・少尉の機体は隊長の超兵器を使う事が出来るように補助する機体だから、戦力は大幅にUPしたと言える。

今の所少尉は基本動作が感覚で分かっている程度のようなので、本当に混戦等になると分からないが・・・とても心強い戦力になったのは確かだった。

「あ、そうそう。その事なの。少尉はこれでおしまいなの」

「!？」

隊長が急に言い出した台詞は流石に驚いた。しかし、すぐにそれは杞憂と分かるが。

「あ。別に退隊ってわけじゃないの。今回の作戦で少尉は大尉にしようと思うの」

「おー！イキナリ昇格ですか 流石少尉！ って少尉じゃないのか、よっ大尉！」

「おお、なら私と一緒にして事ね」

ちゃーこが嬉しそうに少尉の手を取って喜んでいた。

・・・何か発砲しなくなった。何故だか分からないけど。

「あーちゃーこ？ 貴女はこれから中尉なの。今回の命令無視に

は久しぶりにトサカに来たなの」

「ええ〜！？ 菜乃〜それって横暴よお〜」

「黙れなの！ 貴女のおかげで皆がどれだけ危険な目にあっただのか  
思い出すなの！」

「あう・・・分かりましたあ」

「ごめんちゃーこ。 何故かいい気味だと思ってしまった。 中尉  
降格おめでとう。」

「え〜とお〜。 階級がどうつてのはいいんだが・・・ 隊長を  
抜きにしたら俺が一番階級が高くなるぞソレ？」

少尉・・・いや、大尉も流石にこの急展開に着いて行けずに困っ  
たようにするが、菜乃隊長は笑顔でとんでもない事を言う。

「ううん大尉〜。 今回の作戦で貴方の指揮はとても良かったの。  
むしろ隊長を変わって欲しいぐらいだったの 適材適所だと思  
うなの〜皆はどう思う？」

「ここまで来ると答えなど求めなくてもいいとは思うが、隊長は一  
応聞いてきた。」

「 私はもちろん賛成〜」

魅夜、賛成。

「 うんうん カッコよかったからOKだよお 」

せんも賛成。

「・・・いいと思うわ」

香具羅も少し考えたが賛成だった。

「うゝ・・・ああん！ もう！ 分かった賛成賛成！」

哀れなちゃーこも渋々賛成したようだ。

「・・・・・・・・」

私は・・・。

「芽衣ももちろん賛成なの？」

隊長は妙に笑顔で言ってくる。

コクン。

思うところはあるが、認めないわけにもいかない。

・・・あの時、助けてくれたし。

「うん　じゃあ今日は大尉就任祝いとちゃーこの中尉降格祝いに  
ゴロー君を食べつくしましょうなの」

『はあああい』

こうして、少尉はたった二日目にして大尉へと昇格した。

彼が乗ることになったTAM-06オニユリの事など色々と不安はあったが……。

今日は色々と疲れたのでそれはとりあえず置いておくことにしようと思う。

「あ、そうだ芽衣。 祝いっていうなら昼間歌った歌を皆に聞かせてやったらどうだ？」

大尉は唐突に無茶な事を言い出した。 皆の前で歌うなんて恥ずかしい事を私にしろと？

「嫌か？ 上官命令だぞ芽衣軍曹」

昇格していきなり職権乱用する大尉。 まあ、元々少尉であつても上官なのだが……。

「め、芽衣が歌うの!？」

「た、大尉！ やめた方がいいの！ 芽衣は」

ちやーこと隊長が何故か必死に止めようとする。 私は所持している短銃のセキュリティロックを外そうかと一瞬考えてしまった。

「おっ？ なんだ隊長もちやーこも聞いた事無いんだな？ 普段音痴みたいだが、今から歌うのは一味違うぞ？ 芽衣、聞かせてやれ」



ハッキリ音痴と言った大尉。

……しかたない。　今回だけという事で納得しよう。

「……大尉。　一緒をお願い」

「分かつてる。　元々デュエット曲だからなアレは」

歌う曲の名前は「風と森のロンド」。　私が幼い頃に聞いた歌だった。　大尉の知っている世界では有名だったのだろうか？　私は、その曲を母が歌っていたのを思い出しながら・・・ビブラートを紡ぐ。

『  
』

歌声が流れ出すと、隊長もちゃーこも一瞬ビックリしたように顔を見合わせるが、すぐに目を細めて謹聴してくれた。

「風と森のロンド」は、とある青年と少女の物語を歌にした物らしい。

その歌詞は私は好きだったから覚えていたのかもしれない。

「花屑」基地内食堂に二人の歌声が響き渡る……。

それはゴロー君のレクイエムであり、私達の勝利の賛美歌となった。

そうして、大尉の花屑での二日目が暮れていった。

## 第8話「汝駆け抜ける風のように定めせし」（後書き）

第2話的な話終わりです。

次の展開は軽いお話ですので気楽に見てくださいね。

http://9922.at.webrary.info/  
にて芽衣のメイド服が見れます（何）

## 第9話「内部紛争勃発1」（前書き）

3日目。

雨が降った。

私達は野外訓練等も無く、室内でゆつくりする事にした。  
昨日出撃したばかりだし疲れていたのかもしれない・・・

## 第9話「内部紛争勃発1」

ジユンさんが大尉に昇格した次の日。

私は昨日の事を考えていた。

昨日、晩御飯が終わってから大尉と少し話をした。

この世界の事、TAMの事、花屑の事、皆の事。 . . . . .  
本当は大尉の過去の事が聞きたかったのだけど、その話題になると彼はとても複雑な顔をしてしまうのでどうしても聞き出す事が出来なかった。 変わりに私の事もほとんど喋ってはいない。

私は過去の記憶がとても曖昧だった。 自分の両親の事も臆気に覚えていてだけで、実は両親の顔さえもハッキリと思い出せなかった。 だけど、良く歌ってくれた母や父の面影は覚えている。 思い出は . . . 基本的にソレぐらいだった。

何か . . . 雨では無く、そういう雰囲気の中で何かあったような気がするのだが . . . 。 ある時を境に思い出せなくなってしまった。

痴呆症だろうか？

. . . . . 降り続く . . . 雨では無く . . . 雨では無く . . .

ザー . . . . .

昨晚から雨が降り続いていた。朝目が覚めても外が暗いとは思ったが……。

ドスン！

私はまどろむ目を擦りながらベットから滑り落ちていた。

痛い……。。

「何やってんだよ寝惚けてるのか？ 芽衣」

少……大尉が私を見下ろしながら歯を磨いていた。部屋に簡単な洗面所があるが、そんな私物を「私の部屋」に持ち込まないで欲しい。

大尉は昨晚も私の部屋に泊まった。

もう魅夜の奇行はバレているのだが、大事を取って自室には向かわなかったのだ。

いくら部屋に鍵を掛けても魅夜は簡単にピッキングしてしまうので意味が無い。初日も勿論鍵を掛けていたのに……。

大尉は昨日の作戦から皆からとても慕われた。だから別に魅夜だけが危険だとは言えない。……昨日の様子だとちゃーこだつてもしかしたら……。

私は、そういう事とは無関係なので彼を受け入れたというだけの話だ。

昨日は大尉は床で寝たようだし……。私がどれだけベツトで寝てと言っても聞かなかった。なんと頑固な人だろう。

それにしても……。大尉は昨晚すぐに寝ずだったから、ちょっと心配だった。

「……………大尉。体は痛く無い？」

「んゝ昨日はやり過ぎて腰が痛い、まあ大丈夫だ」

「……………無理するから」

「そう言ってもな？ 俺も男だから頑張らないといけないと思ったんだよ」

「……………満足した？」

「まあ……。そこそこ満足したかな？ 好きに出来たわけだし」

「……………ヤメテって言っても聞かないから大尉は」

「ああ、寝不足にさせちまったかな？ すまんすまん」

「ん……。別に嫌じゃなかった……………」

「くうううらああ！！ アンタ達何やってたんだああ！！」

そこに魅夜が現れた。 勿論鍵は掛けていたハズだ。

「・・・魅夜。セキュリティロック解除した？」

「そんなもの2秒お！ それより何？ やったの！？ ねえやったの！？」

何か興奮しながら私に詰め寄って来る魅夜。

「?? 何を言っているの？ 魅夜？」

「ん・・・昨晚の事か？ やったぞ？ 力いっぱい」

大尉がそれに答えると、魅夜は大袈裟に頭を抱えて仰け反って叫ぶ。

「ガーン！！ やったのね！？ 私でもまだなのに！ 芽衣・・・恐ろしい子」

?? 何を言っているのだろう魅夜は・・・。

「? やったのは大尉・・・」

「何言ってるの！ 二人とも共犯でしょう！？ 一人で出来るわけでも無いんだから！」

頭を狂ったようにブンブン振りながら拳を握って上下させる。  
「そんなの関係無い」とでも言いたいのだろうか？

「・・・腹筋は一人で出来ないか？ 芽衣」

「ううん。出来る」



魅夜の動きがピタリと止まる。

「・・・・・・・・・・は？ 腹筋？」

「ああ。体力作りしたくてな。寝る前にやったんだが、背筋やつてなかったからか腰が痛くて仕方ないんだ」

「あゝ・・・・・・・・・・ ああゝ・・・・・・・・・・ い、いやあゝ  
お、お邪魔しましたっ！」

ボタン！

「？ なんなんだアイツ？」

「・・・・・・・・・・知らない」

何か魅夜は顔を赤くして飛び出るようにして行ってしまったけど・  
・。 どうしたんだろう？

私と大尉は二人で首を傾げるが答えも出ずに困惑するだけだった。

-----

基地内食堂にて

「ゆーっねー」

「YOU TUNE? ツネさんって誰え? シャクシャク」

「あほー。 ゆ う う つ っ て言っ たのよー。 昨晚からずっと雨だから外で走り回ることも出来ないじゃないー・・・」

そう言いながらテーブルに突っ伏すようにダレているのはちゃーこだった。 その対面にセンが座ってリングを齧っていた。

「ふーん。 ちゃーこってワンちゃんみたいだねえー ワンワン」  
「

降って喜ぶのは確か雪じゃなかった? そんな突っ込みをするわけでもなく、ちゃーこは犬歯を立てて唸った。

「・・・・・・・・ガルルルル」

「キヤー たべられるー」

その時の台詞はセンのいつもの通りの馬鹿な台詞だったのだが、その後のちゃーこの言葉が後に災いの元となる。

「そんな幼児体型誰も食べないわよ」

ちゃーこは何気なしに言っ たつもりだった。 だが・・・

「むーそんな事無いもんー。 だったら大尉に食べて貰うー」

センが頬を膨らませてとんでも無い事を言い出した。

「!? セン!? 意味分かって言ってる!?!」

「勿論だよ。ちゃーこよりは絶対に大丈夫だもん」

「…………セン……。良く言った……。良く言ったぜ!  
! 勝負だセン! てめえっほえ面かくなよ!」

「受けて立つよおお!」

…………大尉。グッドラック。

センの意図は分からないが、ここにちゃーことせんの大尉争奪戦が始まるうとしていたのだった。

「…………馬鹿ばかり」

私はそれを半眼になって眺めて、淹れたてのミルクティーをノンビリと飲んで過ごす事にした。

彼は誰にでも優しすぎる節があるから、自分の蒔いた種というやつだ。

大尉は一度自分の軽率さを知るといい。

そう思いながら。

## 第10話「内部紛争勃発2」（前書き）

雨が降っていた。雨によって制限された室内で、せんとちゃーこは何か言い争っていたようだ・・・。

俺は、そんな事より身体がなまって仕方ない。  
誰か誘ってちよっと動かしてみるか・・・

## 第10話「内部紛争勃発2」

「・・・・・・・・・・」

「？ 何しているんだ魅夜？」

なんだか知らないが魅夜が気持ち悪い顔をしてこちらを向いていた。

「ううん。 なんでもなあい」

「ほう。 なら、こっち見んな」

「ぶ〜優しくない〜」

俺と魅夜は外が雨だったので基地内にある格技場に来ていた。

100平方メートル程の広さで簡単な組み手程度なら出来そうな広さだった。

もつとも、俺は格闘技なんてやった事は無いからあまり関係無いが・・・。

此処に来たのは魅夜に実際の型を見せて貰いながら特訓してもらおうかと思つての事だ。

俺の見た中ではちゃーこを別にすれば魅夜は相当の手慣れっぽかったからな。

だが、魅夜はそんな俺の辛勝な心構えに応える事も無く、談笑し

てくるから困る。

「構ってやってるだけマシだと思え色魔め」

また何か企んでるんじゃないだろうな？ ヤツの顔を見るとそう思えて仕方が無い。

「えゝ魅夜はシキマじゃないのだゝ」

どの口が言うんだ、どの口が。

「ほう？」

とりあえず時間も勿体無いので適当に両手を振ったりしてみる。

間接がポキポキ鳴った。・・・運動不足もいいとこだ。

「皆の方がもつと酷いのだよゝ大尉」

「皆？ そういえばTAM搭乗者以外ってこの基地にどれだけ居るんだ？」

ポキポキ

首の骨が景気良く鳴る。 ちょっと気持ちよかった。

隊長に、芽衣、魅夜、ちゃーこ、せん、香具羅、それと菊池女史に会っただけだったので、俺には分からなかったが、他にも何名かこの基地には居るらしかった。

「あゝそういえばまだ整備員達に会ってなかったんだっけえ？ あの子達普段はずっとメンテルームに籠ってるからなあゝ」

「整備員・・・それってこの前言ってた3人組つてのか？ 男達だっけ？」

魅夜に最初に会った時に整備員が男だと聞いたが実際には会った事は無かった。

それだけ出歩かないという事が・・・にしても、昨日食堂なんかでも会ってないって事は・・・よっぽど仕事に熱中しているのだろうか？

「うむ。そうは言っても皆色恋沙汰には興味の無い職人馬鹿だけだね。 甘い」

パシッ

棒立ちしていたと思っていた魅夜に軽くジャブをしてやると、簡単に受けられてしまった。

「ちつ。当たらないか。 まあ・・・魅夜がそういうんならまともな奴等って事だな」

俺はなんとなく、そのメンテルームと呼ばれる場所が俺にとってオアシスなんじゃないかと思えてきた。 別に男色趣味があるわけじゃなく、ただ「安全な場所」っぽかったからだ。

「むむゝ？ 大尉は私をなんだと思ってるのかなあゝ？」

「変態」

俺は拳を当てる事を諦めて、指を指しながらハッキリ言っ  
た。

「まあそこは「可愛い女の子」って言えば0.5秒で襲ってるの  
に」

その台詞さえも避ける魅夜。・・・やるな。

「それが悪いって言ってるんだろっ!？」

この女と漫才をするのもまだ3日目なのだが、最近妙に息が合っ  
てしまっている。

・・・人懐っこいと言えば聞こえはいいのだが・・・何故か  
部屋の中が少し暑い気がしたが、別に何か意識しているという事では  
ない。何か・・・部屋の外側から感じるものがあるのだけど・・・

まあ、そんな事より俺は話を戻すことにした。

「・・・で、皆もって、他に誰がお前以上に酷いんだって？」

魅夜以上に酷いなんて事は無いだろうが、一応聞いてみる事にし  
た。

「ん？ ほら、せんとか」

俺はその名前を聞いた瞬間に右手にハリセンを装備した。



「ちよつと！？　今のはボケじゃなくてホントよ？　ある意味一番危険なんだからせんちゃんは」

そういえば、これだけ反射神経がいいならこのハリセンだって避けれるだろうに？　・・・ツッコミは忠実に受ける芸人って事が・・・　つくづく阿呆だなコイツは・・・。

「・・・にわかには信じられんってんだよ。　なんかあのヘラヘラ笑ってる子だろ？　まだあんまり話してないが・・・」

「ホントなんだってばあ。　男が来るって言って一番最初に目を輝かしたのってせんちゃんなんだから」

魅夜は必死にそんな事を言う。　・・・どうにも信じられなかったが、その目は冗談を言っているような感じがしなかった。

・・・あの子が？

いや、それより・・・

「そついえば魅夜。　今「皆」って言ったな？　他にもか？」

「ん？　芽衣はわかんないけど他は皆そうだねえ」

「はい？」

「だから、隊長もちやーこも香具羅もだって事よ」

「！？　マジか！？」

「そだよ？ ああ、大尉は「花屑」ってどういう意味か知らないんだっけ？ 花屑の「花」は「女」で、屑・・・女の屑って意味なんだぞ」

「・・・本当なら皆魅夜みたいなもんって事か・・・」

恐ろしい。これからはずっと芽衣の所に逃げ込むべきなのかもしれない・・・いや、そうなるともしかしたら芽衣だって・・・。

「まあ、ウソだけど」

「何処までだオイツ！？」

俺は思った。魅夜とまともな話は出来ないのだと。そして、限りなく時間の無駄なのだと確信した。

俺の右手のハリセンが真っ赤に唸ったので、景気良く振り下ろす。

スパーン！！

うん。流石俺の自信作。良い音がする。

「ひいーとえーんど あははっ ごめんごめん 本当は・・・」  
「落ちこぼれ」って意味なのだよ。花だけど落ちこぼれてるの」

魅夜の声のトーンが段々と少し低くなったのを感じた。・・・  
魅夜？

「私はこんな性格だからいいけど、隊長や香具羅は辛かったんじゃないかなあ？ 隊長なんかね、二つ名でそのまま呼ばれてるのだよ。スクラップドフラワーって。まあ、これは違う意味もあるんだけど……。香具羅は気が強いというか、プライドが高い所があるんだけど、入隊した時なんてもう顔に生気が無かったの」

「……………」

そう語る魅夜の今の顔も……。生気が無いぞ？ さっきまでの元気は何処にいった？ ……何故俺にそれを言うんだ魅夜……。

「此処に配属されるというのはそういうレッテルを貼られるという事。だから……。皆笑う事が出来なかった……。最初は」

「……………余計に信じられない話だな。 魅夜」

「あ、あははそうだね。でも、大尉には知っていて貰いたいな。私達がどうして此処に居るのかって事を」

「……………俺は……………」

ただ新参者で、軍隊の事なんて何も知らなくて、ただ頭数に入れられただけの案山子みたいなもんだと思っていた。それが昨日の作戦によって持ち上げられているだけだと思ったのだが……。

花屑は……。彼女達は色々と事情があるようだった。それがどういった物なのかは分からないが、魅夜の表情を見ると、あまり良いものでもなさそうだ。

ふと、芽衣の顔を思い出す。 彼女の言葉が少ないのも……。も

しかしたら何かあったのかもしれないし・・・。

魅夜の言う事だから全部が全部信用出来るか分からないだろうし。

「皆が」うんぬんは他の者の株を自分と同等にして自分の評価を標準にしようとしているのかもしれないし、「花屑が」うんぬんはもっともらしい事を言って信じ込ませる為かもしれない。

しかし・・・、わざわざ自分達を「落ちこぼれ」などと言う必要があるだろうか？ 隊長の話等もそんな事を言って魅夜に何か得になるとは思えなかった。

そうなる・・・、何が本当で、何がウソなのか段々分かってきたような気がする。

「魅夜。 お前の言葉は分かりにくい」

「あはゝ冗談だから」

とても笑顔で魅夜は言う。 これもウソなのだろう。

本当は冗談などでは無く、花屑の隊員という事に何かあるのだろう。

俺はなんとなく魅夜の言動からそう判断した。

全くの外れでも無いと思う。 だって

「・・・お前意外に嘘が下手なんだな」

「・・・うん。 困ったなあゝ私も年なのかね」

彼女の瞳の端が・・・濡れていたから・・・。

そういえば一度全裸に剥かれたような気がするが、それは美談にするために無視しておく。

それに、そうまでなったのにも係わらず、実際に何かされた事は  
いままで無かったから・・・。

・・・・・・。

「大尉くくく」

「ん？」

そこにせんがやってきた。

「あゝ！ 大尉魅夜ちゃんを泣かしてるゝ いじめちゃだめだよお  
く」

「い、いや。 別にいじめるわけでは・・・」

なんとタイミングの悪い事だろう。 こんな場面を見られたら誰  
だって誤解してしまう。

「なんてウソだよ お 分かってるよおゝ魅夜ちゃんに甘えられて  
たんだよねえ 大尉は優しいから魅夜もせんも大好きなんだよっ  
く」

せんは臆面無く大きな声で言うので、俺と魅夜は辺りを一瞬見渡してしまった。

幸い他には誰も・・・、イナカッタ。ウン。イナイイナイ。青い短髪の少女なんて見えない。

「ちょっとせん！ てめえ抜け駆けしやが・・・したわね！」

ちゃーこは物陰から急に躍り出て、せんに向かって真空飛び膝蹴りを浴びせようとする。しかし、せんはそれを予期していたのか上体を少し後ろにそらして避ける。

「わあーちゃーこイキナリなにするんだよあービックリしたよー？」

「ウソつけえ！ 私が本気で蹴ろうとしたのに普通の奴が避けれる・・・わけないでしょ！」

ちゃーこは何故かチラチラとこちらを見ながら、せんを罵倒した。

口調が男言葉になったり女ことばになったり忙しいヤツだ。

「えーそんな事よりちゃーこが変な喋り方だから大尉が呆れてるよあー？」

「う、うるさいわねっ！」

「男みたいに騒ぐと嫌われると思っててるのあー？ ちゃーこは臆病だあ」

「！ー！」

「・・・！ 無駄だよぉ」

せんの言葉に顔を真っ赤にしてちゃーこは殴りかかる。しかし、寸での所でやはり避けられてしまう。せんの動きが早いわけではない。だが、ちゃーこの動きが遅いわけでもない。単純にせんに動きが読まれているちゃーこ。

「・・・せんって実は強いのか？」

なにやら目の前で私闘が始まってしまって、俺は若干その流れについていけずに魅夜に話しかけた。魅夜は、それを見ながらこめかみを押さえていた。そして、呟く。

「・・・まったく。せんの悪い癖なのだよ」

「どういう事だ？」

「せんは決して運動が得意じゃ無いのだけど、その・・・なんていうか勘が鋭いつていうのかなぁ。とにかく先を読んじやうわけ。それなのに相手を挑発なんてして・・・遊んでる」

「ほう？ それってやっぱり身体能力が高いつて事じゃなくてか？」

「うっん。普段はもうちょっとした段差で転ぶぐらいに鈍臭いのだ。だけど、こういう時のせんは最強かもしれないやね」

「戦闘時？」

「そだね。前の作戦の時だってせんの機体は無傷だったのだよ。」

前回だけじゃない。　せんはいつだってその機体に傷を負わずこ  
となんて無かったよ。　それだけ強運なのかと思つてたけど違つみ  
たいだねえ」

「ふうん？　だけど、それって・・・」

「うん。　ちゃーこは絶対に勝てない。　今のままならね」

魅夜の言う通り、ちゃーこは何度もせんに殴りかかるのだが、せ  
んはそれを危なげ無く次々に避けていく。

「無駄だつて言ってるんだよおちゃーこお。　雨で外行けないから  
つてせんで遊ばないでえ」

「うるさいうるさいうるさいうるさいっ！　今日という今日は絶対  
に貴様を倒すううううう！！」

怒れる狂戦士と化したちゃーこは腕を振り回すが、その分動きが  
雑になつてしまつてせんは避けなくても良いぐらいの大振りの攻撃  
を半眼になりながら避けていた。

「・・・本当に大尉には困つちゃうよ。　ちゃーこをこんな  
にするんだから」

ん？　せんは今何か言つたか？

「ちゃーこおゝいいこと教えてあげる」

「なんだあ！？　敵に塩を送るつもりか？　せん！」



「うつん〜。反撃だよ〜。ちゃーこ達はね、大尉に依存してるだけなんだよお」

「!?!?」

「ほら、足がお留守だよお」

さんの言葉に動きを明らかに止めてしまったちゃーこは、さんの足払いを簡単に受けて転倒してしまった。

「はい。さんの勝ちだよ〜」

「ちよつと! 何してるなの!?!」

丁度そこに菜乃隊長が現れた。後ろに芽衣や香具羅も見える。この騒ぎ(?)に皆集まってきたようだ。

「ちよつと組手やってただけだよお。菜乃隊長〜」

「.....」

「.....せん。貴女一体何をしたなの・・・」

転んだままで俯いてしまっているちゃーこを見咎めて、険しい顔をせんに向ける隊長。そんな目で見られてもせんは笑顔を絶やさずに答えた。

「別に大したことじゃないよ〜? ちゃーこも、魅夜も、香具羅も、隊長も、芽衣もみんなみいんな大尉をお父さんみたいに甘えてるって言ったただけだもん」

『!』

「おいおい。何言ってるんだ？ せん」

せんの言っている事が良く分からない。皆が俺を父親みたい  
に思っている？ 知り合って3日の俺を？

「大尉」。皆に言ってあげなよ。「なんでお前達は俺を名前で  
呼ばない？」って。全員が無意識にそう思っている証拠なんだよ  
お？ そのお陰で皆「軍人」じゃなくなっちゃったんだ おか  
しーよね」

そう言われて隊長や特に芽衣等は黙ってしまった。

まあ、どうだか知らないが、俺から言わしたら今まで一番その「  
軍人」ぽくなかった奴が言う台詞じゃないとは思うんだが・・・。

「そうね。少なからず節度ある者の態度では無かったかもしれないな  
の」

菜乃隊長は一番年長者としてか、一歩進み出て頭を垂れた。し  
かし、その声が・・・低い。

それがプライドによる物なのか、事実を言われた悔しさなのか分  
からなかったが・・・。

せんのイメージが俺の中でガラツと変わったのは確かだった。  
会って数日の俺でさえそうなのだから・・・。今まで一緒に居た  
皆はその比では無いのかもしれない。

「せん・・・貴女って人は・・・」

誰かが呟いた。　しかし、それを最後まで言わず、隊長が激を飛ばした。

「皆。　本日は自室で待機。　これは命令なの」

『・・・・・・・・』

「魅夜！　芽衣！　香具羅！　ちゃーこ！　大尉！　千代！　返事はどうしたなの！」

『は、はいっ！』

うやむやのまま俺達は自室謹慎を言い渡された。　不穏な空気が漂っていたので賢明な判断だと思う。

だが・・・

俺にはせんを中心にして皆がバラバラになってしまった気がした。

## 第11話「内部紛争勃発3」（前書き）

せんの発言によって気まずい雰囲気のまま自室謹慎を言い渡されてしまう。

醒禅 千代……。アイツはいつたい何を考えているんだ？ 同じ仲間を貶めるような事を言うなんて……。

## 第11話「内部紛争勃発3」

「いやああああ!! やめてっ! やめてえええええええ!!」

俺はそんな悲鳴で目が覚めた。 　いつの間に寝ていたのだろう・・。

昨日あれから自室に戻って、特にやる事も無くて寝てしまったのか・・・。

いや、そんな事より・・・。

此処は何処だ?

俺はベットに寝ていたのだが、両手両足が何かで固定されていた。見た事の無い天井。

顔を動かすと、隣に同じ様なベットと人影が二つ。

そして悲鳴。

「いやっ! いやっ!! いやあああああ!!」

声には聞き覚えがあつた。しかし、それがあまりに現実味の無かつたので頭がソレを理解するのを拒否しているのかもしれない。

・・・あれは・・・ちゃーこ??

そのちゃーここに組み付くように・・・見知らぬ男が上に乗っていた。

確か花屑には男はほとんど居ないと聞いたが・・・それに・・・見た事の無い服・・・軍服で・・・。

・・・敵か。

そうか、段々思い出してきた。

俺達は捕まったんだ。

「返してよ！ 皆を返してよ！ 隊長も香具羅もせんも！！ 人殺しっ！！」

ちゃーこは気丈にも拘束されながらも抵抗をしているようだ。しかし・・・隊長達が・・・死んだ？ なんの冗談だよちゃーこ・・・。

「人殺し？ 俺達は戦争をしているんだよ！ 甘えた事言ってんじやねえ！ お前達は負けたんだ！ 敗者はそれ相応な・・・」

「ひっ！ はぐう！」

「代償を受けるもんだ！」

何をされているのかこちらからは見えなかったが、多分酷い事を

されているんだろう。

・・・俺は・・・何を寝ているんだ。 何で助けない！

・・・なんでこんな事に・・・

-----

「くそおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

「ひゃうつ！？」

俺の声に魅夜が驚いたように飛び退いた。

ん？ 魅夜？

「魅夜！ 生きていたのか！」

「ふみよろ？ 何言ってるのだ？ あれあれえ？ もしかして私の夢でも見てたのかなあ？ いや～ん 深層心理で意識されるなんて・・・あいされてる」

「・・・俺の・・・部屋？」

4日目にしてやっと自室で眠る様にしたのだが、その天井さえ見慣れない俺にとって、寝惚けた頭にはその判断がすぐに出来ないで

いた。・・・ベットの隣に小さなテーブルがあつて、俺の私物が置いてある。私物と言っても支給されたような物で、俺用の軍服や、IDカード等が入った小物入れ。それと、TAMの操作マニュアル。・・・昨日はそれを読みながら寝たんだっただか・・・。

段々と思い出してきた。

さっきのはただの夢だったらしい。不吉な夢を見たもんだ・・・。

スパーン！

何やらさっきから手を広げて目を閉じている魅夜に私物の中からハリセンを見つけて顔面に叩きつけてやる。

「きゃう！？・・・ううゝ女の子をそんな凶器でパンパン殴らないでよぉ。どうせなら違うモノでパンパンして欲しいのにゝ」

「万年脳内ピンクかお前はっ！？」

確認するまでもなくそうなのだろうが、魅夜は珍しくそんな台詞に反応してくる。

「冗談で・・・言ってるわけじゃないもん」

「・・・・・・・・」

真面目に熱い視線を投げかけてきて魅夜が身体を摺り寄せてくる。  
・・・俺は魅夜をまだ誤解している？



彼女の行動は・・・そのまま本性だといつか・・・。

俺はそんな魅夜を愛しく思っわけでも無く、ただ冷静に見詰っていた。

「ジユン大尉は・・・私の事・・・嫌い？」

「そんな事は無いぞ」

即答する。別に嫌いじゃない。ただ、ついていけないだけだ。

「じゃあ・・・いいよね」

「いや、良くない」

何故か魅夜は服を脱ぎだそうとしていたので、それを制して嘆息する。

「あのなあ・・・。俺とお前はまだ会って5日目だぞ？ 何をお前をそうさせるんだ？」

「え・・・んゝ熱い情熱？」

「いや・・・真面目に応えて欲しいんだが・・・」

「えゝお気に召さない？大尉。うーん、いや、これは言つと恥ずかしいんだけど・・・」

顔を少し赤くして、上目遣いで言ってくる魅夜。

「おつ。なんだ？」

あまり見た事の無い表情に期待してしまうが……。

「身体がうずいちゃって」

「猿かお前はっ！？」

何度も確認してしまうが、コイツは馬鹿だ……。シリアスな  
んて言葉は彼女の辞書には掲載不備になっているのかもしれない。

それだけ彼女の本心を読み取る事は難しい。いや……。やはり  
本心なのか……。

冗談なのか、どうなのか正直良く分からなかった。

俺は生まれてこれまでに、誰かを好きになったという記憶は無い。  
だからというわけでは無いが、異性にどう接して良いのかという  
事を考えてしまうとどうも邪険になってしまう癖があった。

本当は、こうして慕われるのは嬉しいのだが、それに理由を付け  
ないと納得いかずに確認してしまう。本当にどう思われているか  
なんて……。わかるわけが無いのに……。

「ああ、忘れるとこだったわ。隊長が呼んでたよ？」

「ん？ 菜乃隊長が？ ……魅夜。それを言いに来ただけだっ  
たのに寝込みを襲ってたのか？ もしかして……」

「わ。正解ご名答」

「用件はすぐに伝えろおおっ！」

スパパーン！

「よろゝん！？」

今日も今日とてハリセンが唸る。

もうそろそろ強度を増しておいて方がいいかもしれない。 何度も使つとボロボロになってきてしまったぞ魅夜。

「あゝ、そうそう一人で来てなの。 らしいよ。 うふふ隊長だつて女なんだから大尉気を付けて」

「お前じゃあるまいし。 まあ、了解。 着替えるから出て行け淫魔。 ゴーアウェイ！」

手の平を返して前に払うような仕草をしてやる。 Get Out と言つたつもりだったが少し違った単語にしてしまった。 意味は一緒だが・・・。

「いや。 当方は構わないのだよ。 というか大尉の生着替えやつほうい」

狂喜に踊る魅夜にテーブルに置いておいたもう一つの武器を掴む。

「淫魔よ光になれええええ！」

ピコンッ！

新装備・PIKOPIKOハンマー Mk3で殴りつける。別に黄金に輝いていたりするわけではない。工作が得意になってきたな魅夜のおかげで・・・。

女性不信になったら魅夜のせいだ。絶対。

「はううう・・・大尉がDVいい・・・」

何やら魅夜が目を回しながら勝手な事を言っているが、必要悪だ。イチイチ突っ込んでいる俺の苦勞も知ってくれ。

俺は倒れている魅夜を部屋の外へ追い出し、ゆつくりと着替える。支給された軍服は新品特有の生地の手ざわりと、張りのある肌触りが気持ちよかった。

着てから改めて自分の姿を見ると、なんだかコスプレをしている気分だった。まあ、同時に支給された短銃なんかを見るとコスプレでは済まされない重みがあるが・・・。

「射撃か・・・。今度芽衣にでも指導してもらうかな」

銃の事なら芽衣に聞いた方がいいだろうという軽い気持ちだった。その時は、それを深く考えていなかったのだが・・・。後で考えるとそれは間違いだという事が分かる。

何故なら芽衣は特別射撃が上手いわけでは無いらしいのだ。射撃に関しては香具羅が一番上手らしい。

後から聞いた話なのだが。ただ、何かにつけて芽衣の事を考えてしまう自分には自覚していた。

昨日のせんの言葉では無いが、俺も芽衣に依存しているのかもしれない・・・。

俺はそんな事を考えながら、隊長が待つ司令室へと足を向けるのだった。

――――

「失礼します」

「大尉？ 入ってなの」

司令室がある部屋のドアをノックしてから俺は中に入った。

そこは俺が始めてきた時に通された場所だった。

この基地には司令室と、医務室と、食堂、機械室、それぞれの自室等があった。その建物の離れにTAM格納庫があり、その裏手にはちゃーこが飼育している家畜の納屋があったりする。

基地と言っても小さな訓練場があるだけで、規模としては小さい。

それも総勢11名という所からも納得が行くが・・・。 そんな

基地が最前線に置かれているという状況は納得したくは無かった。

それだけこの基地の本部……。本国が期待しているのか、はたまた逆に捨て駒とされているだけなのか……。

「起き抜けに呼び出してごめんなさいなの。大尉に話があったなの」

「いえ、昨日一日部屋に缶詰だったんで丁度良かったよ。それで用件は？」

それにしても、隊長は腰が低いな。上官なんだからもう少し強めの態度でも構わないだろうに……。それが彼女の美德なのかもしれないが……。

「そうなの。昨日の件。せんがあんな事を言ったのには理由があるの。それを大尉には知っておいて欲しいの」

「……俺はせん的事はまるで知らないんだがね。まあ、他の皆も知っているという事も無いけど、彼女とはそんなに話してないしな」

「うん。せんは内気な性格だから自分から他人に接触しようとしてないの。だから誤解されやすいの」

「ほう？ あの娘が内気ねえ……」

「本当なの。せんは……。自分を表に出すのが苦手なの」

俺よりよっぽど付き合いの長い隊長が言うのだからそうなのだろう

うが……。俺にはあの能天気な笑顔を浮かべる彼女がそんなに  
繊細に出来ているように見えなかった。まあ、それが表面的な表  
情だとしても……。彼女の言った事で皆が傷付いたのは事実だ。  
それはあまり褒められた事では無いハズだし、それを諫めたのは誰  
でもないこの隊長のハズだが……。

「確かに昨日私も頭に血が上ったなの。でも、彼女の発言は……  
言葉そのままの意味では無かったなの」

「……というത്？」

「あの後せんを呼び出して聞いたの。あんまり信じられない事だ  
ったから他の誰にもまだ言っていないなの。大尉。これから言う  
事は妄想では無い事だけ先に言っておくの」

「なんだよ……。脅かす気が？」

そう思つのも隊長の瞳が真剣そのものだったからだ。マジにな  
った時のこの人の目と声はやはり苦手だ。

こういう恐怖という心理には整った顔立ちだったりすると余計に  
怖く感じてしまうものだ。どうしてだろう？

菜乃隊長の瞳に吸い込まれそうになりながら、俺は立ちすくんで  
しまった。

「大尉……。せんはね……。未来が見えるなの」

「!？」

ドゴオオン！　ゴロゴロゴロ・・・

そう言った瞬間雷が鳴った。　外は・・・昨日に引き続き雨が・・・。

ザー・・・

そう意識した瞬間に雨音が妙に聞こえてるから不思議なもんだ。

・・・

隊長と俺。

二人しか居ない司令室に沈黙が流れた。

「・・・未来が・・・見える？」

俺は喉の奥からなんとか声を絞り出すと、ゴクンと唾を飲んだ。  
その音が妙に響いてしまった。　体の毛穴から汗が吹き出してくる。

「そう・・・信じられないかもしれないけど・・・。　　せんの能力は確かなの。　それは彼女自身が語ってくれたわ」

菜乃隊長はそれを夢物語のように空ろに語る。

その内容が・・・最悪の内容だったからだろう。



せんは言ったそうだ。

「このままでは全員が・・・死ぬ」と・・・。

俺は「死」という単語を反芻しながら今朝見た夢を思い出していた。

あれは・・・未来視だったのか!?

「せんは・・・」

「え・・・」

隊長が呟いたのを一瞬気付かずに聞き返す。少し混乱してしまっている。いや、少しじゃないな・・・。こんな突拍子の無い事を信じるという方が・・・。

「せんはね・・・。未来を変えようとしたらしいなの」

「未来を・・・変える・・・」

そう思っても、隊長の態度からそれが現実に起ころうとしている事の予言である事を物語っていた。俺の知らない彼女だけが知っている確証があるのだろう。

「せんは言ったわ。私達が軍人では無くなっていると・・・。それが悲劇を招く事を・・・」

「そんな・・・どうすればいいんだ!　せんはどうなるのか具体的に知っているのか!?!」

「・・・・・・・・分らない」

「分らないって！ そんな無責任な事あるかよっ！」

バン！

「ひっ！」

「あ・・・すまん」

つい熱くなって思い切り床を踏み付けてしまった。 衝撃に身を  
任せるなんて恥だな俺・・・。

「隊長に言っても仕方ないか・・・。 せんはどこだ？」

「・・・・・・・・自室なの」

「分かった。 直接話を聞こうと思う。 いいよな？」

「うん。 私も何が何やら分らないの・・・。 大尉・・・ごめ  
んなさい」

隊長という職位に就いているが、菜乃隊長もまだ年頃の女の子だ。  
耐えられなくなる事もあるだろう。 だからそれを責めるような  
事は俺はしないつもりだった。

だから・・・。

「大丈夫。 こういう時こそ隊長の腕の見せ所だろ？ 頑張ってい

こうぜ。 なっ？」

菜乃隊長の頭を撫でてやった。上官に、しかも年上にそんな事をして怒られるかもとは思ったが、そうしなければ今にも泣き出しそうな感じだったから……。

「大尉……。」

目を細めて攢ったそうに微笑む隊長。

笑うと……可愛いな流石に。

軍人って言っても元々はただの女の子だ。人よりちょっとTAMなんかの操縦なんかが得意なだけの。

いくらそんな世の中だからって、彼女が全部背負わなければいけないわけでも無いハズだ。

「じゃあ、俺ちょっと行って来る」

出来るだけ笑顔でそう言うと、隊長は何も言わずに頷いた。

俺はさんの自室へと向かった。

-----

「せん。俺だ。ちょっといいか？」

「大尉？ ちょっとまってね」

「CHIIYO' ROOM」と書かれた部屋の表札を見下ろしながらドアをノックする。

そういえばせんの本当の名字は「ちよ」だったな。ずっとせんって呼んでるので忘れがちだが……。

部屋の中からいまひとつ緊張感に欠ける声がして、暫くしてからドアが向こうから開かれた。

「どうぞ大尉いゝ　せんワールドへようこそおゝ」

「邪魔するぞ」

どうも同じようなノリにはなれずに普通に中へ入る。それにせんは少し不満な顔をしているが、知った事では無い。

騒動の張本人であるせんに警戒は怠らないようにしようと思う。

「どうしたのおゝ？　怖い顔だよおゝ。　あゝなんか腐った物でも食べちゃったんでしょおゝ？　大尉は食い意地が張ってるなあゝ」

「せん。　馬鹿の真似はやめろ」

これまでの事を考えると、せんのこの態度は全て演技だと思えた。この不自然に明るい仕草は作っているんだ。その下の「顔」を隠す為の隠れ蓑なんだ。

「うぐう……。　馬鹿じゃないもんゝ」

なおもせんはその「演技」を辞めようとはしなかった。

こうなったら化けの皮を剥いでやる。

「そうだな。　せんは馬鹿じゃない。　それは分かった。　だから話してくれないか？　お前の知っている未来の事を・・・」

「なんのことおゝ？」

指をくわえて小首をかしげるせん。　馬鹿にしているのか！

「せん！　俺の言っている事を聞け！　お前は未来が見えるんだろぅ！？　それで・・・皆が死ぬと言ったそうじゃないか！　それはどついう事だと聞いているんだ！」

俺は力の限り叫ぶ。　その台詞に全力を掛けていたので、その時のせんの表情がどうだったのか良く見ていなかった。　だから・・・せんの声だけを聞いて俺は顔を上げた。

・・・誰だコイツは・・・。

「・・・。　隊長が喋ったんだね」

・・・せん？

せんの瞳から光が消えてしまっていた。　それは猛禽類のような鋭い眼光を持ち、先程までの大きな瞳からすると全くの別人になっていた。　背筋が凍るような視線の彼女は自嘲するように笑うとその瞳で俺を捉えた。

「・・・未来を他人に話すとそれだけ運命は強固になるというのに・

。。 軽はずみな事をしてえええっ!!」

「!-!」

「。。。どういう事だつて顔だねえ。。。 もう知っちゃったんだから仕方ないから教えてあげるよ。 運命というのがあるんだよ。 それは誰にも変えられないような未来への道筋なんだよ。 だけどね、そんな運命を見る事が出来るという事は、その未来の結果を変える事だつて出来ない事も無いんだよ」

「そ。。。そうか」

なんとか相槌だけは打てた。 せんの気迫に言葉が出なくなってしまうっている。

「それがどうして強固になるかって!? 運命っていうのはねえ! 必然の積み重ねなんだよお! それが幾千と積み重なって運命を形作るんだよお? ただね、それを理解してない人にとっては。。。 運命はどういう物になるか分かるかなあ?」

「。。。偶然?」

「そう! 大尉は頭がいいよ! そうやって偶然が積み重なるんだよ。 だけどね。 偶然を偶然だと思わなくなってしまうたら。。。 それは必然になるんだよ! それが一人や二人ならまだいいんだよ。 だけど、3人、4人と増えていくと。。。それはもう偶然なんて呼べない。 必ず起こってしまう運命になってしまふんだよお!-!」

「。。。」

話が急変し過ぎて頭がついていけないが……。簡単に言えば  
せんは未来が見える。それが自分だけ見えているなら騙し騙しで  
運命を変えられると言っているのだ。だけど、俺や隊長が知って  
しまった事で……。運命が変えられなくなってしまったと怒ってい  
るのだ。

「あんまり理解してないみたいだけど、もう駄目だよ！ 皆……皆死んじゃうんだっ！ あははははははははは……」

「せん・・・」

せんは狂ったように笑い出す。

もう手遅れだと叫びながら……

俺は・・・、  
せんをやはり誤解していたようだ。

別に彼女は皆が嫌いだから暴言を吐いたわけじゃない……。

「あは．．．あははははははははは！」

せんは・・・皆が大好きだから・・・死なせなくなかったから・・・汚れ役になろうとしていたのだ。それが運命を変える手段だったハズだったのだ。

それなのに、俺達に話してしまったせいで……せんはただのピエロに成り下がってしまった。

「あはは……はは……は……う……う……う……  
やだよお……死にたくないよお……。死なせたく

ないんだよお・・・」

せんの笑い声は次第に嗚咽へと変わっていった。

俺はそれを慰める事も、声を掛けることも出来ずに、ただ呆然とするしかなかった。

――

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「なあ、せん」

「・・・・・・・・なあに大尉い」

「本当に・・・未来は変わらないのか？ お前に本当に未来を見る力があるのか？」

「大尉。今まで未来が変わった事は一度も無かったんだよ・・・。戦闘の時だって・・・せんが無事なのも全部見えていたからだもん・・・」

「そうか・・・。昨日のちゃーこの時もそうだったんだな？」

「うん・・・。大尉。事実を確認しても結果は変わらないんだよ」



「そうか・・・」

その後、せんにどうやって全滅したりするのかを詳しく聞いてみた。すると、明後日中に戦闘があり、その戦闘で俺達は全滅捕獲され・・・殺されてしまうらしい。

俺が今朝見た夢にとっても似ている事をせんに話すと「それはせんが見た未来視を大尉が読み取ったのかもしれない」と言う。

「全滅しか・・・未来が無いのか・・・」

「うん・・・運命は変わらないんだよ。　どう考えても・・・同じ結末にしかないんだよ」

運命は変わらない・・・。　本当にそうなのだろうか・・・。  
俺はそれを信じたくなかった。　当たり前だ。　誰だって死にたくは無い。　何か・・・何か手は無いのか・・・。

「・・・ちゃーこの時ってその運命を思い出しながら・・・避けていたのか？」

「もちろんだよ。　大尉・・・もういいよ・・・」

せんは記憶力が良いみたいだな。　俺だったらそんなものを見て体がついていけないし、忘れてしまうだろう。　頭の回転が速いんだろくなきつと。

しかし・・・。

どうしても、全員死んでしまう未来しか無いのなら・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ん？　　さてよ……。　　そうか！

ああ、なるほど。

全滅するしか無いのか！

「・・・・・・・・なら、いつその事全滅するか」

「・・・・・・・・自暴自棄だよ大尉・・・」

「いや、せん。　　分かったよ。　　運命ってやつが」

「大・・・尉？」

せんがキョトンとして俺を見てくる。　　当然だ。　　さっきまで同じように死んだような顔をしていた奴が全開の笑顔で笑っているんだから。

「ついでだ。　　お前の呪いも解いてやる。　　俺に任せろ。　　せん」

「・・・？　　大尉？？　　おかしくなっちゃったあ？」

「大丈夫だ。　　そうと決まれば準備だな。　　せんの予言の当日は明後日だったな？　　それまでには終わらせる」

「・・・・・・・・・・？」

？マークを浮かべ続けるせん。

俺は一つとある作戦を思いついた。

それが本当に効果があるのかは分からない。 効果が無ければ全員死ぬだけだから、駄目で元々だ。

俺は作戦を決行するために香具羅の部屋に行くことにした。

## 第12話「内部紛争勃発4」（前書き）

せんによる「予言」によって花屑が全滅するという未来を告白された俺。皆死ぬなんて・・・絶対に嫌だ！　まてよ？　もしかしてなんとかなるかもしれない・・・。俺は「作戦」を決行する為に情報を集めることにした。

## 第12話「内部紛争勃発4」

天宮院 香具羅。

花屑メンバーの一人。

醍禅 千代<sup>せん</sup>同様にあまり話していないのが、だからこそ知っておかないといけない事があった。

直接話をする為に俺は「KAGURA' ROOM」と書かれたプレートを眺めながら、その扉をノックしてみる。

コンコン。

.....

数秒待ったが反応が無い。

留守か？

「あら？ 大尉？ 何をなさっているの？」

「おっ？ ああ、やっぱり居なかったのか いい！？」

「？ どうなさったの？」

「い・・・いや、別に・・・」

「変な大尉さん。 私に用があったのよね？ 何？」

「あ……えーと……」

「イラッ！ 男だったら目を見て話さないよ！ 何処みてらっしやるの!？」

勘弁してくれ……。

香具羅だったのだが、どうも彼女は浴場へ行っていたらしく、思いつき風呂上りだった。だからとても薄着で、目のやり場に困ってしまっただけだ。芽衣や魅夜なんかに比べて女らしい身体つきをしているのでどう見てもいやらしい。

タンクトップにショートパンツ姿の香具羅は俺の視線が泳いでる事に腹が立ったように仁王立ちしている。そんな事すると余計に……。

「あ、あのなあ香具羅。俺も男だし……ちょっと気を使って欲しいんだが……」

「はあ？ 何を言っているの？ ……大尉。貴方まさか……」

やっと香具羅は気付いてくれたようで自分を抱くように腕を組んで後ずさる。

「いや、断じていやらしい気持ちだったわけじゃないぞ！ 信じてくれ!」

「……私とした事が……。もう……大尉はエッチね!」

「理不尽だ・・・」

誤解満載で香具羅は頬を赤く染めていた。男として当然の反応なんだから仕方ないじゃないか。俺が悪いんじゃない。悪いのは生理現象だ。・・・激しく自己嫌悪にかられてしまいそうだ・・・。

「・・・まあ、いいわ。ここで立つても仕方ないし、中に入る？　少し散らかってるけど・・・」

「あ、お、おお。そうだな。お邪魔するよ」

俺の頭の中の辞書が誤変換を繰り返していた。魅夜じゃあるまいし・・・。部屋の中に入るだけだって。何考えてるんだ俺は・・・。

何を考えたのかは言つつもりは無い。

香具羅の部屋は芽衣等に比べると大分変わっていた。なにやら少し目が痛い。

ベットやテーブルは標準で設置されているみたいだが、私物の量が絶対的に違った。

洋服等を入れるクローゼットなんかもあり、テーブルの上にはクマのぬいぐるみ。

・・・女の子の部屋だった。

「何よ大尉。クマが気になる？」

「あ、いや……。可愛いクマだなと思ってな」

テディーベアのようなクマのぬいぐるみはそれ一体だけだったが、とても大事にされているようで赤いリボンまでつけてテーブルに鎮座していた。少し少女趣味かとは思ったが、こんなぬいぐるみぐらいは普通にあるものなのだろう。香具羅の事はあまり知らないが、それが彼女の性格を物語っているわけでは無いのだろうし……。

「わ……。私がヌイグルミを持っていたら悪いっ？」

「いや、いいと思う。誰かからの贈り物か何かなんだろ？ 香具羅の趣味じゃないんじゃないのか？」

「……。そ、そうよね。私の趣味なんかじゃないわよね？ 大尉の言う通りに貰い物。昔父に貰った物なのよ」

ポンポンとヌイグルミの頭を叩きながら香具羅は分かり易い反応を見せた。いや、俺には分かったというべきか……。最初はどもっていたが、後は自然な感じに喋っていたので最初はウソ、後は本当なのだろう。

それは分かったのだが、俺は彼女を辱める為に来たわけじゃない。ここは知らないフリをするのが得策だろう。

「そうかそうか。別に香具羅がどんな趣味があっても軽蔑はしないつもりだったけどな。まあ、そんな事より、聞きたい事がある



んだが・・・」

「そう・・・なの？ あ、うん。 何、聞きたい事って？」

軽蔑しないという言葉に反応していたのを気付かないフリをしながら、俺は香具羅の視線を指先に集中させるように目の前で左右に振った。 それを「？」というマークを頭に浮かべながら目で追う香具羅。

「じゃあまずはスリーサイズから」

ドゲシッ！！

「殴るわよ大尉っ！」

「蹴ってから言わないでくらはい・・・」

ちよつとしたお茶目に容赦無く顔面に蹴りをくれる香具羅。 蹴りが早すぎて仰け反ることも出来なかった。 ・・・こんなのを避けていたのか魅夜は・・・。

「ああ！ 大丈夫う？ 大尉・・・」

自分で蹴り飛ばしておきながら心配そうに覗き込んでくる香具羅。

「魅夜みたいな事言うからつい身体が動いてしまったわよ・・・。

ああ・・・可哀相・・・」

「むぎいつ！？ ムググ・・・」

涙目になって俺の頭を抱きしてくる香具羅。俺は香具羅の胸圧（？）で圧迫されてちと苦しい。

「~~~~！　ぷはあっ！」

少し幸せな状況だが、息が出来ないのは辛いので渋々俺は香具羅を突き放した。

「ま・・・まあ、ボケはこれぐらいにして、香具羅にTAMについてちよつと聞きたい事があるんだ」

魅夜のせいでシリアスにならないといけない場面でもふざけてしまふ癖がついてしまったのかもしれない。・・・元々じゃないんだからな？　別にスタイルがどうかそんなのは関係ないつもりだしな。・・・本当だぞ？

それより、そろそろ真面目に聞かないとな。

「・・・あら？　私に聞くより整備員に聞いた方がいいのでは？」

「いや、基本的な構造だとかそういうのを聞きたいんじゃない、それぞれの機体の特徴とか、香具羅の特技なんかを聞きたいんだ」

「ああ、そう？　TAM-01から順番に・・・。決戦用、近距離用、中距離用、調整用、長距離用、決戦機補助用、凡庸となってるわ。大尉の機体はヒメユリ・・・隊長機の補助役ね。私の機体TAM-05キキウは長距離用なんで射撃等が得意な機体ですわ」

「ん？？　芽衣の機体が長距離じゃないのか？」

「性質と装備はそうね。でも、芽衣がカスタマイズしたというだけで、実際は他の機体のスぺアのような役割の機体なのよ」

「ほう……。それは使えるな」

「え？」

「いや、こつちの話。なるほど。ちなみに、香具羅は他の機体に乗った事はあるのか？」

「?? 大尉？ 何を聞きたいのか分からないわ？ ええ、乗った事はあるけど……」

質問の趣旨が分からずに香具羅は困った顔をしていた。勿論分からないように注意して質問しているのだから分かってもらっても困る。

せんの言っていた「3・4人と偶然を知る者が増えると運命は強固になる」という言葉からの行動だが、こんな事で回避できるかは疑問だった。

ただ、これだけは先に言っておこう。

俺は死ぬつもりは無い。もちろん、他の誰も殺させやしない。俺の考え……。というか勘だが、それが間違っていないければ……。なんとかなるかもしれない。

いや、なんとしてもそうさせる。その為には皆の協力が必要だ。ただ、事情が話せないというのが面倒だが、離せないなら話せない。

いなりにどうにかするしかない。

今回の作戦は、芽衣、香具羅、魅夜、ちゃーこの四人に掛かっている。

「良し。とりあえずそれだけ分かれば問題無い。後はアドリブでなんとかなるだろ」

「?? 大尉？」

「ああ、ついでに香具羅の階級って聞いてないけど何なんだ？」

「そ、そんなのどうでもいいでしょ！」

お？ なんだ？ 階級は聞いちゃいけなかったのか？

「いや、別に言いたくないならいいんだけどな。ちょっと聞いてなかったと思ったただけだから」

「.....」

「うん。階級なんて気にするのは男の悪い癖だな。それがどうだろうと香具羅は香具羅だからな」

肩書きがどうだからと言って、人の能力が格段に違ってくる事などあるわけがない。そんな物を気にするのは自分に自信が無い奴のする事だ。階級という言葉聞いた瞬間の香具羅の顔は悪戯をして見つかってしまった子供のような顔だったから、余計そう思えてしまった。

俺だって大尉なんて地位を与えられているが、ほんの数日前まではただの学生だったのだから、人の事は言えない。

ただ、そういう肩書きによって態度が変わってしまったのは本当で、新参者の俺がこうして警戒も無く部屋の中に入れるのはその肩書きによるものだし、それが無ければ俺もこうやって偉そうに話してはいないはずだ。

特に上下関係に厳しい軍隊等だと尚更の話だった。

今更だが、そんな傲慢な考えを反省するように俺は言っと、香具羅は、魅夜のような目で俺を見ていた。

ん？・・・魅夜のような？？

「さ・・・流石大尉！ 私が惚れ込んだだけの事がある男性です！」

「はい？」

「あ・・・えと・・・いや、違っつてば、だから、あの・・・」

・・・なんなんだ一体。

魅夜、ちゃーここに続いて香具羅までも！？ 俺が何かしたのか！？

「さ、最初は男なんて皆一緒だと思ったのよ？ だけど、大尉は優しくて聡明でいらっしやるから・・・。 いや、何言ってるのよ私！！ たたたた大尉！？ 変な意味じゃなくて尊敬してるって意味なんだから勘違いしないでよねっ！？」

・・・そこまで慌てんでもいいだろうに・・・。

なるほど。尊敬か……。それにしたってそんなに大した事はしてないつもりだし、香具羅との接点はこれまでほとんど無かったハズなのだが……。もしかして、たまに感じる視線は香具羅だったのか？

分からないが、今までの行動を見られていたという事だろう。暴走しなくて良かったぜ。まあ、別に暴走しようと思わないが。

「分かった分かった。そういう事にしといてやる」

「な……。何よその言い方！ むかつくぅー！！」

「いや、可愛いらしいって言ってるんだよ」

どうもツンデレかツンギレか分からないが、あまり素直になれない性格のようだ。そう思うとなんだか親近感が湧いてきてしまう。俺もどちらかと言えばあまり素直な方じゃないから……。

「……ば、馬鹿あ！ しょうもない事言っていないで用件はそれだけ！？ じゃあさっさと出て行つてよ！」

「ふごおうっ！」

香具羅は上段回し蹴りを俺の胸に叩き込んで下さった。その威力に俺はそのまま出口まで吹っ飛ぶ。なんて脚力だおい……。

扉まで飛び、その反動で扉が開いた。俺はすぐに立ち上がる事も出来ないダメージを受けて床に倒れこんでしまった。それを覗き込む人影が一つ。

「・・・・・・・・馬鹿」

瀕死の俺にトドメの一言を吐いて、その者はその場を立ち去ってしまった。

髪を左右に縛って何処か生気の無い無愛想な顔。 あれは芽衣だった。

「・・・・・・・・アイツ何してたんだ？」

タイミング的に偶然にしてもこんな場所に芽衣が居た事に訝る。昨日謹慎を言い渡されているので皆自室から出歩かないようにしているハズだったのに・・・・。 謹慎自体は昨日だけだったが、あまり積極的に動き回るのは理由が無ければしないような気がした。

だって、芽衣は手に何も持っていなかったし、風呂上りだというわけでも無い。 ちなみに芽衣の自室は歩いていった方角とは反対方向だった。

芽衣は何処に行こうというんだ？

「香具羅、すまん。 また来る」

それだけを言い残して俺は芽衣が歩いていった方へ後を追う事にした。

芽衣が歩いていった先は、離れにある格納庫だった。

――

TAM格納庫。

TAMと呼ばれる人型のロボットがある所だった。

体長8m程の機体が置かれているので、冗談な程に屋根が高い。  
初日と出撃の時に来たが、あまりゆっくり見て無かったたのでそこにある7機のTAMが並んでいる姿は改めて見ると圧巻だった。

薄いピンク色の機体のTAM - 01ヒメユリ（甘美）

赤い機体のTAM - 02ボダイジュ（熱愛）

紫の機体のTAM - 03モクレン（自然の愛）

黄色い機体のTAM - 04キザクラ（気品ある行いは素敵）

緑の機体のTAM - 05キキョウ（変わらぬ愛）

黒の機体のTAM - 06オニユリ（莊嚴）

白い機体のTAM - 07ヒナギク（無実・優しさ）

それぞれの機体の前に花言葉が書いてあった。

04は確かじゃなかったか？ 一人だけ良く分からない花言葉だな。  
。。。



それに確かキザクラって・・・ギョウコウって名前じゃなかったか？ 語呂だけで付けたんだろうなきつと・・・。

そんな事より芽衣は・・・。

「・・・・・・・・」

いた。

芽衣はヒナギクの機体の丁度肩の辺りに登って何かしているようだった。

「おゝい芽衣〜！」

「・・・・・・・・」

俺の声に気付いて手を振っている。 5m程も離れていないのでそんなに大きな声を出さなくてもいいだろうが、一応だ。

「そこで何してるんだあ〜？」

「・・・・・・・・」

ヒュン！

芽衣が何か手招きしたような動きを見せた。

登って来いというのだろうか？ ・・・いや。

「？　いつ！？」

ガシャーン！　カランカランカラ・・・

何だ！？　何か落ちてきたぞ？　・・・スパナ？

「・・・・・・残念」

「殺す気かぁー！ー！ー！？」

どうやら芽衣が持っていたスパナを投げつけてきたらしい。落ちて  
いるソレを拾って見ると、中々重量があって、こんな物が頭部  
にでも直撃したら無事では済まない。

・・・しかも今小声で「残念」だと言ってなかったか！？

「なんだよ？　何か怒ってるのか芽衣？」

遠くに居てはラチがあかないので俺もヒナギクの肩へ登ろうと梯子  
が何かを探す。すると、芽衣が使ったのであろう梯子がヒナギ  
クに立てかけてあった。

その梯子を掴んだ瞬間、梯子がこちらにむかって倒れてきた。

「おわっ！？」

ガッラアアーン！！

すぐに上を見ると、芽衣が手を前に突き出した格好で俺を見下ろ  
していた。

「・・・・・・・・近づかないで」

「芽衣・・・・・・・・」

とても冷たく言い放たれる拒絶の言葉。　いままでも若干そういう事を言われた事があるが、今日の芽衣はいつもより敵意が明確に表れていた。

・・・・本当にどうしたんだってんだよ・・・・。　俺は芽衣に何かしたか？　確か昨日はそんなに話してないが、だから拗ねているとか？　いや、違うな。　そんな事を怒るような奴じゃないだろう多分・・・・。

知らない間に・・・・芽衣に嫌われるような行動をしていた？

香具羅とは逆か・・・・。

考えても答えは出ない。

仕方無いのでここから話すことにした。　梯子を落としたという事は芽衣は逃げられない。　此処は勝手に喋らせて貰おう。

「芽衣！　いがみ合ってる場合じゃないんだ！　お前の力が必要なんだ。話を聞いてくれないか？」

「・・・・・・・・今は話したくありません」

「いや、そんな事言ってる場合じゃないんだよ！　皆が死ぬかもしれないんだぞ！　いいから聞け！」

普通に話していたらこのまま日が暮れてしまう。　意地悪な気が

したが、皆の命を盾に話をさせて貰うのが手っ取り早いと踏んだ。

「・・・・・・・・大尉。それは本当？」

「こんな最低なウソについてどうするってんだよ！　俺は大真面目だ！」

「・・・・・・・・分かった。　今降りる」

「え・・・・・・・・？　わあ、芽衣！？」

タツ！

芽衣はそう言つと、ヒナギクの肩から飛び降りてきた。5m以上の高さからだ。3階ぐらいの高さからそんな事をすれば硬いコンクリートに赤い血の花を咲かせてしまう事になってしまう。

俺は着地地点へ駆けて芽衣を受け止める為に手を広げて待った。

「うわっ！？」

「！？」

それをどうにか受け止める事が出来たが、その反動で倒れこんでしまう。

「あたたた・・・芽衣。　怪我は無いか？」

「・・・・・・・・大尉・・・・・・・・必要なかった・・・・・・・・んう・・・・・・・・」

「何？」

「これぐらいの高さは無問題・・・むしろ大尉邪魔・・・は  
ふっ・・・」

「モーマンタイって・・・。一応俺は心配してだな・・・」

「うう・・・大尉ワザとやってる?」

「何がだ?」

「・・・触ってる」

「? ってうわあっ!?!」

倒れこんだ拍子に芽衣の胸を鷲掴みにしていたらしい手の平を、  
言われて初めて気が付いたなんて言い訳は通用するだろうか?  
とんでもなく不幸な事故だという事を声を大にして言いたい。  
起き上がるうとしていて手を突いた所が芽衣の胸だっただけの話  
だ。

「・・・やっぱり女の敵」

「やっぱりって何だ!?!」

怒りか照れからか分からないが、顔を赤くして涙目になって恨み  
がましく言ってくる芽衣。

確かに手がとても幸せな感じだったが、断じて故意じゃないので  
すよ芽衣さん?

「魅夜もちゃーこも香具羅も・・・大尉は節操を知った方がいい」

「え．．．いや、なんの事だよ」

「．．．．．無自覚．．．。天然ジゴロ．．．」

どうやら芽衣は俺が魅夜達に色目を使っていると言いたいらしい。  
全くもって誤解だ。

そんな器用な事が俺は出来ないぞ？

「スマン。静かに俺を評価するのはやめて欲しいんだが．．．。  
魅夜とかは勝手に言ってるだけだろ？俺は何もしてないんだか  
ら」

「．．．．．それを絶対に魅夜達に言ったら駄目。大尉・  
．．最低」

最低。

芽衣に失望したように見られて俺は言葉の意味に気が付いた。

どんな理由にせよ、好意をもってくれている相手に「勝手に」は  
無いだろう．．．。少し増長していたか．．．。

「．．．なるほど。失言だった．．．」

俺は素直に頭を下げる。それで失言が消えるわけでは無いだろ  
うが、自覚した事は分かって欲しかった。

「うん。大尉の美德はその柔軟性だと思う」

そう言つと芽衣は頷いてくれた。 柔軟性が・・・。

成り行きで軍隊に編成され、成り行きで実戦を経験し、成り行きで死に向かう運命に抗おうとしている。 芽衣の言う「柔軟性」が無ければ何処で錯乱していてもおかしくなかっただろう。

だが、俺はそうはならなかった。 何故なら俺にとってこの世界はどこまで行つても夢のような感覚で、現実味が今一つ沸いてない。 夢では無いのは色々と明白なのだが、心の何処かで元の世界に戻れる事を諦め切れていないのだろう。 初日に菊池女史には「戻れない」とは言われたが、それを信じる・・・勇気が無いんだと思う。

「・・・・・・・・でも、魅夜達があつたのは大尉の責任。 だから責任を取つて誰かと付き合つて欲しい」

「いい!？」

突然何を言い出すんだこの娘は!？

「・・・・・・・・大尉は魅夜達が嫌い？」

「いや、嫌いじゃないが・・・。 それはちよつと・・・。」

芽衣の言う責任というのはなんとなく分かるが、それは違つたろ。

生まれてこの方、女性と付き合つた事等一度も無い俺にはそんなに軽はずみな事はしたくない。

「大尉。 無責任」

だが、そんな事を言つとドンドン芽衣の中で俺は最低な男になつていくらしい。

仕方ない……。こうなつたら……

「あゝそんな事言われても、俺には好きな女メイトが居るしなあ……」

「!!……………ホント？」

ホントなわけが無い。口からでまかせだった。今は誰かを好きになるなんて想像も出来ない。

「ああ、もし今回の作戦が終わつたらそつちに告白してもいいぞ」

だからこんな事だつて逆に言えちゃうわけだ。

「……………誰？」

「教えるかつて。作戦が終わるまでな」

誰でも無いなんて言つたら俺の体面は底辺まで落ちるんだろうな……。

だが、後になって気が付いたが、この言い回しも余計に自分の首を絞めている事にその時は気づかなかつた。

「……………そう。ところで作戦つて何？」

「ああ、やっと本筋に入れた……。あのな、実は……」



俺は芽衣に事の事情を話す事にした。

香具羅と違つて芽衣に話したのは相談役が欲しかったからだ。

俺の考えが間違つていないか。それと技術的に可能なのが知リ  
たかつたからだ。

俺の立てた作戦はある種無謀な作戦だつたから、少しでも成功率  
を上げたかつたというのもある。それに、芽衣には話しておきた  
かつた。隊の中で一番信頼しても良いと思つているからだ。

芽衣の考え方は俺に似ている所があると感じていた。俺の考え  
は彼女には否定されない。そんな理由も無いのに安心してしまふ  
ような感じが不思議としてしまふ。

抛り所だな。一種の。

-----

「・・・・・・・・どうだ？」

「・・・・・・・・大尉。それは危険過ぎると思つし根拠が無い。  
だけど・・・・・・・・やってみる価値はあるんだと思う」

思つた通りというか、芽衣は俺の考えに賛成してくれた。後は・  
・実行する為の準備が必要だ。

俺と芽衣は「生き残るための作戦」を実行するため、花屑の基地  
内に駆け回るのがつた。

俺達の・・・花屑の運命の日は明後日だった。

### 第13話「内部紛争勃発5」（前書き）

全滅予定日まで後2日。それまでの準備は少しずつ整ってきた。

後は、最終調整だけだ。

運命なんて俺が塗り替えてやる！

### 第13話「内部紛争勃発5」

深層心理とか良く言うヤツがいるが、それを自分で説明出来るよ  
うなのは実際は違う気がする。無意識でやってしまう事と意識的  
にやってしまう事は実は同じ事だ。何故ならどちらも自分が行動し  
てやった事には変わりが無いからだ。

だから「無意識」を言い訳にするヤツは気を付けた方がいい。  
もしそれが、身体が勝手に動いてしまったレベルでも、結果は同じ  
なのだから、四の五言わずに謝るか挽回するべきなんだ。

まあ、それが単なる事故で済まされるような事なら笑って許せる  
んだがな…

一つ一つ装備を確認しながらTAM-01<sup>タム</sup>を起動させる。

流石は隊長機というか、コックピット内部が他の機体には無いボ  
タンやらレバーが幾つかあった。操縦桿等は変わらないが、その操  
縦桿の前部に『やつちゃえすいち1』と白い文字で書かれた赤い  
ボタンがあった。

「……手書きかよ！」とか突っ込んだら負けなんだろうな。

今更だが、俺は菜乃隊長の姫百合に乗り込んでいた。もちろん  
隊長の残り香を嗅ぐ為だとかでは無い。

まあ、最終チェックみたいなもんだな。  
他の機体が問題無く動かせばいい。

隊長曰く、機体それぞれに搭乗者の癖が付いてしまっている事もあるらしいが、姫百合は素直に指示を聞く。オペレーションシステムは変だったけど…。

「ヒメユリ。残り稼動時間は？」

「ハイ、大尉イ。ラストっ1500秒、ナノ」

これである。オペレーションシステムの音声が菜乃隊長の音声を使っているようだ。少し音の繋ぎが悪くて違和感があるが、気にしないでいると隊長と一緒に乗っているかのように落ち着かない。「音声編集ソフトの応用か…。簡単に出来るっぽいな」

ある一定の音域を登録するだけで後は自動で設定されるらしい。だから、今流れてる音声は菜乃隊長が俺用に登録したのだろう。遊び心が過ぎるんじゃないのか隊長？

なんだか隊長の声は落ち着いているというか、緊張感が無い。それだけで隊長として、上官としてはマイナスなんじゃないかと思う。話を聞くと皆命令無視が多いらしいので間違いでも無いだろう。

偉そうに言うつもりは無いのだが、それが文字通り命取りになってしまうかもしれないのならば仕方無い。調整させて貰おうと思う。

上官やら、立場なんてのは知ったこっちゃない。それより生きる事の方が大事なのだから、その後に処罰があるっていうならいくらでも受けてやる。

俺はせんの行動や言動を観察して、自分なりの仮説を立ててみた。

それは、彼女の能力が「真実」では無いという事と仮定した仮説だ。

普通に考えれば「予言」なんてものはこの世に存在するわけが無い。

だから、せんが考えた事が実際に起こるという事は・・・、それだけ彼女の頭脳が優れているというだけの話だった。彼女自身それを理解していない。それだけ頭の回転速度が速いのにも関わらず、それを自覚できないでいるというわけだ。

そして、そんな事柄を事細かく覚えていくという記憶力。それだけ見ても常人とは言い難い。

ただ、そんな彼女の予想を上回るような事が起こらない程、正確な予言（予想）であるので、誰も疑問に思わないという事みたいだが・・・。それを出し抜くのは簡単だった。

彼女の予想不可能な事をすれば良い。

俺はまず、TAMのパイロットの特徴に目をつけた。

芽衣は長距離射撃が得意なのに、彼女の機体はその専用の機体では無いという事。

香具羅の機体は長距離射撃用ではあるが、彼女の性格上、それよりは接近戦の方が良いという事。

ちゃーこは性格と機体の相性は良さそうだが、どうも突貫する癖があるようなので、少し後ろに下がっていた方がいいだろうと思う。

せんは、そのままでもいい。むしろ、そのまま無いと出し抜けない。

魅夜は・・・、ある意味オールマイティな感じがするのでどこにでも配置できるだろう。

一番重要なのは隊長と俺だ。隊長機に俺が乗る事により、戦況を操作させてもらおうかと思ったのだが、何分実戦はまだ1度きりで、今日動かしてみてもどうなるかという問題がある。

ついでに、それを隊長が承認するかという事もあるので、とりあえず今日中になんとかしたいと思う。

ピンピンピンピン！

【緊急指令緊急指令！ 本基地に未確認の機体が10機接近中！ 敵国の物の可能性が高い！ 各TAM搭乗者は出撃してください。繰り返す】

「な・・・！？ 襲撃の予定は明日じゃなかったのか！？」

警報が鳴り響くのを聞きながら、内心少し喜んでしまっている俺が居た。その時点でせんの予想は裏切られてしまったのだ。こちらが何もなくても、運命は変わったらしい。

・・・後はこれを殲滅すれば・・・！

暫くすると格納庫にみんながやってきてTAMに乗り込む。

それを確認してから俺は隊長機に乗ったままスピーカーを使って号令した。

「皆！ 敵は正体不明なの！ 気をつけて行くなの！」

『了解！』

・・・先程の音声編集ソフトの応用で、俺の声を菜乃隊長の声に変えてみた。乗る機体が無くて俺のTAM-06に乗ったハズの菜乃隊長が吹き出してなければいいが・・・。

ちなみに、次に出撃がある場合は各自乗る機体を変えて欲しいと言っている。

だから多分

TAM-02には香具羅が、TAM-03にはチャーコが、TAM-04はそのままですが、TAM-05には芽衣が、TAM-06には隊長が、TAM-07には魅夜が乗っているハズだ。

それと、各自には通信をする場合はバレないようにして欲しいとは言っている。・・・そこは演技力だが、別に期待していない。出撃してしまえば後はそれで良いと思っているからだ。

「芽衣、大丈夫なの？」



隊長の音声で”07ヒナギク”の機体に乗る魅夜に話しかける。

「・・・問題無い」

その返答が「問題有り」だが、良い演技だ。これでこれを聞いた他の者は07ヒナギクには芽衣が乗っていると思うだろう。

「あつれえ？ ヒナギクはそのままなの？」

03モクレンに乗るちゃーこがそんな事を口走った。コイツ・・・空気んでくれよ・・・。

「・・・魅夜。モクレンに乗りながらそんな事言ってもすぐバレる・・・」

「あ、あははそうだね。これは私とした事が失敗したみたいだよぉ」

魅夜、ナイスフォロー。すぐ様ちゃーこも魅夜の音声に切り替えて言い直した。

・・・まったく、先が思いやられるぞ。

そうして暫く7機まとまって編制しながら飛んでいると、未確認の機体がこちらに接近してきた。

未確認機なのは、新型だからだ。オペレーションシステムのデータには無いので、敵の出方を知る必要がある。

「05、03機は牽制で射撃を開始。他の機体はその援護をして

なの！」

『了解』

中距離の03機と長距離の05機に牽制でどう動くか見ようと思  
った。

敵は10体、適当に撃てばどれかに当たるかもしれない。

だが、敵は素早くそれを避けて、すぐに進撃して来た。

運動性能が格段に違う。 前回の戦闘で敵の新型機が現れた事が  
布石になっていたのか、それと同等か、それ以上……。そんな敵  
が10体も現れた事になる。

戦力差が違いすぎる！？

だが、戦力の差が戦局を左右するわけでは無い事を教えてやる。  
・・・ゲームのやりすぎだが、ゲームも、現実も戦術さえしっか  
りしていれば覆すことが出来るはずだ。

後は、それをどう実行するかだが……。

「空中戦は不利なの！ 各自地上に降りて障害物の陰へ隠れて！  
捕捉されたら全機でそちらへフォロー！ それまでは牽制を続けて  
なの！」

『了解』

相手のサーチ能力がどれほどなのか分からないが、物影に隠れて  
奇襲するのは常套手段だ。

全機が地上へ降り、岩陰等に身を潜めると、敵も地上へ降りてきた。

「ワイドスラスター・・・シュート!」

05キキヨウに乗る芽衣がそこへ発砲する。一筋の光線が途中で幾本の光線に分かれ、数機を襲う。

油断したのかその攻撃で4体の敵が撃墜された。

一気に物量ではこちらが勝った。だが、敵の機体の方が性能は上なので油断はまだ出来ない。

前回の戦闘のような馬鹿が乗っていれば話は早いのだが、今回はそういう相手ではないらしい。黙々と徐々に距離を詰めて来ている。

「! 不味い!? 大尉!」

02ボダイジュから香具羅の通信。この場合06オニユリへの通信かと思ったが、咄嗟の事なのでどうやらこちらへの通信らしい。

シュボツ!!

「!?!」

一瞬何が起こったのか分からなかった。

俺の隠れていた岩壁が一瞬にして根こそぎ無くなっていた。高  
出力の砲撃だったらしい。

幸い機体にはダメージは無かったが、次に同じ攻撃を食らったら  
無事では済まないだろう。

・・・なんて反則な攻撃だよまったく・・・。

それにしても、こちらに向かって「大尉」なんて言ったら駄目だ  
ろ香具羅・・・。

まあ、そろそろ潮時か。

「こちらは大丈夫だ！ もういいぞ！ 各自好きに発言しよう。  
あんまり悠長な事を言ってられないらしいからな」

『了解！』

「え・・・？ 大尉！？ 隊長機に乗ってるのぉ！？」

バレて無かったらしく、せんが驚いたような声を上げた。

「そういう事だ。 未来は変わったろ？ せん」

「え・・・と・・・。 分からないよぉ・・・」

せんの口から「不明」と出た。 それだけで未来は変わっている。

なら・・・後はがんばり次第さ。

「つて事で菜乃隊長！ 後は指揮権を任せるぞ！ 花屑の本領発揮させてくれ！」

「了解なの！・・・と言いたい所だけど、辞退するなの。 指揮は引き続き大尉がやってほしいなの」

オニユリに乗る隊長がとんでも無い事を言い出した。 俺がそのまま指揮！？

「さっきまでの指示は的確だったの。 私より上手く皆を使えてるなの。 嫌だつて言うなら命令なの。 指揮してなの！」

「・・・隊長・・・。 くそっ！ どうなっても知らないぞ!？」

俺はそう言いながら意味を無くした岩壁から出る。 そうすると敵から丸見えになってしまいが、それは誘いだ。 乗ってくれよ・・・。

「大尉！ 出ちゃ駄目だよお！」

せんが叫ぶ。・・・ここでせんがそんな事を言うのはとっても不吉なんだが・・・。

だが、俺は俺自身に誓っていた。

運命なんて塗り替えてやる！

「うおおおおおおおおおっ!!」

俺が現れた事で敵の6機が一斉に俺に狙いを定めてくる。 後数

秒で俺は消し炭になっているだろう。

だが・・・

「今だ！ 芽衣、香具羅！ちゃーこ！魅夜！」

「・・・了解」

「分かったわ！ 大尉！」

「おおし！ いくぜええ！」

「つつふふ」 チェックメイトお

こっそり移動していた4機が側面から奇襲をかける。

俺に注意を逸らされていた敵はその奇襲に反応できずに各自直撃を食らって撃沈した。

残りは後2機になった。

「よし！ 後は・・・任せた！」

だが、残り2機は無傷で俺へ攻撃して来っていたので・・・俺はそれを避ける事も出来そうもなかった。

これだけ減れば、後は大丈夫だろう。ここで俺は退場させてもらおうかな。

「そんな事！ 許さないなのっ！」

06オニユリのグリーンインバリットシステムを使って隊長は俺と敵の間に割って入ってきた。

グリーンインバリットシステムはその緑の膜による絶対防御が出来るが、こんな使い方が出来るのは熟練の者である隊長ぐらいかもしれない。

「勿体無い……。有効利用しようか！ 皆後ろへ着けえ！！  
グラビティブラストウェーブ発射！」

グリーンイツバリットシステムの効果が残っている間に俺は超兵器を発動する。

効果が現れる間までに芽衣達が後ろへ下がるのを確認してから「  
やっちゃんボタン」をぶん殴る。

そして、その絶望的爆発は敵の機体を捉えて殲滅。

……。とか、そう簡単には済まなかった。

「何！？」

芽衣達が下がった事を察してそちらに敵も着いて来ていたようだった。

そして、敵の攻撃が芽衣達へ向けられた。

「きゃ！？ 何よコイツ！ あっち行きなさいよ！」

近くまで接近してきた敵へ近距離専用機体の02ボダイジュが応戦するが、その攻撃を敵は難なく避けてしまう。

「香具羅！ こっちに任せろお！」

そこへちゃーこが加勢するが、それも予期していたのか一気に距離を取って牽制射撃して逃げられてしまう。

「くそっ！ 後2体なのにちょこまかとお！」

こちらが完全に戦力で勝っているのだが、動きが早すぎてまともに戦うと全く攻撃が当たらない。

「・・・大尉いゝ」

「ん？ なんだ？ せん・・・か？」

そんな状況でせんが話しかけてきた。

「恥ずかしいんだけど、やっと分かったよぉ。 この戦闘、私達の勝ちだよぉ」

「お・・・勝利の女神さんのお墨付きか！」

最初に否定していたが、せんが言う台詞にはそれだけの力がある。物理的に可能でなければせんは「全滅」と言っていたハズなのだから。

そういえば、せんの機体の性能って良く知らなかったのだが、この後にそれを知る事になる。

チュドーン！



急に敵の1体が爆発した。

誰かが攻撃したわけでは無い。ただ、回避運動をして地上へ着地しただけだ。

着地して爆発・・・地雷か！

「私の機体は、トラップ専門だよおお」

「・・・お前がそんな機体に乗ってたら最強だろうがオイ・・・」

先を読む事に長けたせんが設置するトラップなのだ。それを避けるには常識で考え得ない行動でもしない限り回避不可能だろう。

残り1体になった敵はその事で動揺したのか、動く事が出来ないでいるようだった。

チェックメイト。

「よし！ 皆 集中攻撃いゝ！」

『了解！-！』

後は動けなくなった敵には可哀相だが手加減無しにリンチで終了だった。いくら動きが早くても全員の攻撃をまともに食らって耐えられるなんて事は無かったようだった。

「・・・なんとかあったな」

01ヒメユリのコックピットで仰け反って大きく息を吐いた。

急な戦闘だったが、結果は全員無事に帰還。

せんが予言した運命に打ち勝てたようだ。

俺達は勝利を噛み締めるように喜びながらはしゃぎ通信をしながら基地へと帰還するのだった。

-----

「それにしても、最初話を聞いた時はどどういう事かと思っただけという事だったのね」

基地に戻って香具羅達に事情を説明すると、皆すぐに納得したように頷いてくれた。

「私は、最初から大尉を信頼してたのだよ。香具羅ちゃんはまだまだ愛が足りないのだねえホホホのホ」

魅夜は香具羅にチヨークスリーパーを決めるように後ろから羽交い絞めにして　実際は抱き着いているだけだが　自慢気にいつている。

「だけど、大尉も水臭いよな。　そんな事なら最初から言ってくれれば良かったのに」

ちゃーこがそんな事を言うが、ちゃーこの性格上隠すような器用な事は出来るとは思ってたからなんだが……。　それは言わないでおいてやろう。　怒られそうだし。

「大尉には大尉の考えがあつたなの。　分かつてあげてちゃーこ」

事情を知る一人の隊長がフォローしてくれる。　隊長機を譲ってくれただけで無く、そんな事まで言ってくれるなんて隊長は出来た人だなまったく……。

「結局……。私には予知能力は無かつたんだねえ」　ふふう  
「そうだったんだあ」　ふふう」

せんは帰ってきてからずっと笑顔だった。　自分の予知が間違っていた事にショックを受けるかと思つたら、どうやら逆だったようだ。　後で聞いた話によると、彼女はその力から忌み嫌われていたらしい。　彼女自身もそんな力を嫌って花屑ではずっと秘密にしていたらしい。　自分が予知した結果が良い結果ならまだいいが、今回下した予知のように「全滅」なんて言われて本当に全滅してしまつたら、そりゃ忌み嫌われるだろうが……。　実際はそういう事では無く、ただ先見能力が人並みはずれているだけだったというわけだ。

それも今回までは無自覚だったのが、今回の作戦で自分の能力に気付いてそれを使うという事を覚えた彼女は、もはや無敵かもしれない。

そういう意味で戦力は大幅にUPしたんだと思う。

良かった良かった……。これで終わればな。

「……………そういえば大尉。今回の戦闘が終わったら、好きな人に告白するって言ってた」

「いいい!？」

「!？」

芽衣の呟きに俺と他の一同が騒然とする。

「あ…………えーと…………」

「何、何!? どういう事!？」

「大尉好きな人が居るなの!？」

「ちょ…………そんな話聞いてないよ!」

「もしかして…………私かなあ？」

「絶対違うわよ! で、でも…………私じゃないわよね？」

「…………大尉。誰？」

「…………」

まさか口から出任せなんて言える雰囲気じゃなかった。

ここは嘘でも誰かの名前を言わないと……。

……いや、昨日芽衣が「責任を取って」と言っ  
てなかったか？

軽はずみな発言は出来ない。

となると、少なくとも一番好きだと言える奴の名前を言わなければならぬ。

俺もこんな事をふざけて言いたくないしな。

……

隊長は……、いい人だけど、そういう相手では無いと思う。

ちゃーこも同じだ。

魅夜は……どちらかと言えば男友達に近いイメージだしな。

香具羅は、……違うな。

せんは、俺はロリコンじゃないから論外だ。……一応な。

芽衣は……なんとなく好かれている気がしないからなあ……。

やっぱりよく考えたら俺自身にそういう感情が芽生えてないんだ

からどうしようも無い。

ここは・・・仕方無い。 お茶を濁すか。

「俺が好きなのは・・・芽衣だよ」

・・・は？

自分で自分の言葉に突っ込みを入れたかった。 今・・・なんて言っただ？

「ええー！ー！？」

「芽衣ちゃんかえ！ やっぱり大尉は大人しい方が好きだったのねえゝガクーン！」

「・・・残念なの」

「うわゝん芽衣きらいゝ」

「・・・芽衣、恐ろしい子」

残った5人が各々に騒いでいる。 しかし、言われた芽衣は・・・

「・・・」

何も言わずに俯いていた。

「あ、いや・・・芽衣。 今のは冗談だ。 すまん」

すぐに謝罪するが・・・

「あ、やっぱり嘘だったんだゝ」

と他の5人だけ反応した。

芽衣は・・・動かない。

「芽衣？ 芽衣？？」

「あら？ フリーズしてるわこの子」

魅夜が芽衣を覗き込むと真っ赤な顔のまま固まっていた。 どうやらオーバードしてしまっているらしい。

「それじゃ、やっぱり大尉は誰が好きだとか無いのよねえ？」

魅夜が率先してそんな事を聞いてきた。 他の4人もそれに従うように聞き耳を立てている。

「あ、まあ・・・そうなるな」

『オツケエエー！』

芽衣を覗く全員が何故かガッツポーズをして叫んでいた。

「・・・芽衣。 確かにこれは・・・責任取る必要あるみた  
いだな・・・。」

魅夜やちゃーこだけかと思っただら香具羅も隊長もせんも同じようにしているって事は・・・。

俺は・・・もしかしてファイナルジャッジの時を迎えなくてはな

らない？

「・・・・・・・・大尉」

「お。 気がついたか芽衣。 あのな、さっきのはな・・・」

芽衣が気がついたのでさっきの発言を取り消そうとするが、芽衣の目が何故か潤んでいた。

嫌な予感がしてしまった。

「・・・・・・・・私も・・・好きです」

「ういいい!？」

その後、花屑内に、俺を取り巻いての内部紛争勃発。

渦中の人である俺は・・・。

「ハーレムハーレム・・・なんて言えるレベルじゃねえぞ!」

魅夜はどうか知らないが、全員が真剣に慕ってくれているようだったから、俺はそれにどう答えて言いか分からなかった。

自分の気持ちがどうなのかと言われれば、皆嫌いじゃない。

だから・・・、どういう結果であっても傷つけてしまうのではないかと思ってしまうて余計に答えを出せないでいた。



それにしても……。どうしてあの時俺は「芽衣」の名前を言ったのだろう……。

一番冗談にしても良いと思ったから？

そうじゃない。そんな酷い事をしたいとは思わないハズだ。無意識でも……。

無意識という言葉俺は嫌いだった。どんな行動も自分の思っている事で説明出来ないだけなんだ。

なら、答えは……。

……

「菊池女史に相談してみるか……」

俺は渦中では無い唯一の女性の菊池女史に話を聞く事にした。

そして有難い言葉を頂いた。

「知らんわ。 自業自得じゃろうが」

一言で切り捨てられた。

俺が多分同じ立場でも同じ事を言ったとは思うが……。 菊池女史厳しいっす。

それでも、菊池女史はそう言いながらも話を聞いてくれた。

そして、最後に「お前さんの中で決まっとるんじゃないが。なら、どんな結果でも誰も文句言わんわい。そんな奴等じゃ皆」と言ってくれた。それがどんな言葉より嬉しく思ったのは俺の今までの環境がそうじゃなかったからだろう。

俺は家で家族とあまり話をしない奴だった。

学校には・・・実は行つてなかった。在籍はしていたが、自主不登校・・・まあ、引きこもりつてやつだ。

学校に友達も居なかった。ただ、灰色の毎日を過ごしていただけで、そんな毎日が嫌になって俺は自分の部屋に籠っていた。

何が悪いわけじゃない。俺が悪いというのは分かっていたのだが、そんな現実にも目を向ける事が出来なかった。

両親もそんな俺を叱る事も無く、多分諦めていたんだと思う。毎日食事が俺の部屋の前に置かれ、それを摂取してインターネットの世界へ遊びに行く毎日だった。

そんな俺にも幼馴染が居た。

そういえば、名前・・・なんだったっけな・・・。

思い出せないが、確か俺がこの世界に来る前の日に会っていたよ  
うな・・・。

ああ、そうか。

だから俺はあんな事を……。

俺の幼馴染の名前。

岩倉 芽衣子。

そう。 芽衣だ。

今までずっと芽衣の苗字を知らなかったから考えもしなかったが・  
・。

同じ名前だったから咄嗟に名前が出てしまったんだな。

そう納得して俺はその日、そのまま床へ就いたのだが・・。

自己満足しただけで、なんの解決にもなっていなかったのを失念  
していたんだ。

### 第13話「内部紛争勃発5」（後書き）

内部紛争勃発の最終話です。

次回から話が段々核心へと向かっていくのか、それとも全くゆるい展開になるのか・・・それは作者にも分からないです（おい）

次回も大尉のハリセンがうなります（違）

第14話『花の屑を手の平に』（前書き）

俺は芽衣の事が好きなのか？ それとも・・・

悩める少年と少女のミリタリーラブストーリー  
これよりクライマックスまで一直線。

## 第14話『花の屑を手の平に』

時間の流れてるといふのを感じた事はあるだろうか？

いつも感じていると答えたヤツはちよつと待って欲しい。それは「生きている」という実感があるかどうかな問題で、実際は時間が止まっているかもしれないんじゃないか？

時間の流れなんて肌で感じれる物でも無いが、確かに時間が止まっているなんてあるわけが無いから答えは出ないのが本音なんだが…。

俺自身有り得ない時間の流れを体験したので、それを否定し切れなくなつたつてわけさ。

時間を飛んだ俺。

平和だった街の面影も欠片も無く、俺はたった一人で知らない世界に投げ出されたんだ。

あの時……

俺を発見したのが芽衣では無かつたら……

今頃俺は生きて居なかつたかもしれない。

だから、俺はあの日芽衣に告白したんだ。だから、彼女を愛したんだ。

ずっと傍に居る為に……

茶色いミリタリーブーツに、茶色い軍服。

薄汚れた懐中時計に、油の入った缶。

塩、アミーナイフ、方位磁石。

それと洒落で銀の容器に琥珀色の酒が入っていた。

一応まだ未成年だからな。老けてるわけじゃないぞ？

確か…未来なんだよなこの世界って…？

俺はそんな装備を確認してそれを一つのリュックへ詰め込んだ。  
食料に該当するのは塩と油ぐらいか？

両方それだけでどうにか出来る物では無いが……。

「……ジュン、それは食べる為の調味料じゃない」

塩等をリュックに詰めようとすると、それを覗き込んでくる少女が一人。

俺はソイツの頭を撫でながら油と塩を投げよこした。

「んあ？　じゃあ何に使うんだ？」

俺の愛称で呼ぶのは勿論、芽衣だ。

可愛い俺の……いや、流石に照れるな……。

「これは大尉に付けるワセリンとプロテイン」

「・・・・・・・・・・はっ？」

ワセリンニプロテイン?? 何を言っているんだ芽衣は・・・・。

芽衣は塩と油だと思っていた物を両手に持ちながら怪しい笑みを浮かべていた。

「ふふふ・・・・。男子と産まれたからには・・・・黒光りするのが本願でしょう」  
ねえ、ヨド ジュンペイ君」

芽衣・・・・に見える者が俺の本当の名前を呼ぶ。

「わ、わ、わ・・・・や、やめろおおおおお!!」  
芽衣子おおおっ!!」

「うわああああああ!!」  
・・・・・・・・・・ここは？」

気がつくところはいつもの俺の部屋だった。いつもの言つても元の世界では無く、花屑の基地の中の兵舎だった。

「夢か・・・・。昨日あんな事があつたからな・・・・。混乱してるのかもしれないが・・・・酷い夢だ」

あの芽衣が俺を「ジュンペイ」等と呼ぶわけがない。まだ、そんな仲になつたつもりは無いし、昨日告白したのも冗談だったのだ



から・・・。

しかし、冗談だったにしては先程の夢の中で俺は芽衣と恋人のような雰囲気だった。夢は心の深層心理だとか言うが・・・。

俺は本当に芽衣が好きなのか？

確かに芽衣は俺の恩人だと思っている。だが、感謝はすれど、それとこれとは話は別だ。俺は別に芽衣と・・・。

・・・

・・・

いや、逆に考えて芽衣を好きだとして何か不都合があるだろうか？

芽衣は俺から見れば、美少女だと思う。顔は問題ない。性格は・・・少し暗いかもしれないが、落ち着きがあっていいと思う。プロポーションなんかはどうでもいい。・・・前に抱きしめた時があったのだが、ちょっと気持ちよかったがな。そして、芽衣は俺を慕ってくれていたらしい。

・・・問題があるのだろうか？

いや、何も問題は無い。無問題。モーマンタイだ。

「けど・・・、もし芽衣と付き合ったりしたとして・・・俺は何をすればいいんだ？ 女の子と付き合った事なんて産まれてこの方一度も無いんだが・・・」

「やつちゃえばいいのだよ」

「や・・・って。それは・・・」

「何を恥ずかしがるう？ 好き同士だったらそれぐらいは当たり前だしよ？ むしろ、私が代わりたいたぐらいなのに」

「いや・・・、だからそれは・・・。・・・って何処から入った！ 魅夜！！」

いつの間にか魅夜が俺のベットの横に座り込んでいた。 ホントに神出鬼没だなコイツは・・・。

俺はいつもの挨拶代わりにいつもの武器を手には魅夜の頭部を捉えようとした。

ヒュッ！

「!？」

しかし、いつものようにそれは命中しなかった。

「大尉。別に冗談で言ってるわけじゃない。 むしろ、本気で言ってるのだよ。 芽衣は私達にとって大事な子だから大尉が好きなら、本気で愛して欲しいの」

いつもと違う態度でいつもと違う台詞を言う魅夜。 これがいつもの魅夜ならもう一発殴ろうとしていたが、その日の彼女は違っていた。 冗談以外口に出れない奴だと思っていたので、その態度にめんを食らってしまったって言葉を返せなかった。

「・・・・・・・・大尉。貴方は真面目過ぎる。それが貴方のいい所だし、皆もそれだから好きになったんだと思うけど・・・・。この際でその女々しさは頂けないね」

「め、女々しいだつ！？」

女々しい等と言われて流石に俺は声を上げたが、内心は自分でも分かっている。ただ、分かっているから言われると腹が立ってしまったのだ。

「これだけは言っておくわ。芽衣を泣かせたら私は絶対に大尉を許さない。ううん。私だけじゃない。皆同じ気持ちだと思う。

昨日大尉は冗談にしようとしたけど、皆本当は分かった。分かっていないのは・・・・大尉だけなのだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何も言い返せなかった。言い返す事など出来るはずが無かった。俺は皆を傷付けないようにと思っていたのに、結局は傷付けて、失望させていたのだ。

穴があつたら入りたいだけじゃなく、そのまま消えてしまいたい・・・・。

「自分で気付いてないみたいだから言うけど、大尉は最初から芽衣しか見てなかった。私がいくらアプローチしたってそりや無理に決まってるわよね。最初から気付いてたのは私だけみたいだったけど」

「！・・・・・・・・そうだったのか・・・・。だ、だつたらお前はな

んで何度も・・・」

「私はね・・・悪い女なのよ。夜を魅了すると書いて魅夜。ぴったりでしょう？」

そう言つと魅夜は俺のベットに登ってきた。普段と雰囲気が違う。

彼女の息が少し荒い。

「気付いてない間に・・・私に振り向いて欲しかった。・・・  
・ただ、それだけよ」

「!？」

そう言つと魅夜は俺の・・・唇を奪った。

ファーストキスだった。

初めて異性としたキスだった。

それは想像した以上に恥ずかしかったが・・・、

何故かとても・・・

とても悲しいキスだった。

「私と・・・最初で最後にでいいから・・・」

その後の言葉がどう続くのか、いくら鈍感な俺でも分かってしま

った。

魅夜は俺と・・・。

「だ・・・だけど・・・」

「いいの。私を好きになつてくれなくても・・・。ただ・・・  
貴方を覚えておきたい。それだけ・・・」

「・・・！！」

魅夜の手が俺の衣服の中に入ってきた。魅夜は冗談でやっているわけでは無い。本気だった。

・・・・・・

「・・・・・・分かった」

だから、俺も本気で応える事にした。

「大尉・・・」

魅夜の潤んだ瞳が俺を見つめる。

俺もその瞳を見つめて・・・

その肩を押した。

「え・・・」

「サンキュ魅夜。 踏ん切りがついたぜ」

俺はそのままベットから滑り降りて、いつもの軍服を着る。

そして呆けている魅夜に向き直り、その気持ちを告げた。

「ん．．．．．いつてらっしやい．．．．．  
．．．．．大尉っ  
！！」

「おう！」

魅夜は泣き笑いのような顔で、それでも決して泣く事は無く笑顔で見送ってくれた。

俺は．．．今から芽衣の部屋に行く。 そして思いをもう一度伝えに行く。

将来や未来がどうだとか、そういう事はどうでもいい。

ただ．．．芽衣の傍に居たいと本気で思えた。

魅夜のおかげだな。 サンキュ．．．魅夜。

ボタン。

俺は自室を後にした。

部屋を出て、すぐに芽衣の部屋に行こうと思ったが、少し気にな  
って俺は自室の扉に耳を当てた。

そこから聞こえてくる魅夜の声……。

「本当に世話が焼けるわ二人とも……。これでやっとうにか  
なりそうだわ……。こんなボランティア今回限りにして欲しい  
わまつたく……。」

主が居なくなつた部屋で、呆れた様に魅夜は呟いていた。とて  
も軽い感じな口調だったので、俺は一瞬勘違いしそうになったが、  
その後の台詞で魅夜の行動の事が確信に変わった。

「本当にやられちゃうかと思つたわよ……。これでも生娘なん  
ですからね」 夜を魅了すると書いて魅夜って……。我ながらウ  
ケるわ……。」

彼女の真意は彼女自身にしか分からなかったが、もし、この場に  
俺が残っていたなら逆に魅夜を抱きしめていたかもしれない。自  
己犠牲が過ぎるんだよ魅夜……。

本当にな。

「くっ……。」

情けない。そうさせてまで気付かせようとしていたのに……。  
俺はなんで気付かなかつたんだ！

俺は今度こそ振り返らずに芽衣の部屋へ駆け出して行った。

「・・・」

ポトリ・・・

何かが落ちる音がした。

「・・・」

ポツリ・・・



また一つ。落ちていき、そして弾けるような音。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ポツリポツリ・・・

一粒、二粒・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ポツポツポツポツ・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
・・・・・・・・・・・・・・・・

薄暗い部屋の中で、動くものは一つ。

声も立てずにベットに腰をかけている少女。

少女の膝に何処からか雫が落ちてきた。ポタリ、ポタリと。

次第にその感覚が短くなり、少女が履いているズボンの色がそこだけ濃い色に染まっていっく……。

「……………今日だけは……女の子に……………なりたかったな……………」

その言葉を最後に少女は一切喋らなくなった。

後は静寂だけが闇を支配していく。

だが、それも少しの間で、急に闇が晴れるように少女は立ち上がった。

「……………なああってシリアスな感じもたまにはアリよね？ あっはっはははっ」

そして「いつもの彼女」へ戻る少女。

……………

そう、「いつもの偽りの彼女」へと……………。

第15話『花の屑を覚えてくれますか?』(前書き)

想いに気付いた私。

そんな想いは初めてで・・・。

どうしたらいいか分からない・・・。

。

第15話 『花の屑を覚えてくれますか？』

まさか、こんな事になるとは夢にも思わなかった。

私は昨晚は一睡もする事が出来ず、布団の中に潜り込んで光から逃げるだけだった。

あの大尉が・・・、私を好きだと言った。後で聞いたら冗談だという事だったが・・・、私は大尉に言われてやっと気付いた。

私は大尉の事が好きなんだと・・・。

その事を気付かせてくれた大尉には感謝している。だからこそ、彼を困らせてしまうわけには行かないので、私は彼を想うだけでいい。

それだけで、とても幸せな気分になってしまう。

こんな時代だから・・・誰かを思えるというのは初めて知ったがとても大事な事なんだと思う。

ただ思うだけ・・・

・・・あれ？　そういえば・・・私昨日大尉に言っちゃったんだっけ？

・・・

うわーうわー思うだけなんて格好いい事言っておいて私ったら・・・

・。

相手が自分が好きだと思っている事を知っている。それを考えてしまうともう頭の中が混乱してしまつて・・・うきゃーむきゅーな感じです。

「・・・芽衣が故障・・・なの」

ポツリと呟く声に私は飛び起きた。見るとそこには菜乃隊長が居た。

「可愛い動きしてたからつい見入っちゃったなの　芽衣、どうしたの？　何か悪い物でも食べちゃったなの？」

「・・・いえ、大尉問題ありません」

「・・・重症みたいなの」

「・・・え？　何が？」

「芽衣。　今、貴女私を「大尉」って言つてたなの」

「!？」

なんとという事だろう。　私は無意識にとんでもない間違いをしてしまったらしい。

顔が熱くなるのが触らなくても分かった。

「芽衣・・・魅夜じゃないけど抱きしめたくなるなの」

「え．．．？ え．．．？」

隊長は目を輝かせて私をハグしてきた。 隊長の胸に押し込まれるような形でグリグリされる。 私はぬいぐるみじゃないんだけど．．．。

でも、隊長にそうさせるのは嫌いじゃない。 逆に安心するかもしれない．．．。

「．．．．．」

「きゃゝ 可愛い可愛い ん？ あれ？ 芽衣？」

「．．．．．」

「あらやだこの子．．．。 寝ちやつたなの？」

「．．．．．うっん。 起きる」

ちょっと気持ち良くて確かに寝そうだったが、そんなにすぐに寝れるような特技はもっていない。 それでも隊長の胸が柔らかくて心地良かったのは確かだ。 少し羨ましいと思ってしまったけど．．．。

「芽衣。 そのまま聞いてくれる？」

「．．．．．？」

私は隊長の言葉に顔を上げようとするが、そうすると更に抱きし

める力を強くされる。

「そのまま」とは、この状態の事を言うのか。　ちょっと苦しいのだけど・・・。

「芽衣は・・・、大尉と一緒にいたいなの？」

「・・・・・・・・・・」

「うん。　答えなくていいなの。　ただ、もしそう思っているなら、後1日待つて欲しいの」

「・・・・・・・・・・？」

後一日？　1日経ったら何があるというのだろう。　隊長の言葉の真意が分からなかったが「答えなくていい」らしいので何も言わないで聞いていた。

「なんでかって言えば・・・。　後1日でTAMの換装パーツが完成するなの。　それで一気に攻める準備は整うなの。　そして、その作戦が終われば・・・二人だけは隊を抜けてもいいなの」

「!？」

隊を・・・抜ける!？　私と大尉が??　馬鹿な・・・!　そんな事を私が望むわけが・・・

「芽衣。　良く考えて。　このまま貴女がここに居ても、大尉との未来は無いなの。　この後の作戦が終わった後・・・本軍を率いて総攻撃が始まる予定なの。　そうになったら・・・誰かが死ぬかもし

れない……。それが大尉かもしれないし、芽衣かもしれない。  
の。そんな事は私は嫌なの。芽衣。これは皆も同じ意見なの」

「……………隊長」

私がこの花屑に残っている理由は皆が居るからだ。だけど、新しい気持ちを知って、それを考える間も無く、皆の中では答えが出てしまっているらしい。

大尉は初めて私を女にする存在だけど……。だからって今まで一緒だった皆と別れなくてはいけない理由になるだろうか？

隊長は良く考えてと言ったが、私には自分がどうすればいいか分からなかった。

隊長が言う「この後の作戦が終わった後の総攻撃」が決行されれば、こちらの軍は……。多分負けるだろう。

それだけ戦力差があるのは知っていた。

花屑が所属する国家は「ウエストサン」は、国力だけ見れば敵国の「イーストサン」の3分の1も無い。これまでは圧倒的な技術差で戦闘では勝っていたが、ここ最近の敵の主力TAMを見るとその力のバランスも大きく崩れてしまったようだ。

兵力も、質も負けている状態で、最後に出した答えが全軍による玉砕なんて……。馬鹿げている。

「私達の花屑が最前線に居る理由は芽衣も知っている通り、TAMの性能テストと共に敵の戦力を測る物差しなの。ここ最近の敵の戦力は今の私達ではもうお手上げなぐらいの差がついてきて……



そろそろ潮時ってこのなの」

「……………それで、換装パーツでマイナーチェンジ……………それだけで埋められる戦力差じゃない……………」

「そうね。でも、やるしか無いなの。それに、私達は歴戦の覇者なの。簡単にはやられないなの」

「……………でも、大尉は……………」

「……………そう。大尉は確かに実戦を2回経験したけれど……………操縦なんかではまだまだ荒削りなの。この前の戦闘で自分を犠牲にしないといけないぐらいに……………。オトリになるという作戦は良かったけど、その後の回避も何も無かった大尉には……………個人的にこれ以上TAMに乗って欲しく無いの」

「……………2回とも成功してしまったから……………。大尉は挫折を知らない」

「そう。それが怖い。もし一度でも失敗をしてしまったら……………彼はただの一般人になってしまう可能性があるの。元々私達のような軍人じゃないから」

「……………その通りだと思う。だけど、隊長……………。それで私も同じ扱いにされる理由にはならないと思う」

段々隊長が言っている事が分かってきたが、要は「私達の為」という理由をつけて厄介払いされているようで少し腹が立った。大尉はともかく、私はどんな危険な作戦でも元々死ぬ覚悟も出来ている。もちろん死ぬつもりは無いが、それをさせてくれずに、私だ

け除け者なんて……。

「……芽衣。貴女は忘れていたみたいだけど、貴女は」

「……え」

今なんと言った？

「だから、貴女は。混乱しているみたいだけど、事実なの。だから忘れていたなの」

肝心な所が頭に入っていない。だけど、隊長が言っている事は頭で理解していた。ただ、具体的な言葉にならないだけで、分かっていた。

「貴女達「3人」がそういう存在だという事なの。思い出して……芽衣は、ずっと一人じゃなかったなの」

隊長が話す度に段々と言葉が形になっていく。私が忘れていた記憶。思い出してきた。

「私も……飛んだ者……」

菊池女史や大尉のように、時を飛んだ者。それが私だった。

でも、だったら、私がちゃーこや隊長と過ごした日々は何だったの？ あれは偽りの記憶？

そんな事はない。私は確かに……一緒に過ごしたハズだ……。なら、私は大分前に飛んで来た事になる。

「だから、芽衣にはもう一度大尉と飛ぶという選択肢もある。良  
く考えて欲しいの」

「・・・・・・・・私は・・・」

どうしたらいいのだろうか？ 時を飛ぶというが、その手段も分  
からないのに・・・。

いや、それはもしかしたら菊池女史が知っているかもしれない。  
彼女は「戻る方法は知らない」と言っていた。では、「飛ぶ方  
法」は？ 聞いてみないことには分からない。

「大丈夫なの。芽衣がどんな選択をしたって、皆恨んだりしない  
なの。それは花屑隊長である私が保証するなの」

「私は・・・私は・・・」

何か答えなくてはならないのに私は頭が真っ白になったように何  
も答える事が出来なかった。

期限は明日。

明日までには私は選ばなくてはならない。 未来を・・・。

「後、ごめんなさい。芽衣に謝ることがあるの」

「・・・・・・・・あやまる・・・・こ・・・・と？」

頭の中がぐちゃぐちゃになっている最中に隊長が頭を下げてきた。それすら意味が分からない。上官が部下に頭を下げる等・・・考えられない行為だった。でも、それは菜乃隊長だからこそその行動だったのかもしれない。

「私達は・・・ずっと芽衣に依存してた・・・。貴女のように自分の殻に籠っている姿を見て・・・皆自分を重ねていたなの。そして、無意識に自分は芽衣のようにならない為に・・・、そんな芽衣が壊れてしまわないように・・・見守っていたなの」

「・・・・・・・・なんのこと？」

「・・・・・・・・本当に申し訳ないと思ってるなの・・・・・・・・。皆が芽衣に優しくしていたのは・・・・・・・・自己防衛だったの・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「芽衣・・・・・・・・私達を・・・・・・・・許して欲しいの・・・・・・・・。ごめんなさい」

隊長が何を言っているのか分からなかったが・・・・・・・・それは個人の勝手な思想でしか無いでは無いか。それを謝られても・・・・・・・・

それを・・・・・・・・今言われても困る。

「隊長。何が言いたいのかわかりません。だけど、私がそう思われていたというのがそんなに大事な事ですか？」

「皆・・・自分を偽っているなの。だから、その姿が壊れていつ芽衣のようになるかわからずおびえているの。私もそうなの。」

だから」

「もういいですっ!!」

「!!」

隊長の口からそんな言葉は聞きたくない！ 意味が分からない！ 私に何を求めているの!？

「ごめんなさい。隊長・・・一人にしてください・・・」

「・・・分かったなの。芽衣、本当にごめんなさい・・・」

隊長は頭を下げると、私の部屋から出て行った。

菜乃隊長が何を言おうとしていたのか、本当は分かっていた。彼女は私が人としての感情が乏しい事を自分達の責任だと思っているらしい。それを必要以上に悩んでしまっているようだった。だが、それは菜乃隊長達個人の妄想でしか無く、私自身に何かしたという事では無いハズだ。まだ何か隠しているなら分からないが、私に謝る必要は無いハズなのに・・・。

先程まで仲間だと思っていた人達が・・・急に遠くに感じてしまった。

しかも、自分から一人にして欲しいなんて言ってしまった・・・。

「・・・何が・・・何だか分からない・・・」

一度に色々な事を言われて、それを頭で理解する事が出来なかった。

私は一体何者なのか。　私は一体どうすればいいのか・・・。

「会いたい・・・大尉に・・・会いたい」

そう思うと、一人では不安で胸が潰れそうになってきた。　実際吐き気までしてくる。

大尉に会いたい。

そう思ったのは、彼が同じような境遇だからか。

私は、大尉に相談するか、菊池女史に話を聞くか悩みながら部屋から出る事にした。

その後の事は、一生忘れられないだろう。

「・・・・・・・・何・・・・・・・・コレ・・・・・・・・？」

外に出た私の目に飛び込んできたのは・・・、あちこちで火の手が上がる基地だった。

第16話『花の屑をずっと覚えているよ』（前書き）

俺は芽衣に想いを伝えるために芽衣の部屋に向かう。

気付いたことがある。思い出した事があるんだ。

ずっと忘れていた事だったけど・・・。

それは芽衣子の記憶だった。

## 第16話『花の屑をずっと覚えているよ』

俺は芽衣の所に行こうと、兵舎の廊下を歩いていた。

「芽衣が・・・俺達と同じ飛んだ者!？」

「そうじゃ」

そこで菊池女史に呼び止められた。

そして、イキナリそんな事をカミングアウトされてしまった。

菊池女史は真剣な面持ちでその事実を語る。

「イキナリですまんの。じゃが、もう時間が無いんじゃ。ワシから言える事は全て話したいと思う」

「な・・・意味分からないが、了解。物分りは悪い方じゃないかな、続けてくれ」

菊池女史の様子にただ事では無い事が分かったのでおとなしく聞くことにする。それを聞いた後で判断すればいいだけだ。今は、慌てるべきじゃない。

「・・・流石ジュン大尉じゃ。落ち着きすぎじゃと最初は訝っておったが、その落ち着きが今は助かるのお。いいか、一度しか言わん。そして、全て事実じゃ」



「ああ、時間が無いんだろ？　早く言ってくれ。こっちも急いでいるしな」

「ふむ。分かった。話そうか」

・・・・・・・・

菊池女史が話した内容はとても信じられない事だった。

だが、それを聞くと全てが辻褄が合う。そして、それを聞いた結論としてハッキリしているのは「俺はどうやっても元の世界には戻れない」という事だ。

もう一つ分かったのは「不思議な体験をしたわけじゃない」事だった。

「時間を飛ぶというのは……。コールドスリープの事だったのか！」

「そうじゃ。ワシも大尉も同じ研究所で眠らされたのじゃ。そして、事故によって我々は起きてしまった……。大尉とワシと芽衣じゃ。最初に記憶があるか聞いたじゃろ？　コールドスリープには記憶弊害の恐れがあったのじゃが……。ワシも肝心の事を思い出すのに時間が掛かってしまった。芽衣は全く覚えてないみたいじゃがの」

「じゃ……。じゃあ俺はなんで眠らないといけなかったんだ？　それは芽衣も菊池女史もだが……」

「何を言っ取る。お前さんが一番最初に眠ったんじゃろうが」

「え？」

「お前さん・・・やはり覚えてないんじゃないか・・・。生活に疲れて、未来へ飛ぶ事を望んだのは他でもないお前さんじゃないか」

「・・・俺が・・・望んだ・・・」

「そうじゃ。後、ワシは関係者じゃったから試験で眠ったのじゃが・・・。その後には芽衣が眠った経緯は知らん。芽衣の事も思い出せないんじゃない？ 幼馴染じゃったのにな」

「・・・思い出させて方が無理だな。だってアイツは・・・まだ小学生だったんだぞ！？」

「しっかり覚えとるじゃないか・・・」

俺は家族とは接触しないようにしていた。

あの頃、両親が離婚するという話で家の中が荒れていたというのもあった。

親父は俺が引き籠もっているのを自分のせいだと言い、母は俺が引き籠もるのを俺のせいだと言った。

どっちも正解だった。

学校が嫌で、家庭が嫌で、全てから逃げ出していた俺。 そんな俺には何も無かった。

だから、ずっと逃げ出してもいいと思っていた。

インターネットの中に逃げていれば楽しいことは一杯ある。

だから、それでいいと思っていたんだ。

そんなある日、従姉妹の岩倉つて人が家に来た。

なんでも研究所に勤めているらしく、その業績がなんとか平和賞を貰ったとか言って、その挨拶回りだったらしい。 興味は無かったが。

岩倉 紋治つて爺さんを知ったのはその時だった。

その紋治さんはとても気持ちが良い人で、引き籠もっている俺を認めてくれた。

ただ、そんな良い人でも世間からは逃げているらしく、何かシンパシーのような物を感じたものだ。

「モンジさんは、どうしてそんなに言われながら研究を続けるんですか？」

俺の問いに紋治さんは、少し困ったように笑うと、しかし、自信

たつぷりに言った。

「私の研究が、いつか世界を救うと思っっているんだよ。恥ずかしいだろう？ たった一人の小さな思想で世界が変わるなんてあるわけが無いのだがね。私が作っているのは兵器じゃない。人が優しくなれるための補助器みたいなもんなんだ」

「へえ・・・いいですね。　なんだか分かりませんが素敵だと思います」

「おお！　そう言ってくれるか！　君なら分かってくれると思っていた。　どうだ？　私の研究を手伝ってはくれないだろうか？」

「俺が・・・何か出来るんですか？」

「そうだなあ・・・。　君はゲームが得意だったな。　よし、それを元にしてみようかと思う。　テストプレイをしてくれば良い」

「テストプレイ・・・。　なんだかゲームとかで最後のクレジットに出てくるスペシャルサンクスみたいな感じですね」

「おお！　そんな感じだな。　勿論君の名前を登録しておくからもしかしたら世界一有名な高校生になるかもしれないぞ」

「わ・・・それはやめてくださいよ。　恥ずかしい・・・」

そんなこんなで意気投合した俺達はその「研究」というのを進める事になった。

そうして一週間ぐらいが経った頃には両親は離婚していた。

俺は母親に引き取られた。

それでも紋治さんとの研究は続いていた。

「ジュンペイ君。君がプログラムした所なんだが・・・少し遊びすぎじゃないか？ このグリーンインバリットシステムは物理的に難しいぞ？」

「そうなんですか？ こういうゲームでシールドは必需だと思うんですが・・・」

「まあ・・・検討してみるがな。ジュンペイ君、後でテストプレイの続きをお願いするよ」

俺は研究といいながらゲームを作っているんだと思っていた。

それが本当に実物大の兵器の製作だなんて思ってたけど・・・。

プログラムはインターネットから拾ってきた物を独学でいじった物に、専門家に頼んでチェックしてもらった物だった。

「ジュンペイ君。大体の基本プログラムは完成したよ。後は実際に物を作るわけだが・・・それは大分時間がかかりそうだ」

「どれぐらいかかるんですか？」

「そうだな・・・半世紀は後になるかもしれないね」

「ええ。早く実際にやってみたいなあ」

俺は何気なしに言ったのだが、それに紋治さんは目を輝かせて俺の肩を掴んできた。

ちよつとその顔が怖い。

「……………ジュンペイ君。君が良かったら当日まで飛ばす事は可能だよ。平行して研究していた冷凍保存の研究のテストも兼ねているけどね」

「れ、冷凍保存……………それって危なくは無いですか？」

「それ自体はね。ただ、人権的な問題があるが……………」

考え込むように視線をそらす紋治さん。確かに勝手に眠らせるとなると、俺の両親も、国も黙っていないかもしれないが……………。

こういうものは個人の意思だ。俺も実はこういう物に興味があった。

本当にこれで未来にいけるといふなら……………やってみたいと思うだろう？

「だったら、俺はそれにもってこいじゃないですか。なんたって自宅警備員ですからね」

「上手い事を言うね。そうか……………こちらとしてはお願いしてみたいが……………」

紋治さんは泣いていたが、俺は世界に何の未練も無かったの  
願いました。

そして、コールドスリープ器がある部屋まで行き、俺はその装置  
の中に入った。

「ジュンペイ君。君に未来を託そう。君は知らないかもしれな  
いが、世界は確実に壊れていく予兆がある。・・・目が覚めたら  
全く変わっている世界が広がっているかもしれないが・・・。君  
が不自由なく暮らせるように手は打つつもりだ。それは安心して  
くれ」

「・・・未来がどう変わるか分からないのに安心してこれって無責  
任ですね紋治さんは・・・」

「あつはつは！これは一本取られたな。だが、手を打つのは  
本当だよ。私はそれでも政府に影響力を持っているんだよ？」

茶目つ気たつぷりに笑う紋治さんは若いと思う。その時彼はも  
う60を越す高齢だったなんて信じられないくらいだ。

「はいはい。信じますよ。紋治さんはとてもエロイ人なんです  
もんね」

勿論「偉い人」って言おうとしたんだけど、口が滑ってしまった。  
まあ意味は一緒か。

「何を！？さっさと寝てしまえ小僧めがつ！」

怒ってコールドスリープの装置を作動させる紋治さん。それが

彼の笑顔を見た最後の瞬間だった。

「はいはい。じゃあまた、紋治さん」

「……………またな。ジュンペイ君……………」

少し寂しそうに装置に横たわる俺を見つめる紋治さん。

その時は、俺はまさかもう彼に会えないなんて思っても見なかった。

「なんで！？　なんでそんな事したのおじいちゃん！」

少女が初老の研究者に詰め寄った。

「おじいちゃん」と呼ばれた人は、寂しそうに自分の孫娘の頭を撫でて答えた。

「彼が……………望んだからだよ」

「そんな……………ジュン君は……………私のお兄ちゃんだったのっ！　ずっとずっと一緒だって約束したのにつ！　ジュン君も酷いよ！　私を……………私を置いて行くなんて！」

「お……………落ち着け芽衣子。お前はまだ小学生だろう？　小学生は学校へ行つて多くを学ばないといけない」



「学校なんて楽しくないもんっ！ それに学校で勉強してもおじいちゃんみたいになっちゃうんでしょ！？ そんなの嫌だよ！」

「芽衣子……」

「大好きなおにいちゃんを奪っちゃうような研究者に私はなりたくない！ お兄ちゃんの居ないこの世界なんていららない！ いらないんだよおおお！」

「……芽衣子はそんなにジュンペイ君が好きなのか？」

「う……うえっ！？ あうあう……す、好きとか……じやなくて……。ううん。違う。大好き。将来はジュン君のお嫁さんになるって言ったんだもん！」

「……会える手は一つだけあるよ」

「！ 本当！？ おじいちゃん私それをする！ そんなことがあっても後悔しないから！ お願いおじいちゃん！」

「装置は後一つしかないんだが……。私は無理だな。芽衣子。ジュンペイ君と菊池君の三人で未来へ行ってくれるか？」

「ふええ？ どういう事？？」

少女は意味が分かっているわけではなかった。

ただ、大好きな「お兄ちゃん」に会いたかったただだった。

「おじいちゃん」は装置を使ってしまったらもう戻る事は出来ない事を説明するが、そんな事は頭に入って来なかった。

ただ・・・

少女は「お兄ちゃん」に会いたかった。

それだけなのだ。

「芽衣子・・・。達者で・・・。」

「うん！ おじいちゃんおやすみなさい！」

少女は・・・岩倉 芽衣子はコールドスリープ装置に入っていた。

「・・・その未来が・・・この世界・・・」

あらましは菊池女史が話してくれた。そういう記憶媒体があったのか、それとも単なる彼女の妄想なのか分からなかったが・・・。芽衣子のフリをして可愛らしく叫ぶ菊池女史を見ると、少し「痛い」と思ってしまった。いくつだアンタ・・・。

「そうじゃ。まあ、芽衣は自分の名前さえも覚えてないし、ジュ

ン君の事も覚えてないがの。 お前さんがワシを覚えてなかったのも同じ事じゃろうが・・・」

というか、俺は菊池女史に会った事はあんまり無くて本当に忘れていただけなんだがな。

紋治さんとは話していたが、他の研究員とはあまり話したくなかっただけだ。

「・・・芽衣子の事は最近思い出したんだ。 だけど・・・あの子供が・・・あんなに成長するっていう事は芽衣子は先に目が覚めていたんだな？」

「芽衣」になった芽衣子を思い出して、幼少の頃の彼女と照らし合わせてみるが、あの頃の少女と今の「芽衣」では違い過ぎる。

「・・・いい体になったもんだ。 いや、性的な意味で。」

「そうじゃな。 設定は同じ日だったみたいなのじゃが・・・。 研究所があつた場所が襲撃にあつたみたいで。 ワシとお前さんの装置は無事だったようじゃが・・・。 装置自体が壊れてしまった芽衣子は目覚めてしまったようじゃ」

「・・・まだちょっと分からない事はかりだけど・・・。 紋治さんはどうなったんだ？ この時代には生きてないのか？」

生きていれば80を越す妙齢なのだろうから、もう老衰してると思っていた。 ちょっと失礼な話だが。

だけど、菊池女史が語る歴史は想像とは違っていた。

「……大尉が手伝った研究はな、TAMの基本設計じゃったんじや。それを完成させた業績で一時は高名な研究者として名を馳せたんじやが……。その後時代が変わり、紋治名誉教授は・・・第一級戦犯として処刑されてしまったわい」

「!? はあ!? 戦犯!? それを運用したのは国家の勝手じゃないのか!?」

「そうじゃな。だが、世間はそうは思わなかったようじゃ。彼がこんな物を作ったから世界は混乱した! 彼こそが諸悪の権化だ! という声が世界中で広まってな。そして今じゃ。そういつて批判していた世間はそれを使って戦争なんぞ始めよった・・・。阿呆じゃ・・・本当に阿呆じゃ・・・」

「紋修さん・・・。好きだったのにな・・・。俺を認めてくれただただ一人の人だったのに・・・」

引き籠もっていた俺にとって、目を見て話してくれるただ一人の大人の人だった。

そんな紋治さんが居ないというのは・・・とても寂しい気がしてしまった。

「しかし大尉。感傷に浸っている場合じゃないぞい。今基地は危険な状態なのじゃ」

「? どういう事だよ?」

菊池女史はチラチラと窓の外を見ながら、額から汗が流れていた。

「最初の作戦からこの前の作戦の相手の行動を考えれば簡単な事じや。彼等は数でも勝てない。質でも勝てないと学んだ。そうすると次に彼等が打ってくる手は自然にそうなるじゃろって……」

「何を……」

ブーンブーンブーン！！

【緊急指令！ 緊急指令！ 基地内部に侵入者！ 戦闘員は直ちにこれを殲滅してください！ 敵の数は不明！ 非戦闘員は速やかに避難してください！ 繰り返す！ 基地内部に】

「な、なんだ！？」

警報が鳴った。 侵入者！？ 戦闘員つてもしかして俺も含まれるのか！？

「来たか……。兵器で勝てないなら……。人海戦術でパイロットを殺せばいいだけの話じゃ。簡単な話じゃ」

「な……。何を落ち着いてるんだよ！？ 此処も危険じゃないのか！？」

TAMの操縦は少し慣れてきたが、実戦の白兵戦なんて俺には出来る自信は無かった。

銃は持っているが……。

「こうなってしまったのは。慌ててももう手遅れじゃ。多分格納庫まで行くまでに撃たれて終わりじゃろうな・・・」

「!」

「大尉。未来がこんな世界ですまんかった・・・。全ては大人の我々の責任じゃ・・・。本当にすまんかった・・・」

涙を流して菊池女史は崩れ落ちた。だが、そんな事をしていると余計に殺されてしまう。

俺は菊池女史の腕を掴んで叱責する。

「くっ・・・！諦めるなよ！まだ、足があるだろう！？手があるだろう！単なる歩兵が来ただけだろ！そんな奴等に花屑が負けるかよっ！」

「大尉・・・じゃが・・・」

俺だってこんな戦闘は恐ろしい。痛いのは嫌だ。死ぬのは嫌だ。

だけど・・・、諦めてしまったらそれで終わりじゃないか！

生きて・・・生きて未来を掴むんだ。

俺も、菊池女史も、芽衣だって・・・紋治さんに未来を託されたんじゃないか！

「紋治さんは言った！俺が平和に暮らせるように手を打ってある

と！ だから、こんな状況になっても大丈夫な手があるはずだ！」

「……強いの大尉。 お前さんはこの世界に合ってるみたいじゃのお。 やっぱワシも惚れそうじゃわい」

「なっ！？ こんな時に何を言っ」

菊池女史はとんでも無い事を言った。 皆に引き続いて菊池女史も！？

ああ、そんな事言ってる場合じゃなかったな。

「分かった！ とりあえずどうにかして格納庫へ急ぐぞい！ 大尉！ 銃はもつとるな！？」

「ん？ ああ、ちゃんと支給されたのがあるぞ」

俺は軍服のポケットから一つの短銃を取り出した。 だが、武器はそれとアミーナイフだけで、菊池女史の分が無い。

だったら、俺はこんなちっぽけな銃で菊池女史を守らないといけないのか……。

大変だな。

「よし。 ワシは……コレじゃ」

メス？

「ワシがコレを持ったら……無敵じゃという事を教えてやろうか

の・・・ヒヒヒ・・・」

「菊池女史が怖い・・・」

キラリと光るメスを片手に菊池女史は格納庫まで走っていく。

その姿は凶器だけに狂気に満ちていた。

マッド過ぎる・・・。

俺と菊池女史は警戒しながら格納庫までの道を疾走するのだった。



## 第16話『花の屑をずっと覚えているよ』（後書き）

[http://9922.at.webry.info/200802/article\\_13.html](http://9922.at.webry.info/200802/article_13.html)  
にて

番外編を公開中〜

・・・ストーリーと全く関係無い話なのでこちらに投稿はしません。  
この（<http://9922.at.webry.info/>）ブログ内ではこちらには無いイラストや番外編が少し  
合ったりするので興味がある方がそちらをチェックしてみると良い  
かもしれませんw

第17話『花の屑は咲き乱れた後に散る』（前書き）

敵が基地へ侵入してきた。

私はそれを迎え撃ちながら皆と合流する為に走る。

銃声と悲鳴が響く兵舎の中で、私が見たのは・・・

第17話『花の屑は咲き乱れた後に散る』

走る。 走る。

右左右右左右ミギヒダリ……

交互に足を投げ出して、ただ、私は走る。

基地が燃えていた。

襲撃があつたと先程警報が鳴っていた。

私や、ちゃーこ達は訓練を受けているから大丈夫だけど……。

大尉や菊池女史は危ない。

先程大尉の部屋を覗いたが、誰も居なかった。

何処に行つたの!? 大尉!

「ちょ……なんなのよアナタ達は!」

「!……これは香具羅の声!」

声のした方へ向き直ると、香具羅と知らない者が対峙していた。

あれは・・・敵の兵！

「イキナリ乙女に向かって銃を向けるなんて失礼じゃない！ 早くその銃を」

パン！

「！！」

敵の兵は躊躇無く発砲した。

香具羅は、その刹那撃たれた反動で後ろへ倒れていく。

「！」

香具羅！と叫びたかったが、敵はこちらに気付いていない。

私がするべき事は、彼女の死を無駄にしない事だ。

今は感情を捨てるべきだった。

私は手に短銃を取り出して・・・。

敵の頭を狙って発砲した。

パン！

その銃弾は見事命中して。 敵の兵はこちらに気付くことなく絶

命した。

流石に肩を狙おうとは思わなかった。だって、香具羅を殺した相手だ。

手加減なんて出来ない。

「勝手に殺すなあー！ー！！」

香具羅の亡霊が何か叫んでいる。ごめんなさい。私がもっと早く気付いていれば・・・。

成仏して。 香具羅・・・。

「肩を打たただけっ！ ちょっと芽衣、助けてくれたのは感謝するけど無視は酷いんじゃない!?」

「香具羅・・・・・・・・。 貴女の事は忘れない・・・・。」

花屑で初めて戦死者が出てしまった・・・。

私の判断が遅かったせいで・・・。

こんな私は軍人失格だ・・・。

「いや・・・・・・・・。 いいからアンタは私の話を聞きなさい。 人を美しい思い出にしないでくださいませんか？」

そうだ。今は悲しんでいる暇は無い。彼女の死が後々に美しい思い出になるかどうかは生き延びてからだ。

それまで…貴女を忘れておく。さようなら……。

「私…怒っていいのかしら…」

実は香具羅が言っ居る事が聞こえないわけでは無いのだが、私は本当にシヨックだった。

今回はたまたま外れただけで、タイミング的には間に合っ居なかった。本当なら今頃、私の目の前には血溜まりに横たわる屍があっただけだろう。糸の切れたマリオネットのように役目を終えた人形は、捨てられるだけだ。

「所詮は駒の一つでしか無いのね…。戦いは空しい…」

「聞きなさいー!!」

スパーン!!

「……カグちゃん痛い」

「誰がカグちゃんだー!?」 冗談はおいといて、ヤバいわ芽衣。せん達は無事かしら……」

「皆はそんな命乞いして撃たれるようなヘマしない…」

「ちょっと!?」 アンタ実は性格悪いでしょ!？」

とにかく基地に敵が何人も侵入しているのは確かのようにだった。少し離れた場所で銃声や爆発音が聞こえて来る。

誰か戦っているのか…。

「とにかく皆と合流する事が先決」

「そうね。私も肩を撃たれたけどまだ動けるわ。　魅夜に見られない状態だけど、そうも言ってもらえないわね」

香具羅はズボンのポケットから白い布を取り出して肩の付け根をキツく縛った。

少しでもそれで止血になるだろうが、激しく動かす事は無理のようだった。

「……完全にお荷物」

「容赦無しかオイっ！？　…っつう…いたひ…」

「やっぱり痛いよね」

「痛いよ！　痛いさ！　痛いだろうさ！」

よく分からない三段活用だったが、とにかく痛い事は分かった。

「……香具羅。緊急時にふざけ過ぎ。自重した方がいい」

「……後で絶対泣かせるから覚えてなさいよ！」

そこまで元気に叫ぶ香具羅は心配しなくてもいいようなので、私は銃声が聞こえた方へ進んでいく。　それに仏頂面で着いて来る香具羅。

暫く歩いていると、敵の兵と思われる者が銃を構えて通路で仁王

立ちしていた。

撃ってくれと言わんばかりの体制だったので私達は二人で銃口をその適へ向けた。

「おっと。お嬢さんたち。撃つてもいいのかな？」

敵が目の前に居るのだ。撃たないわけが無いだろう。だが、敵の自信満々な態度が気になった。何故そんなに落ち着いているのか？

答えは彼の足元で崩れている者のせいだった。

一瞬それが誰だか分からなかったが、薄汚れた茶色いツナギを来た「男」だったので、すぐに分かった。この基地に男は大尉以外は「彼等」しか居ない。

「整備員さん・・・」

「・・・アンタ本当に名前覚えるのが苦手なのねえ・・・。タケシ君でしょアレ・・・」

「・・・そんな名前だったんだ・・・」

「芽衣さんは冷血女だという事でファイナルジャッジ。タケシ君・・・」

香具羅が何か言っているが、普段ほとんど顔を合わせていない整備員の名前を覚えていないというのは別に悪い事では無いはずだ。彼等にはいつもヒナギク達を整備して貰っているので感謝してい



る。

だが・・・人質という事なのだろうか？ 確かに非戦闘員だが、彼も軍人だ。 覚悟は出来ているハズである。

「おいおい。 なんだその反抗的な目は？ コイツの命が惜しくないのか？」

敵兵はショットガンタイプの銃を持っていて、その銃口を整備員に突きつけていた。

警備員は気を失っているのか微動だにしなかったが。

「・・・・・・・・下衆・・・・・・・・」

「あん？ 何か言ったか？」

「なんでもない。 これでいい？」

いくら名前を覚えていないからと言っても、彼も大事な仲間だ。 見捨てるわけには行かない。 香具羅も同様に思ったようで、私とほぼ同時に持っていた銃を床に捨てた。

「よし。 それでいい。 じゃあ・・・・・・・・死ね」

ドン！

敵兵はこちらに向かって躊躇無く発砲した。 その弾道を見切る事も出来ずに私と香具羅は全身に無数の傷を負う。 散弾銃なので、距離があれば威力は小さいが、細かい傷が体中に出て、私も香具

羅もその為の傷で真っ赤に染まってしまった。

「おほう……。遠すぎたか。今度は外さねえぞ……」

銃を両手に持ち替えて、近づいてくる敵兵。アレを至近距離で食らったら……。粉々に吹き飛んでしまうだろう。私達に武器は無い。そして、逃げる場所も無い。

万事休すだった。

「芽衣さんっ！ 香具羅さんっ！ 逃げてください！」

「な、てめえ！？」

そこで整備員のタケシは気がついたのか、敵兵の足を掴んで叫んだ。

駄目 そんな事したらっ！

「邪魔……。なんだよっ！」

ドン！

重い衝撃が響き渡った。敵兵は足元の整備員に発砲。整備員は……。その一瞬でもう二度と動かなくなってしまった。

……。あの距離からでは万が一でも助かる見込みは無かった。

死んだ。

今度こそ。

私の目の前で。

私の仲間が死んだ。

私の目の前で。

私は何も出来なくて。

私のせいで 殺してしまった。

「うわあああああああああつあああああああああ  
あああああああ！！！！！」

パンパン！

私は床に落とした短銃を素早く拾うと1発、2発と連続で発砲。一発目で敵の銃を落とし、二発目で敵の肩を打ち抜いた。

そして

「  
・  
・  
・  
・  
・  
死ね  
」

「ぐあああああああ！」

パンパン！

私は敵の胸に向かって更に2発打ち込んだ。

狙いは一発も外さない。この距離で外すわけが無い。

パンパン！

更に2発。

今度は両膝を狙った。崩れ落ちる敵兵。

パンパン！

更に2発。

その軌道は正確に両手の手の平を打ち抜いていた。

「があああああ！！」

何度も繰り返される悲鳴。一発で仕留める事をせず、いたぶる様に狙った銃撃に、後ろの香具羅は青い顔をしていたようだった。

「・・・・・・・・悪趣味だった。ごめん」

パン！

そう言って最後の発砲。それが敵の額に風穴を開けて敵を完全に沈黙させた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・キレると怖いわ・・・芽衣は・・・」

そんな事を香具羅は呟いていたようだが、私自身こんな事が平気で出来るとは思わなかったのだ。

整備員を助ける事が出来なかった。

こんな調子では誰も助けることなんて出来ない。

シウル・・・。

私は髪留めを外した。左右に垂れる髪が自由に流れるウェーブを作る。どつちかと言えば癖毛なので、それ自体には意味は無い。

髪留めはリボン状になっていた。それを額に巻く。

なんて事も無い。ただ気合を入れる為だ。

古い言葉で「ハチマキを締める」という言葉があったような気がしたからだ。・・・アレは本当にハチマキだったか？正しいか間違っているかは問題ではない。

「行こう。香具羅」

「OK。こちらダメージは軽いよ」

腕をやられている香具羅は気丈にもそう言っただけで着いてきた。彼女も他でもない花屑の一人だ。こんな事で脱落するような弱い心は持っていない。

私と香具羅は無言で頷き合い、他の喧騒がする方へと駆けていっ

た。

「ひとつ！ 二つ！ みつつ！ よつつ！ これで終わりだあ！！」

「ぎゃあああああああああ！！」

「うわあーちゃーこ絶好調・・・」

「敵じゃなくてよかったなの・・・えいつ」

パン！ パン！ パン！ パン！

丁度同じ頃、ちゃーことせんと菜乃隊長は合流して、各々に敵を殲滅していた。

その中でもこういう戦闘をもっとも得意とするちゃーこは本領発揮と言わんばかりに暴れていた。

敵の兵が一人、二人と倒れていき、周りに動くものは殆どいなくなっていた。

ちゃーこが戦闘不能にして、菜乃隊長がトドメを指す。 せんは敵が来る方角をちゃーこへ教えていた。

見事な連携プレーだった。

「芽衣達は大丈夫かねえ……。まあ、あの子は個人レベルでは心配無いだろうが……。誰かが一緒だと極端に油断しちまうからなあ……。」

ちゃーこの心配は的中していたのだが、それは後で合流してからという分かった事なので、その時の彼女達はまず目の前の敵に集中していた。

「そういえば、魅夜は見つかったなの？」

「ううん。部屋には居なかったみたいだよ。こういう時魅夜は行動早いから一番最初に応戦してると思ったけど、基地の中にはいないっぽいよ。」

隊長の問いにせんが答えるが、その台詞が「本当に基地の中に居ない」とは思わなかっただろう。

後になって気付いたが、その時には彼女の愛機のTAM-03モクレンも無くなっていたらしかった。

隊長達は基地の中の味方の生存を確認するために基地の中を散策するのだった。

「……………TAMの発信音？」

「え？ そんなの聞こえた？」

「うん。間違いない。今は・・・誰かがTAMを動かしたみたい」

「うわ・・・敵じゃないことを祈るばかりね」

同じ頃、私と香具羅はそんな音を聞いた。

基地の通路には敵の兵が何人も倒されていた。この屍の先に味方が居るのだろう。

私は急く事無く、警戒しながら歩いていく。

先程の失敗を無駄にしない為にも細心の注意を払って歩く。

足元に倒されている敵の兵は全て絶命しているようだった。だが、死体に紛れて襲ってこないとも限らないので動く物が居ないか慎重に目で追いながら歩いた。

幸い、そんな者も居ないようで、私達は屍を作った張本人達と合流する事に成功するのだった。

「隊長！」

「芽衣！ 無事だったなの？ あらあら・・・香具羅はちょっとやられちゃってるなの？ 可哀相・・・」



隊長達は流石にほとんど無傷で居てくれた。 何だかその後ろで  
ちゃーこがふてくされている。

「むー。 コイツら弱過ぎだぜー！ たのしくないっ！」

「ちゃーこ……不謹慎……」

戒めるように言ってみるが、そんな台詞も気に入らないと言わん  
ばかりにちゃーこは拳を突き上げて叫んだ。

「しゃーらっぷ！ 私は楽しく無い戦いはしたくないの！ 強敵と  
書いてトモと読む！ そんな相手は居ないのかしらね」

「……山に登ってクマとでも戦って来なさい。 ええと、  
あれ？ 魅夜は居ないの？ 大尉とかも居ないのね」

香具羅がそんなちゃーこを無視してキョロキョロと見渡した。  
その場に居るのは隊長と、私と、ちゃーこと、せんと、香具羅だけ  
だった。

非戦闘員の菊池女史も居ない。

「見てないなの。 進入してきた敵はそんなに多くなかったみたい  
だけど、彼等だけでは危険なの。 探しましょう」

どうやらちゃーこが大抵の敵を片付けたらしく、基地の中に進入  
した敵の数はもう数人になっているらしかった。

進入した数はおよそ100人程だったらしいが……。

ちゃーこ達はその8割を倒したそうだ。

私は2人だけだったのだが・・・。

つくづく敵じゃなくて良かったと思う。

「でも、敵の数が少なすぎるねえ。　まだ来ると思うよ。」

「いつ!？」

せんが不吉な事を言ってくれる。

せんの言葉は色々な事象を元に発言されるので、不吉なんてもんじゃない。

どういうわけか、彼女が言った事は現実起こってしまうという事だ。

ブーンブーンブーン!

ほら、警報だ。

【戦闘員各位へ!　格納庫に敵が侵入した模様!　繰り返す格納庫へ敵が侵入した模様!　直ちにこれを殲滅してください!】

「はいはい。　次は格納庫ね。」

ちゃーこはシャドーボクシングしながら格納庫への道を先導していく。

兵舎から格納庫はそんなに離れていない。

私達はすぐに目的地へたどり着く事が出来た。

格納庫の前で、黒衣の女性と、軍服の男が座り込んでいるのが見えた。

あれは・・・大尉と菊池女史？

「おーい！ 大尉！ 菊池女史！」

ちゃーこがそちらに歩み寄ると、菊池女史は何故かメスを手にちやーこに駆け寄って行く。

「！？」

「カットカットカットカットオオ！！」

煌くメス。それを生身で防御するのは危険とちゃーこは後ろへ飛び退いた。

菊池女史はトランス状態だった。

「ちゃ、ちゃーこ逃げろお！ ソイツはバーサーカーだ！」

地面に座り込んでいた大尉が叫ぶ。こんな状態の女史に振り回されていたのか・・・。そりゃへたり込んでしまうわけだ。

「我が剣に……断てぬ物無しじゃ！」

「それ剣じゃないじゃん!？」

突っ込みながらも、ちゃーこは菊池女史の攻撃範囲の外から一気に詰め寄ると首筋に手刀を叩き込む。

「きよほっ!？」

その一撃で菊池女史は電池切れしたようにパタリと倒れた。

「はあはあはあ……。敵の兵よりよっぽど骨があつたぜ菊池女史……」

「なんだかなあ……」

狂戦士となった菊池女子を静める事に成功したが、格納庫に敵が侵入したという事はまだ解決していない。

私達は格納庫の扉が開け放たれているのを見て戦慄した。

もし、敵がTAMを使ってこちらを攻撃してきたら……。生身の私達に成す術は無い。

「大尉。敵は何人入っていったなの!？」

先に来ていた大尉に状況を説明して貰おうとしたが、大尉達もさっき来たばかりらしく、中の状況は分からないらしかった。

動くに動けない。だが、どうかして中を確認しなければ・・・  
第二波が来れば流石に危ない。

「ここに居ても仕方無いなの。皆、注意しながら中に入るなの」

判断が遅ければこの後どんな惨劇が待っているか分からない。  
そういう意味では菜乃隊長の判断は早かった。

だが、そんな命令はすぐに意味を無くす。

格納庫から敵が10名程出てきたからだ。

「ちっ！ 中のポンコツ動きやしねえじゃねえか！ テメエら整備  
ぐらいしやがれっ！」

敵のリーダーのような奴がそんな事を叫んできた。

動かない？ そんな事は無いハズだけど・・・。 T A Mは誰で  
も動かせるハズだし・・・。

という事は誰かがロックを掛けた？

いや、そんなロックなんてあったか？

私は操縦は得意だが、そういうプログラム系統には弱かった。

だから、その後T A Mが一人で動いているのを見て目を疑ってしま  
った。

「な、なんだコイツ!? 誰が乗ってやがるんだ!？」

そのTAMの搭乗者達は目の前に居る。この場に居ない魅夜が動かしているのかと思っただが、格納庫から出てきたのは6体のTAMだった。

TAM-03モクレンだけ出てきていない。

「オートで動いてるっぽいなの。こんな事出来るのは魅夜だけなの」

隊長の呟きに、TAM達は敵に向かって攻撃を開始した。

生身の相手にTAMの攻撃は一たまりも無く、一瞬にして敵は掃討された。

「ち・・・ちくしょう・・・せめて・・・一人だけでも・・・」

「ま、まだソイツ息があるの!」

隊長が叫ぶ。敵の一人が虫の息でありながら銃口を向けて撃とうとしていた。その銃口の先には・・・大尉!

「死ねっ!」

「うわっ!？」

パン! カン!

発砲音と同時に何か金属が弾かれる様な音がした。

大尉の前にTAMの手があった。

TAMが人を守った!?

「おー・・・オニユリ。サンキュー・・・」

大尉はその手の先の黒い機体を見上げながら笑った。 TAM -  
06オニユリはそれに応える様に眼光を光らせた。

TAMには・・・心でもあるのか?

いや、そうプログラムされているだけだろう。 設計者の茶目っ  
気・・・。

これを製作したものは中々ユニークな思想の持ち主のようだ。

「皆! 早く乗り込んで! この後に波状攻撃がくる可能性が高い  
の! 迎え撃つ準備をして」

『ラジャー!』

なににせよ、私達はTAMに乗る事が出来た。

ロックが掛かっていたのは敵からアクセスがあった場合のみで、  
私達が乗り込もうとするとすんなりとコックピットへ乗り込む事が  
出来た。

「よし。皆乗り込んだなの？」

「はいはい。ちゃーこはOKだぜ」

「せんもいいよ」

「香具羅問題無し」

「OKだ。隊長」

「・・・・・・問題無い」

隊長へ5人が答えた。

先に乗りに込んでいると思われた魅夜の返答は無かった。

「あれ？ 魅夜？ 格納庫に居るなの？ 応答してなの」

・・・・・・

しかし、その通信には何の応答も無かった。

私も、TAM-03に通信しようとするアクセス拒否を受けてしまった。

「おい。モクレンが無いぞ？ 魅夜どこ行ったんじゃないか？」



大尉のTAM-06オニユリが格納庫を覗き込みながら通信してきた。

魅夜が居ない？ 機体ごと？

「……嫌な予感がするよ……。もう、魅夜には会えない気がする……。」

せんが悲しそうに呟いていた。

どういう事？ 魅夜は何処に行ったの？

「まって！ 通信が入ったなの。これは……ファイル転送？ 添付動画？ ……皆、今から送るのを見て欲しいなの。魅夜からみたいなの」

「?? 動画ファイル？」

コクピットのディスプレイに隊長の期待から動画ファイルが転送されてきた。送信者はTAM-03モクレン。

魅夜が何か送ってきたらしい。

「これは……。」

それは魅夜のラストレターだった。

第18話『花の屑が語りかけてくる』（前書き）

TAM-06モクレンから送られてきたのは、居なくなっていた魅夜からのメッセージだった。

## 第18話『花の屑が語りかけてくる』

「・・・・・・・・なんのつもりだよ・・・・。 魅夜っ！」

転送されてきたファイルを開いてコックピットのディスプレイに映し出される魅夜を見て俺は叫んでいた。こんなタイミングで送りつけてくるものだ。ただの洒落じゃないハズだ。

俺の予想は辛くも的中してしまう。

『皆、見えてるかな？ え〜と・・・・。 こんな物を送りつけてしまつてごめんね。』 すぐ終わるから聞いちゃって欲しいの』

ファイルは動画ファイルだった。魅夜の映像が映し出されている。口調はとても軽いが、魅夜の表情が少し硬い。だから、俺はそれを茶化す事は出来なかった。

『これを見てるって事は敵さんあらかた倒しちゃったかな？ まさか全滅した一人が見てるって事は無いわよね？ お姉さん信じてるからね ええと・・・・、察しの通り、私は基地に居ないのだよ。今は敵国の制空圏まで来てるのかな？ 先日敵の本拠地が分かつてね。お姉さん特攻なのだよ』

「な・・・・何を馬鹿な事を！」

俺はディスプレイを叩き割りたい衝動に駆られたが、それを抑えてディスプレイを食い見る。これは動画なので、こいつに文句を言っても仕方ない。動画の中の魅夜の話は続いた。

『TAMにはね。みんなの知らない機能がいっぱいあるのだよ。隊長の超兵器もそうだけど、それぞれにとんでもない兵器が組み込まれていたりするのだよ。出力の問題で乱発は出来ないだろうけど、芽衣の機体にも隊長の機体ぐらいの火力があったりするよ。』  
お試しあれ』

「……………そうなの？」

『うん。今芽衣が「そうなの？」って聞いてくるのが目に浮かぶわ。まあ、そのあたりのリミッターは解除しておいたから存分に使ってね。メカニクじゃないのにそんな事が出来るってあたりは突っ込んだじゃ駄目よ？ 私に突っ込んでいいのは大尉の男の子だけなのだよ』

「ちつ……………ハリセンの届かない所でボケるんじゃないよまったく……………」

それを見越して言っているのだろうが、俺はディスプレイに写る魅夜に向かってハリセンをたたきつけた。その衝撃でディスプレイに写る魅夜が一瞬ブレる。

『そして、私の機体には……………。とんでも無い量の火薬が搭載されていたのだよ。そして、それを使う方法は……………自爆』

「!?!」

『……………というわけで、最後の通信なのだよ皆。せん聞こえるかな?』

「……………うん！聞こえるよお！」

動画の中の魅夜に答えるせん。 皆そこに魅夜が居るように動画  
を見ているのだろう。

『せんは困った能力でずっと悩んでたみたいだけど、今回大尉に救  
われたね。 この前の作戦の後、自然に笑ってるせんを見てお姉さ  
ん安心しちゃったよ〜』

「うん！ 大尉のおかげだよ」

『本当に良かったね。 これからも・・・花屑を守ってあげてね。  
私の分まで・・・』

「・・・・・・・・魅夜・・・・。 うん！ 分かったよお！」

せんの声は一瞬震えていたが、最後には元気に答えていた。

『次は、ちゃーこ』

「お、おう！」

『多分とっても男らしく答えてくれてるんだろうね。 ちゃーこ  
は自分の性格に悩んでたみたいだけど、それを気にしない人に出会  
えて良かったね。 本当に大尉様々だよね』

「・・・・・・・・」

『でもね、私は知ってるよ。 本当はちゃーこも女の子らしいって  
事はね。 今度その所を大尉に分からせてあげたらどうか？  
楽しみだね〜』

「・・・魅夜・・・」

ちゃーこの女らしいところ？　ちゃーこは元々女じゃないか。  
魅夜は分からない事を言うなあ・・・。

『次に香具羅。　貴女とは長い付き合いだったね。　いつも困らせ  
ちゃってごめんね？　でも、私香具羅の事とっても大好きだったん  
だよ？』

「ちょ、何恥ずかしい事言ってるのよアンタは！」

香具羅は恥ずかしそうに叫んでいたが、まんざらでもない様だっ  
た。　この二人って仲が良かったんだな。　そういえば俺が見た初  
日にもじやれ合っていたけど・・・。

『香具羅。　貴女は強い子だからもう一人でも大丈夫だよ？　う  
ん。　大尉が居てくれるから大丈夫かな？　それに皆も居てくれ  
るしね。　私から卒業する時が来たのだよ』

「・・・何よそれ・・・何勝手な事言ってるのよアンタは！  
！　ホントに勝手過ぎるわよ！」

そうだ。　魅夜は勝手過ぎる。

誰にも相談せずに一人で特攻するなんて・・・。

『次は、隊長かな？　隊長、今までありがとうございました』

「・・・うん」

動画の中でペコリと頭を下げる魅夜。 多分隊長も同じように頭を下げているんだろうな。

『ここ最近の戦闘で大尉に出し抜かれちゃったね。 でも、隊長はそれで自分の欠点を知ったハズだよ。 欠点を知った隊長は、もう同じ過ちを犯す事は無いハズだから花屑も安泰だと思う。 もう、花屑は無敵だね!』

「も、もちろんなの! 花屑の隊長は私なの! 任せて欲しいの!」

『って、偉そうな事言っちゃったけど、隊長は気にしないよね? 私、隊長のそんな寛容な所大好きだったよ。 花屑に配属されて本当に良かったと思ってる。 ありがとう隊長』

「魅夜……………」

通信の先から隊長の声が途切れ途切れになって聞こえてくるのが分かった。 隊長は、多分泣いていた。 他の者も多分泣いているのかもしれない。 俺だって……

『後、芽衣。 アンタには一言言っておきたかったのだよ』

「……………何?」

『この泥棒猫!』

「……………うん」

『多分……………うん』とか薄情な事言ってるんだろうけど、

まあ許してあげるよ。私は玉碎しちゃったからね。大尉とお幸せに。いやいやどうなるか分からないけどね」

「・・・・・・・・・・」

『でも、大尉のおかげで芽衣も感情を出せるようになったんだからそれは嬉しかったよ。ずっと見守ってたかいがあつたつてもんだよ。皆も同じだろうけどね。芽衣、もう忘れちゃ駄目だよ？ 貴女はとっても素敵な女の子なんだから。』

絶対、幸せになるんだよ？ お姉さんからの命令っ！』

「・・・・・・・・・・魅夜」

『じゃあ、取りをつとめるのはやっぱり大尉！ 大尉見てる？』

「今更何言ってんだお前は・・・」

見てなかったらこの映像も見えてないだろうが・・・。

『いや、大尉が来て花屑も変わったね。色々言いたい事はあるけど、あんまり時間が無いからちゃっちゃと済ますよ。大尉、今までありがとう』

「ああ。こちらこそな。お前が騒いでたから緊張感なんて無かったのかもしれないから助かったぞ」

『駄目よ！ 本当はお前が好きだなんて！ 私は散りゆく花・・・』

スパーン！！



俺はハリセンをディスプレイに叩き付けた。もちろん映像の魅夜にダメージを与える事は出来なかったが、つい体が動いてしまった。

『なんて。もう言えないのは寂しいね・・・』

「・・・まあな」

『でも、大尉が居るから花屑は大丈夫だと思ったからなのだよ。多分これが成功すれば・・・当分敵さんは動けないか、もしかしたら終戦なんて事にもなるかもね』

「！ だったら！ 皆で行けばいいじゃないか！ お前一人で行く意味が分からないぞ俺は！」

『チツチツチ。敵の本拠地なんだよ？ 皆で行ったらそれだけ危険でしょう？ 私一人だから攪乱させてダメージを与える事が出来るのだよ』

「・・・ちつ。こちらの反応は予想済みか」

本当は途中からライブ映像なのかと訝ったが、確認するとやはりそれは動画ファイルだった。

『あーなんか最後って感じがしないなあ。でも、もうすぐ着くみたいだから言っちゃうね。大尉・・・』

映像が少しづつ乱れてきた。画面の向こうでは、もう攻撃を受けてしまっているのかもしれない。だが、魅夜は最後までこちらを見つめていた。

「ああ……」

『大好きだったよ。本当に愛してた……。だから……。生きて大尉……。私はもう居なくなっちゃうけど……。大尉には未来を掴んで笑って欲しい……。それだけが』

私の望み

ブチン！

そこで魅夜のラストレターは終わっていた。

「なんだよ……。何カッコつけてんだよお前はっ！ お前は本当に自己犠牲が過ぎるんだよオイ！！」

ディスプレイに拳を思い切り叩きつける。

その衝撃でディスプレイが大きく揺れた。

「オニユリ内部に激しい衝撃を確認。内部センサー部を確認中……。……異常無し」

TAM-06オニユリのオペレーションシステムが衝撃を異常と誤認してメッセージを流した。

「魅夜……。……」

誰ともなしに「彼女」の名前を呼んだ。

皆動画を見終わったのだろう。

誰も他に通信しようとするものは居なかった。

そこに隊長機へ通信が入った。

「はい。 本部？ え・・・敵国の本部が・・・全滅？ はいはい。  
・・・・・・停戦協定？？ それって・・・・・・了解しました」

隊長は何処かとの通信を終えて、皆に向かって一言だけ言った。

「皆・・・お疲れ様なの。・・・・・・戦争は終わったなの」

その通信を最後にTAMは活動を停止した。

俺は今度こそディスプレイを割る勢いで拳を叩き付けた。

だが、意外に強固で俺の手が赤く腫れ上がったただけだった。

こうして俺達の戦いは終わった。

せんの二度目の予言が外れてしまったが、それは良い事だった。

彼女は「この後敵が攻めてくる」と予言したのだが……。

停戦協定が結ばれたのに攻めてくる馬鹿は一人も居なかった。

いや、運命が変わったのか。

こうなる経緯には色々な分岐点があったハズだ。

敵が打って出てくる前に攻め込んでいたら何か変わったのかもしれない。

それより、魅夜をあの時受け入れていたら……何か変わったのかもしれない。

何かをしていたら……魅夜は生きていたのかもしれない。

アイツが死んだなんて……信じられない。

つい朝方には……笑って話していたのに……。

昨日だってハリセンを振るいながら一緒に勝利を噛み締めていた

ハズだったのに……。

戦争は終わった。

だけど、それを一緒に祝う……魅夜が居ない。

俺は魅夜を女としては見なかったが……大切な仲間だと思っていた。それに友達だとも思っていた。

胸が………苦しい。

「大尉……もう、終わったなの……」

自分の部屋で塞ぎ込んでいた俺に隊長が話しかけてきた。

「何が終わったんだ？ 魅夜の人生がか？」

「……」

隊長は衝撃を受けたように仰け反ると、無言で部屋を出て行った。

俺はその日、誰とも会わずに自室で塞ぎ込んでしまった。

第19話『花の屑は桜の花』（前書き）

魅夜のおかげで戦争は終わった……。  
だけど、本当にこれでよかったのか？

俺は納得いかないまま自分の部屋に引きこもってしまった。

## 第19話『花の屑は桜の花』

戦争が終わったからって、それがなんだと言うのだろうか？

残ったのは・・・こんなにも悲しい事実だけじゃないか！

俺はその日から誰とも会わなくなった。

誰が来ても答える気力が湧いて来なかった。

「結局・・・世界が変わっても俺はこんなになってるんだな」

自嘲気味に笑う。 過去の俺も、今の俺も結局は引き籠もってしまっている。

未来を託してくれた紋治さんが見たらどう思うだろうな・・・。

「・・・そんな大尉を魅夜が見たら、どう思う？」

「！？ 芽衣？」

いつの間にか芽衣が居た。 部屋に入って来た気配は感じなかったが・・・。

それだけ俺が参ってしまったのか。

「大尉。 本当に戦争が終わってしまったわけじゃない。 多分敵

国は戦力が回復したらまた攻めて来る。 そんな時に大尉がそんな状態だと困る」

「何を言ってるんだよ！ 俺なんかどうしたって、皆強いから大丈夫だろ？ 俺はもう戦いたくない。 放っておいてくれ」

「・・・・・・・・嫌。 私は大尉が好き。 だから、何もしないで死んで欲しくない」

「・・・・・・・・芽衣」

芽衣は強い。 俺の様に魅夜の死を引き摺っているなんて事は無いのかもしれない。

その強さが今は羨ましく思えた。

「私は気付いた。 大尉が好きだって事を・・・・。 それを大尉に言えるのは、もしかしたら魅夜のおかげかもしれない」

「・・・・・・・・」

違った。

芽衣だって魅夜を思っていた。 俺だけがこうやって塞ぎ込んでいるわけじゃない。 皆、心に大きな穴を開けてしまったのだろう。

ただ、それをどう引き摺っているかの問題だ。

俺の様に、何もしたくないと思って塞ぎ込んでいるのはちょっと恥ずかしく思えてきた。



「そうだよな。俺がネガティブになるなんてらしくないよな」

「・・・うん。大尉はいつだって私達に勇気をくれた。大尉は強い人」

「いや、あんまり物事を深く考えないだけなんだけどな？ おっしっ！ 元氣が出てきたらちよっと思いついた事があるぞ。芽衣、イキナリだが聞いてくれるか？」

「うん。元氣な大尉の方が好き。・・・何を？」

「芽衣。いや、芽衣子。お前と俺は過去から来たって話さ」

俺は菊池女史に聞いた話を芽衣に話した。というより、俺自身思いついた事だったのだが、芽衣が岩倉 芽衣子で、TAMは俺と芽衣子のお爺さんの紋治さんが基本設計した物だという事、そして紋治さんが俺達に未来を託した事を話した。

すると芽衣は最初は困惑顔だったが、次第に何かを思い出すように首をひねっていた。

そして、俺の顔をじつと見たと思うと、ポツリと呟いた。

「おに・・・い・・・ちゃん？」

「そうだ。ジュンペイ兄ちゃんだぞ。芽衣子」

小さかった頃の芽衣子の面影が目の中の芽衣と重なった気がした。

昔からずっと着いてきていた幼馴染の女の子。確か六つは離れていたハズだったが、目の前の芽衣は少女から女になるうという成長振りだった。

「・・・！ お兄ちゃん！ お兄ちゃん！ 会いたかったっ！」

一気に感情が溢れる様に抱きついてくる芽衣。

だから・・・そんな体つきのまま子供みたいに抱きついてくるな  
って！

困った事に、俺は芽衣を意識しまくってしまっていた。端的に  
言えば煩惱全開だった。

芽衣の髪が頬を撫でる。芽衣の柔らかな腕が俺の背中に回る。  
控えめな膨らみが俺の胸に当たる。鼻腔に芽衣の匂いが・・・、  
芽衣の体温を感じた。

なんだ。俺って意外に元気じゃないか。

「芽衣・・・」

芽衣の体を両手で抱きしめながら、その存在を確かめるように俺  
は繋がりを求めた。

俺の唇が芽衣の小さな唇に重なろうと近づくと、芽衣はそれを見  
て静かに目を閉じた。

・・・

いいのか？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

芽衣は何も言わずにただこれから来るであろう接近を待っていた。

キスだ。 接吻だ。 ベーゼだ。

頭の中はそれだけになってしまった。

鼻息が少し荒くなってしまっていたかもしれない。

だが、此処で怖気づいてしまつては男として名が廢る。

いざ・・・・いただきます。

バン！

「大尉！ 大変だ敵が攻めてきたぜ！ .....つてアレ？ .....  
.....お邪魔だったかなあ？」

急に入つて来たちゃーこが、俺達の様子を見て仰け反つて後ずさりしていた。

ちゃーこ.....。 空気読んでくれ.....。

じゃない、敵襲！？

「はあ！？　なんでだよ！　停戦したんじゃないのか！？」

「そのハズだよ！　だけど、実際に敵が攻めてきたんだってば！」

その後、司令室へ行くと、ちゃーこが言う通りに敵の部隊がこの基地に迫っているようだった。

その数は・・・数え切れない程だった。

「どういう事だよ隊長！　戦争は終わったんじゃないのかよ！」

司令室でモニターを見ていた隊長に詰め寄ると、彼女は険しい顔をして頭振った。

「・・・ええ。表向きは終わっているハズなの・・・。多分これは非公式な部隊なの。確認したら、イーストサン側もそんな命令を出してないという回答なの」

「なんだ・・・って？」

俺は司令部のモニターに映し出される敵の映像を食い見た。　TAMが旧式と新型が入り混じって100や200では済まない数がゆつくりと進軍しているのが映っていた。

「声明が出たみたいだよー。　ええとー」我々は散っていった同

胞達の無念を晴らす為、鬼畜国家へ鉄槌を下す者。 イーストサン  
国家万歳”だつてさ。 要は逆恨みってヤツだねえ。 戦争して  
てそんな事言い出したらキリ無いじゃん」

「国際問題がどうか悠長な事は言つてられそうも無いみたいね」

何を馬鹿な事を言っているのかと思つたが、戦争なんてそんな馬  
鹿な理由で起こってしまうものだ。 一人の危険な思想に賛同して  
しまつたりして起こつたりするんだ。

その証拠にモニターには一体のTAMが先導しているのが映つて  
いた。

多分、そいつが首謀者だろう。

「丁度いいぜ！ こっちは魅夜の仇を討ちたくてウズウズしてたん  
だ！ 大暴れさせてもらうぜっ！」

ちゃーこは気合十分に拳を打ち合わせていた。

だが、モニターを見る限り数が違いすぎる。 こんな中に突っ込  
んでいったら犬死もいとこだ。

それに、俺はもう戦いたくない。

もう魅夜のような犠牲者は一人も出したくない。

「隊長。・・・後退は出来ないのか？」

俺の発言にみんなの視線が集中する。

「それは・・・」

隊長が言いよどんでいる。　まあ、聞きながら答えは分かっていたけどな。

「敵前逃亡は銃殺刑は基本だよぉ」

せんがサラッと怖い事を言う。

うん。　笑顔で言われると逆に迫力があるぞ、せん。

「それ以前に大尉は悔しくないのかよ！　ヤツラせつかく魅夜が命をかけてやった事を台無しにしようとしてるんだぜ！？」

「いや、ちゃーこ。　お前の言いたい事は分かるが・・・。　危険過ぎるだろ。　それに、魅夜がどうか言ったが、魅夜は俺達に未来を託したんだ。　それを犬死なんてしてみろよ。　天国で魅夜になんて言われるか分かったもんじゃないぞ？」

魅夜は俺達を命を掛けて守ろうとしたんだ。　それを無駄にしてしまうのは許されない事だ。　魅夜の分まで生き続ける事が、俺達のやるべきことじゃないのか？

「いいえ。　大尉、そんな事はないわ」

「香具羅・・・」

「大尉はまだまだ魅夜の事をまるで知らないのね。　あの子ならもし私達が討ち死にしても「あゝ大変だったみたいだね」って笑っ

て迎えてくれるわよ。それに、魅夜が天国なんて行ける訳無いわ。私達もだけど」

「地獄で会おうぜ・・・か」

覚悟を決めるしかないのか・・・。全く・・・こんな時代に送った紋治さんを俺は恨むぞ。

「そう。こうなったらトコトンやるしか無いわ。はじめから選択肢なんて無かったのよ」

「そうなの大尉。もう逃げ場なんて何処にも無いの。ううん。私達はね」

「私達は」という所を隊長は強調して言った。

その中には隊長と、せんとちゃーこ、そして香具羅が居る。だが、隊長の視線には俺と芽衣は映っていないかった。

「こんな作戦は私達だけで十分なの。芽衣と大尉は・・・飛んで欲しいなの」

「な・・・」

「隊長！」

飛んで欲しい。

隊長は俺達に未来へ飛べと言っていた。

それは俺達と一緒に戦うなど言っていると同じ事、このまま逃げ  
ると言っていると同じ事だった。

「いいから聞けなの！　これは上官命令なの」

「そんな・・・言ってる事が滅茶苦茶だろ！？　さつき敵前逃亡は  
銃殺刑つて言っただけじゃないか！」

「大尉・・・これは花屑隊長、樟葉菜乃華の最後の命令なの。　お  
願いだから聞いて欲しいの・・・」

「隊長・・・・・・・・」

隊長は涙を浮かべて叱責した。　樟葉・・・菜乃華？　隊長の  
名前は菜乃じゃなかったのか？

「私の本当の名前なの。　皆大尉が知っている名前では無いなの。  
そんな事はいいの。　もう時間が無いなの！　行って大尉！」

「・・・大丈夫だよ」。　大尉と芽衣が居なくてもこっちは魅  
夜がりミッター外してくれた無敵のTAMが4体も居るんだから勝  
利は確実だよ」

せんがブイサインをしながら言った。　彼女が言うのだから間違  
いないのかもしれない。

「・・・・・・・・分かりました。　隊長、皆。　お達者で・・・」

「芽衣！？」



俺が答えを渋っていると、芽衣は短くそう言つと俺の手を引いて来た。

「ジュン君。 皆の意志を無駄にしちゃ駄目・・・」

「芽衣・・・」

芽衣はこちらを見ずに俺の手を引き続けた。

彼女は涙をこらえているのか震えていた。

「分かった。 皆、元気で・・・。 絶対生き残れよ！ ジュンペイ大尉からの命令だからな！」

「当つたり前だろ！」

「私は負けないわ。 魅夜の分まで！」

「絶対大丈夫だよ」

「スクラップドフラワーの力を見せてやるなの！」

俺は最後に一人一人の顔を目に焼き付けてから、司令室を後にする。

カラン

もう、此処には帰つてこないだろうと思ひ、軍服のボタンを外して廊下に転がした。

さようなら花屑。

この一週間楽しかったぞ。

ありがとう・・・。

最終話『花の屑は・・・』（前書き）

未来へ飛ぶ決意をした芽衣と大尉。そして花屑へと迫り来る敵の大軍。

二人は、花屑はどうなってしまふのか！？

## 最終話『花の屑は・・・』

大尉と芽衣の二人が去った後、花屑の隊員達は全部で4人。

T A M - 0 1 に乗る    樟葉    菜乃

T A M - 0 2 に乗る    久々知    智亜子

T A M - 0 4 に乗る    醍禪    千代

T A M - 0 5 に乗る    天宮院    香具羅

T A M - 0 3 と T A M - 0 6 と T A M - 0 7 は欠番となっていた。

4人は自分達の機体へ乗り込みながら、それぞれに表情は硬く、そして口数は少なくなっていた。

「せん。    さつき言っていた事は本当なの？」

花屑の隊長の菜乃は薄いピンク色の機体 T A M - 0 1 ヒナギクから T A M - 0 4 キザクラへ乗っていた千代、通称「せん」に通信した。

「あゝ絶対に勝つて事お？    ごめんゝホントは自信無いゝ」

「ごめんと言いながらも明るい声で答えるせん。    いつでも笑顔をお忘れないという彼女の心情がそうさせるのだろうが、いささか今回

ばかりは声に覇気が無かった。

「だろうなっ！　だけど、大尉の期待に応えなくちゃならないからなっ！　私達は絶対に負けないぜ！」

「そうは言っても戦力がほぼ半減したっていうのはやっぱりツライわね・・・」

ちゃーこはそう言うが、香具羅も不安そうに声を上げていた。

「とにかくっ！　やるしかないなの！　私達は無敗のウエストサン国最強の部隊「花屑」なの！」

隊長である菜乃の号令で各々の機体の駆動音が鳴り響く。

決戦が始まろうとしていた。

木々が生い茂る森の上空に白と黒の機体が飛んでいた。

TAM - 06 オニユリとTAM - 07 ヒナギク。

その人型ロボットに乗っているのは芽衣と呼ばれる少女と、ジュンペイと呼ばれる青年だった。ジュンペイは階級が大尉なのでその

ままだ「大尉」と呼ばれる。

そんな二人は2機のTAMで基地から少し離れた森へとやってきていた。

この森の奥に「コールドスリープ装置」がある研究所跡があるというのだ。

「……………ジュン君、こっち？」

「ああ、芽衣子。この辺りだっと思うぞ。記憶が確かならな」

二人が注意しながら森を探していると、丁度森の中には似つかわしくない小さな鉄筋コンクリートの1階建ての建物があるのを発見した。

「！！ あれだ！」

「……………分かった。ジュン君降下して」

その建物の横にTAMを降ろして二人は「岩倉研究所」と書かれた看板がある建物へ入っていった。

「やっぱり数が……………！ ちゃーこ！ 香具羅！ せんを守ってあげてなの！」

「そんな事言ったって！」

「くっそおおお！ てめえら邪魔なんだよ！ どけえええ！」

「うわあゝ・・・困まれちゃったよお・・・」

花屑隊員達が敵の大群と対峙して数分で、その圧倒的数に押されようとしていた。

せんの乗るTAM-04キザクラは戦闘に特化してない工作用の機体なので困まれてはたまりも無かった。彼女の機体は数々のトラップ装置が内臓されているが、それも設置する暇が無ければ意味が無い。

奮闘するちゃーこのTAM-02ボダイジュや香具羅のTAM-05キキヨウは一撃一撃で敵を確実に仕留めていたが、敵は湯水のように沸いて出て思うように動けなくなっていた。

隊長機のTAM-01ヒメユリは強力な兵器を搭載しているが、サポートするTAM-06オニユリが居なければ発射することは自爆行為に過ぎなかった。元々の性能は悪くないのだが、いかにせん火力不足だった。

「不味いな・・・。リミッターが外れて運動性能も火力も上がっているけど・・・キリが無い！」

敵側の新型TAMも混じっていたのだが、それすらも雑魚のように個々を圧倒しているが、それでも敵はいくらでも次々に来る。

こちらのTAMの燃料が切れるのが先か、相手がこちらを打ち落とすのが先か・・・そんな状況だった。勝ち目があるのかと言われれば、どう見ても未来が見えない。

だが・・・。

「くそう！ 攻撃はたいしたこと無いつてのに！ 虫みたいに次から次へと！」

前方に対峙する3体のTAMを同時に蹴り倒してちゃーこは息を吐いた。

操縦技術と運動神経は花屑1なのだが、そんな彼女にもすでに疲れが出始めていた。

一瞬動きが止まってしまい、そこを狙って撃とうとしていたTAMを香具羅が打ち落とす。

「ちゃーこ！ 油断しないで！ まだ来るわ！」

助けてくれた香具羅に通信モニター越しにサムアップしてから、ちゃーこは自分の頬を両手で挟むように叩く。

「わかってら！ おっしゃあ！ てめえらまとめてかかってこおい！！！」

「うんもおー！ 地面や海中だけが魚雷じゃないんだよお！」

そう言つて敵から距離を取ったと思うとTAM-04キザクラは両手を左右に広げた。

そこから何か光るものが飛び出る。



しかし、それでは何も起こらなかった。

敵のTAMがこけおどしと思いキザクラに近づいた瞬間

チュドーン！

敵のTAMが爆発。

「空中魚雷だよ」 近付けるものなら近付いてよお」

「超兵器だけがヒメユリじゃないの！ ブレイズブレードお！」

TAM-01ヒメユリは光状の剣のような武器を取り出し振り回す。一太刀する毎に真つ二つになっていく敵TAM。

皆、各個撃破ならば負けはしなかった。

しかし

「あはははは！ やりますわね！ 花屑！ だけどこのG-TAMには勝てませんわよ！」

敵のTAMから外部スピーカーにてそんな笑い声が聞こえてきた。

その音声の出所には金色に光ったTAMが一体。

この大群を率いていたTAMだった。

「私の金月がお相手いたしますわ！　銀月の仇・・・取らせて頂きます！」

超スピードで迫り来る敵の隊長機。

「な、なんだ前の馬鹿みたいなのが居るぜ!？」

ちゃーこはそれを見つけて挑みかかる。彼女の性格上強そうな相手がいると真っ先に飛び出してしまうのだが・・・。

「遅いですわ！　・・・・・・・・まず一体」

ドゴン!!

金色のTAMがちゃーこのTAM・02と交差したと思うとTAM・02はそのまま地面に倒れてしまった。

「ちゃーこ!？」

「ちゃーこ！　大丈夫なの!？」

「ちゃーこお！　反応してっ！」

赤いペインティングのTAM・02は通信を返してこなかった。

岩倉研究所。

「・・・・・・・・」

そこには何度も来た事があつた彼は、その内部で懐かしさと同時に何か焦燥感にかられていた。

「・・・・・・・・・ジュン君・・・・この奥がそうだったね」

安息室と書かれたプレートが掛かっていた部屋を指して芽衣が言った。

「安息」という文字にちょっと不謹慎な気がしたが、眠るのには変わりはない。

だが・・・

「なあ・・・芽衣子。このまま本当に眠ってしまったていいのか？」

「・・・・・・・・・・」

芽衣は答えなかった。その手が安息室の扉の取っ手を握る。

「さつきせんは大丈夫って言ったが・・・。大丈夫なら俺達が飛ぶ必要なんて無いだろ？ そうじゃないのか？」

「・・・・・・・・・ジュン君・・・・」

「俺は確かに幸せな世界で暮らしたい。だけど、このま飛んで・・・逃げたら絶対に後悔すると思うんだ。魅夜が体を張ってくれた事、皆が逃がしてくれた事・・・それを後悔すると思うんだ」

「・・・・・・・・でも、それは・・・皆の意志・・・」

弱々しく芽衣は言いながら、ドアノブを回す。

「だったら！ 俺達の意志は！？」

芽衣の肩がピクンと震えた。

「俺達は・・・いや、芽衣は皆を見捨てていいのかよ？ お前は」

大尉の言葉はそこで止まった。

止められた。

芽衣がドアノブを握る反対の手でハンドガンをこちらに構えていた。

「ジュン君・・・。 もう手遅れ。 私と一緒に飛んで・・・」

「芽衣・・・子・・・お前・・・」

「このままもし戻っても・・・多分無駄。 私はジュン君に死んで欲しくない。 だから戻るって言っなら・・・ジュン君を撃って私も死ぬ」

銃口は間違いなく大尉の胸元を捉えていた。 後は引き金を引くだけで済んでしまう。

彼女は中途半端な気持ちで此処まで来たわけでは無い。 その意志の強さがそのまま行動に現れていた。

「・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・大尉。よしと言って欲しい……。私は撃ちたくない」

芽衣の銃を握る手が震えている。その瞳にも涙が零れていた。

そんな芽衣を見て、大尉は一呼吸してからまっすぐに芽衣の目を見て言った。

「撃てよ。芽衣」

「!?!」

「今、大尉って言ったな？ お前だつてやっぱりこのまま飛ぶのを躊躇っているんだよ。だったら、撃つて二人で此処で死ぬか、戻つて玉砕するかどちらでも同じ事だろう？」

「・・・・・・・・そんな……。私は……。私はやっとジュン君を思い出して……。」

「・・・・・・・・だからって花屑での事は忘れてしまうのか？」

「!?! そんな事無い！」

「だったら……。やっぱり答えは始めから決まっていたんじゃないか。時間を無駄にしたな」

「・・・・・・・・ジュン君……。うつん大尉。ごめんなさい」

「いや、俺も此処に来るまで決心が付かなかったんだ。良かったよ。最後に此処が見れて」

「……………最後じゃない。私は死ぬつもりは無い」

親指を立ててサムアップしてくる芽衣。

それに大尉も応えるように親指を立てる。

「おっ！ そうだよな！ 俺達で全部ぶった倒してやろうぜ！」

「うん！」

数分後、白と黒の機体は最大全速で戦場へと向かうのだった。

「あははははははははは！ 弱い！ こんなヤツラに私達が負けていたなんてちゃんちゃら可笑しいですわ！」

「くう……頭悪そうなのにあの機体の運動性能ってヤバイんだけど……」

「確かに前の銀月並みの脳細胞っぽい。だけど、実力が裏付け

されてるから余計に悔しいなの」

「・・・リミッター外して動いている分こっちの機体はもう持たないよー」

花屑隊員はちゃーこを失って更に戦況が苦しくなっていた。ちゃーこの機体は不時着していて、その機体自体は攻撃を受け無かった事が幸いして形は保っていたが、香具羅、せん、菜乃隊長に守られながらやっと無事でいるというだけという状況だった。

生死は分からないが、まだ大破したわけじゃない。

「せめて援軍が来てくれれば・・・本国に援軍要請はしたなの。だけど・・・いつ到着するか・・・」

「はぁ！？　今まで私達だけを戦わせてた本国に何が出来るつてのよ！　当てにならないじゃない！」

「！　ううん！　そんな事無いよぉ！　こちらに接近してくる機体があるよ！」

せんのTAM-04キザクラが索敵範囲に新しい反応があるのを発見した。

皆は一瞬味方の援軍かと思ったが

「！？　敵のTAMの反応だよぉ！　まだ来るのぉ！？」

味方のTAMならデーターがあるのですぐに分かるのだが、飛んで来たTAMは識別不能の機体だった。　という事は敵の新型の可能性が強かった。

「・・・でも、たった1体？　？　まって！　反対方向から2体の

TAMが・・・これはっ!？」

「大尉と芽衣なの!!」

香具羅と菜乃隊長の策敵レーダーに味方機の反応。

TAM - 06とTAM - 07だった。

「待たせたな隊長! 派手にやってるみたいだな!」

「・・・・・・ただいま。皆」

「芽衣! 大尉! 貴方達なんで戻ってきたなの!・・・・そう言うてる場合じゃないの! もう、後でお説教なの!」

「了解だ!」

「了解」

そう言いながらも菜乃隊長の声は震えていた。

本国の援軍よりも心強い援軍だったのかもしれない。

「大尉! ちゃーこが墜ちたなの! 守りながらだけど頑張ってる!」

「ちっ! また特攻しやがったな!? 世話の焼けるやつだ」

その時、動かなかったTAM - 02が静かに駆動音を鳴らした。

「ん・・・・。あれ? 私・・・・げっ!? 墜ちたのか!？」



「お目覚めか？ お姫様。早く体勢を立て直せ馬鹿！」

「お、おう！ って大尉！？ ……ちつくしう！ かつこ悪いところ見せちまつたぜ！ 名誉挽回といきますか！」

「ちゃーこの機体はダメージを受けていたが、まだ動けるようだった。」

そこに寄って来る敵TAMをまた次々に蹴散らし始める。

「皆、少し伏せて・・・リミッターキャンセル確認。ライトブラストウェーブ発射」

芽衣の機体のヒナギクから高出力のビーム兵器が飛び出した。

その光線に触れた敵は次々に爆砕していく。

「おおーバスター！ って感じだな 俺も俺も！」

芽衣の攻勢に嬉々としながらTAM-06オニユリも発砲する。

一発一発は他の機体よりは弱かったが、その射撃は的確に敵を捉えていた。

「ガンシューティングワンコインクリアの実力なんだよ実は」

この時代の人間の菜乃隊長達には分からなかったが、芽衣には分かったようでクスリと笑うのが聞こえてきた。

「ええい！ 2体増えただけで何を押されているんですの！ あんなのは一捻りなんですわよ！」

外部スピーカーを最大音量にして叫ぶ金色のTAM。

「なんだ？ 前の銀月って馬鹿みたいなヤツみたいなのが居るな？」

「そうなの！ 他のTAMとは比べ物にならないの！ 大尉、芽衣！ 気を付けてなの！」

「ラジャった！」

「了解」

「こっちは数で勝ってるのよ！ 押して押して押しまりなさいですわ！ キヤ！？」

大声で叫び続ける金月は急に衝撃を受けたように前のめりになった。

大尉や花屑誰も金月を狙って居ない。

金月の後ろからの発砲だった。

「何ですの！？ どの馬鹿が間違えましたの！？」

外部スピーカーのままそんな事を叫ぶ金月のパイロット。 やはり頭は悪そうだった。

「間違えてないよ。 狙ったのよウフフ」

金月の後ろから一体のTAM。それは先程飛んで来た敵の援軍だと思っていた機体だった。金月と同じように外部スピーカーを使って答えていた。

「……………おいおい。隊長あれって……………」  
「ええ、間違いないなの……………」

ちゃーこと隊長は呆然とそれを見ていた。

金月に反抗したTAMの外部スピーカーから流れた音声に聞き覚えがあった。

「……………あの馬鹿…………… まあ最高の援軍って事なのは確かだな」  
「わあゝい 援軍援軍」  
「……………馬鹿……………」

そのTAMに乗っていた者を皆が確信して同時にその者の名前を呼ぶ。

『魅夜!!』

「はああゝい 皆元気だったかなあ？」

外部スピーカーから聞こえてくる声は死んだと思っていた魅夜の声だった。

その後金月のパイロットと魅夜の口論が始まった。

「き、貴様！ お前はあの特攻してきたTAMのパイロットですね！？ 捕まえておいたハズなのにどうやって・・・」

「あゝら、レイラ少将？ あの程度の牢が破れない私だと思ってたのかなあ？ 舐められたもんだわ。私も」

「き、気安くわたくしの名を呼ばないで頂戴！ 名乗った覚えはありませんわよ！？」

「だから舐めないでっば。貴女を舐めさせてくれるなら別にそれはそれでいいけどねえ。そうそう。TAMの制御システムに穴があるなんて知ってた？」

「制御システムに穴あ！？ 何を言ってますの！？ 誰か早くコイツを落しなさい！」

「もう遅いのだよレイラちゃん。ほおら、ポチッと」

「な・・・何をしたの！？」

「全TAMの活動停止&脱出不能ボタン押しただけなのだよレイラ」

「むきー！ そんなものがあるなんて聞いてませんわ！？」

なにやら次々に動きを止める敵TAM達。

戦場は一気に静寂に包まれていった。

「もちろん。私の乗せて貰ってるヤツにはそのシステムは適応されないけど。後、この機能は敵味方関係なくTAMって形式の兵器は全部動かなくなるのだよ。まあ、ウチの花屑の機体は元々改造してあるから大丈夫だけど」

魅夜の言葉通り、こちらの機体はどれも動きを止める機体は無かった。

それより魅夜がここまでTAMについて詳しい事に驚いたが、それと同時に込みあがってくる感情を大尉は自覚した。

「……………魅夜っていいところ取りし過ぎだよな」

「……………うん」

……………

その後、動く事が出来ず、脱出も出来ない敵TAMを大量に戦地に残したまま、花屑隊員達は無事に基地に戻る事が出来た。

その後現れた本国の援軍により敵のTAM達は、解体され、全員捕虜となっただらしい。

大将格のレイラ少将はイーストサン、ウエストサン両国により裁判にかけられるらしい。

だが、そんな事は花屑・・・彼等にはどうでも良い事だった。

皆が無事に生き残ることが出来た。

それだけが大事だったから・・・。

花屑基地内にて

「ウチの司令室のコンピューターに岩倉モンジって人のデータベ  
ースが残ってたのだよ」

「は？」

「それを解析したら色々分かってね。で、今回の行動に出たわ  
け」

「・・・特攻したってウソついてまで？」

「いや、それはウソじゃないのだよ。脱出装置が働くとは思わ  
なかったのだ。で、敵国に捕まったんだけど、敵国の方にもデー  
ターベースがあって、そっちにはより詳しい情報があったので利用  
させて貰ったよ。ほら、最後に発動したアレね。アレって二度  
と解除出来ないタイプらしいよ」

「じゃあ・・・もう戦争は終わったの？」

「いやあゝ。 私達みたいにあつちも改造してくるだろうねゝ。  
暫くは開発とかで無理だろうけど・・・」

「それまでは、休戦って事だあ やったあ」

「はいはい。 でも、今回の事で最前線から本国を防衛する方へ編成されるような通達があつたなの」

「えゝ。 本国嫌いゝ」

「うん。 そういふと思ったなの。 キツパリお断りしたなの」

「さつすが隊長 んで、大尉、芽衣はこのまま残るって？」

「さあ？ それは二人に聞いてみたいと・・・」

## 基地付近の荒野

「まったく・・・。 あのまま戻らなくてもなんとかなつたんじやないか・・・」

大尉はうなだれたように呟いた。 それに同意するように頷いて芽衣は微笑んだ。

「・・・うん。 だけど、私達が戻った時皆嬉しそうだった

ね  
「

「……………だな」

「…………これからどうしよう?」

「そうだな……。しばらく戦闘も無いだろうからこのままこの時代に居てもいいかもしれないが……」

「時間はたっぷりある」

「そうそう。 ゆっくり答えを出せばいいんじゃないかと思うんだ。紋治さんが「平和に暮らせるように」ってあのTAM停止機能をつけてくれたけど、それは解決策になってないからなあ……」

「うん……」

「それに……」

「?」

「芽衣に言っ てなかった事があるしな」

「?? 何を……?」

「いや……。改めて言っ てなかったって事で……。一度は言っ たんだが……。あの……。そのな?」

言いよどんで何度も咳払いをしながら大尉は顔を赤くして芽衣から視線を逸らした。



「うん。 何？」

その視線を追いかけるように芽衣が大尉の周りを回る。

そうされて観念したように大尉は芽衣に向き直ると、真剣な眼差しを向けて呟いた。

「芽衣・・・、あの・・・。 俺はお前を」

一陣の風が吹いた。

その風が何処からか花びらを携えて宙を舞わせていた。

その花は桜の花。

それを昔の人は花屑と呼んだ・・・。

## 最終話『花の屑は・・・』（後書き）

これにして「花屑」は終了です。

これまで呼んでくださった方々、本当にありがとうございました。

文法や色々なところに至らない所はあったと思いますが、それでも応援してくださった多数の方々に感謝したいと思います。

次回があるか分かりませんが、その時がありましたらよろしく願います。

では、お疲れ様でした。

花屑 作者：霧香 陸徒

実はエピソードがありますがこちらは公開しません。ご了承ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3891d/>

---

花屑

2010年10月16日01時49分発行